

一大圓體にして、其の天に向ふ方面僅かに光あり而して其の頂點には、眞珠液の如き海あり。此れより天の門戸に達する階段あり、又た此れより地球に下る道路あり。魔王は則ち此れよりして、世界の光景を見下したる也。

彌耳敦は少壯の時に於て、ガリレオにも會見したる程にて、固より太陽中心説の眞理なるを認めざるにあらず。彼は實に『失樂園』中、天使が亞當に向て語りたる句中にも、亦た自から述べたる句中にも、之を表示したり。故に嚴密なる論理より云へば、彼は同一の詩中に、二個の反對學説を採用したりと云はざるを得ず。されど彌耳敦に向て、嚴密なる天文學上の定規を當て箴むるが如きは、白髮三千丈の句を證據物として李白を虚言漢と訴ふるに均し。吾人は唯だ彌耳敦が、一方にトレミーの地球中心説を採用しつゝ、他方に於て太陽中心説を示したるの、忠實なる心掛を尋酌して可也。

七二 失樂園の梗概

物語の梗概

吾人は既に、『失樂園』の宇宙觀を説けり。此れより更らに、其の物語の梗概を掲ぐ可し。

神の大使命の謀叛

當初は、天と混沌あるのみ。而して天は所謂の光明、自由、幸福、榮耀の靈慧たる高所にして、其の眞中に神あり、無數の天使。此に奉仕す。或日神は、其の御子を側に、坐せしめ、天使等を召して、其命を傳へて給はく、今日御子を産し、彼をして汝等の君たらしむ。汝等宜しく予に奉仕する如く、奉仕せよと。衆皆な萬歳と呼ぶ。獨り其中に於ける大天使、心甚だ平ならず、遂に謀反を企て、其の同類を語らひ、茲に一味徒黨の面々、愈々反旗を翻へし來る。

平和なる天界の激戦

此に於て平和なる天界は乍ち修羅の衢となれり。二日の間、激戦あり。而して其の三日目には、神子自から一萬の雷公を率ゐ、雲車に御して追撃す。蓋し反徒を塵にするは、其志にあらず。唯だ驅逐すれば足るが故に、特に混沌の門戸を開き

遂に地獄
の中に陥

て、彼等を其中に擠せり。彼等は進退維に谷まり、自から措く所を知らず。然も雷公等の追撃急なるが爲めに、九日九夜唯だ下へくと落ち行き、遂に地獄の中に陥れり。而して之れと同時に、地獄の門戸は鎖され、神子は雷公等を率ゐて、凱旋せり。此の如くして、從來天と混沌のみなりしが、混沌の底を割して、地獄の新領土は出で來れり。

世界と人
との創造

之れと同時に神は、神子に向て、豫て計企せられたる如く、此期に於て、反徒の爲めに生じたる陷缺を、補はんが爲めに、世界と人とを、創造せんことを命せり。此に於て神子は、天の門を開き、混沌に出で、車を止めて、黄金の磁石を握り、自から立つ所を中心點として、茲に世界、即ち吾人の所謂る宇宙を、經始せり。其業は六日にして成れり、最終日には地球の主たる、男女出で來れり。而して七日目には、神子は其の新たに創造せられたる世界より繋がる、階段を上りて、天に還り、神に向て其の復命をなせり。此に於て從來の天と混沌と、地獄とに、更らに一の世界を加へ來れり。

魔王と
大會

却説安からぬは、魔王の心也。彼は九日九夜混沌中を落ち行き、更らに九日九夜、奈落の底に呻吟して、漸く己に復り、其の黨與を集めて、大會議を催せり。魔王先づ口を開らき、衆論を徴せり。或者は天に向て復讐を號び、或者は開戦の不利を陳べ、現狀に辛抱す可きを唱ふ。最後に神の創造したる者を破壊するを以て、寧ろ現時に於て、可行的の妙計ならずやと、演ずる者あり。是れ宛も魔王の意中を道破したるもの也。

魔王の偵
察

群議一決、魔王自から其の偵察に出で掛く。彼が地獄の門戸を出で、混沌に入らんとするや、罪と死とは、其の門戸の守護として、容易に彼を通過せしめざる也。然も彼は遂に之を開かしめ、千辛萬苦、漸く混沌の中程に到れり。此處には混沌と、夜とが、其の政應を設け居れり。彼は此處にて、始めて其の偵察せんとする新世界が、既に創造せられたるの事實を、詳にしたり。

混沌の頂
上に達す

此の快聞に接し、魔王の勇氣は百倍し來れり。彼は烈火の三角塔の如く、聳然として混沌の裡を攀ち上れり。而して漸く混沌の頂上に達せり。彼は此の所より

Paradise Lost.
A
POEM
IN
TWELVE BOOKS.

The Author
JOHN MILTON.

The Second Edition
Revised and Augmented by the
same Author.

LONDON,
Printed by S. Simmons next door to the
Golden Lion in Aldersgate-street, 1674.

題標本卷二十〔版再〕園樂失
〔版出教倫 年四十七百六千〕

遂に地球
に達し
樂園に
降下

魔王の誘
惑

杜市と彌耳敦

三二六

して、新に造られたる世界を見たり。即ち黄金の鎖にて、天門より繋かれたる、萬有の世界也。

魔王は漸く目的に接近したり。彼は此の世界の外皮に飛び移れり。されど彼は其中に入るを得ず。漸くにして其の頂點に、一の微光の中に、階段あるを見出せり。是れ天使が天と地球との通路也。彼は直ちに此れより、太陽の光を認めて、此に赴けり。彼は此處にて、太陽の番人ウリエルに接觸し、自から其の前身を隠しつゝ、番人を欺きて、其の指點によりて、地球が阿那の邊に在るかを詳にし。遂に地球に達し、樂園の側なる嶺頭に降下せり。

此れより如何に魔王が、其の誘惑を逞うし、而して遂に亞當、夏娃が禁果を喫し、樂園を追放せらるゝに到りたるかは、更らに『失樂園』の解題中に、之を陳述するを便宜として、姑らく其の話を、此處に於て終結するも、遺憾なかる可し。

七三 失樂園解題(一)

『失樂園』の解題は、極めて單簡に、其の骨組丈に、止め置く可し。蓋し詩は詠ずべくして、解す可きものにあらず。況や『失樂園』の本色は、全篇の趣向豊富、脚色の巧妙なるにあらずして、此の平凡なる題目を、盲詩人の詩想によりて、如何に崇美化したるかにあれば也。乃ち解題の如きは、所謂る言詮に墜つ。是れ天地間無二の大作を、凡化し、俗化し、拙化し、惡化するものにして、記者の罪や輕からざる也。但だ世或は之によりて、此作に對する概念を得る者あらば、亦た聊か彌耳敦の罪人たるを償ふに、庶幾からん歟。

本來『失樂園』は、全篇十卷なりしも、一六七四年、即ち彌耳敦終焉の年の再版に於て、改めて十二卷となせり。而して今に至る迄、十二卷として通行せり。乃ち解題は、卷毎に其の極めて大意を掲ぐ可し。

(第一卷)は劈頭に於て、本詩著作の目的を言明し、先づ全篇の大綱を、最も單簡に

大評定の來評定所出

括説す。而して直ちに本題に入る。舞臺は乃ち地獄也。天より追竄せられたる魔王、及び其の同類は、九日九夜、熱火池中に驚倒しつゝ、ありしが、魔王先づ己れに復り、其の黨類の重なるベルセバップを呼び醒まし、互ひに其身の振方を談じ、先づ火池中より荒野に上り來る、ベルセバップ亦た隨ひ來る。而して其の黨類も、魔王の召喚に應じて、何れも群り集りぬ。斯くて彼等は、此處に陣列を組み、魔王は彼等に向て、訓示的演説を始む。其の要領は、天に復歸するの師を起さん乎、將た聞く所によれば、新たなる生物の居住する、新たなる世界創造せらるゝ由なれば、此を奪はん乎と云ふにあり。斯くて「バンドモニアム」、即ち大殿堂は出で來れり。是れ魔群の大評定所に充てんが爲め也。然も此の大評定に参加するは、唯だ魔群の最高幹部のみと知る可し。

大討論の開始と對全

(第二卷)の舞臺は、大評定所也。此處にて大討論は、開始せられたり。魔王は先づ口を開らき、各員の意見あらば、遠慮なく陳述せよと云ふ。此に於てモロック、ベリ

魔王自から新世界の踏査

アル、マムン等の魔魁等、或は對天開戰を唱へ、或は現状維持を説く。最後にベルセバップは、先きに魔王の諷示したる、新世界に言及し、或は之を破滅する乎、或は之を占有する乎、若くは其の住者を味方とする乎、全能主に對する復讐は、此れより妙計なかる可しと切論す。衆議此に一決す。誰か能く此の新世界を踏査せん乎、何人も之に應ずる者なし。此に於て魔王自から其の大旅行の任に當らんと申出で、魔魁等皆之を賛成す。會議は此にて散じ、評定の結果は、一般の魔群に報告せらる。而して彼等は魔王の留守中、何事を做す可き乎、或者は地獄を探檢せり。〔詳細なる地獄の探檢録を挿む〕。斯くて魔王は、地獄の門戸に到れば、罪と、死との門番に妨げられ、辛くも之を通過し、遂に混沌界の難行苦行を経て、漸く新世界の空間に掛りたる光景を望む。彼は方さに此に向て、其の行程を啓かんとする也。

全能主と神子の代り

(第三卷)は、舞臺替りて天となる。全能主は魔王の來るを見、之を神子に指點し、彼が如何なる企謀を有し、且つ如何にして成功するかを語り、而して縱令人間墜

魔王樂園
下の附近に
降る

落するも、若し救主あらば、遂に救済せらる可きに及ぶ。此に於て神子は自から進んで、人間の爲めに身代りとなりて、其罪を贖はんことを請ふ。全能主は之を允可し、天使皆な其徳を讃頌す。舞臺再轉、魔王は、新造の世界、即ち吾人が所謂る宇宙の外邊に到る。彼は此處彼處と彷徨す。而して其の頂點に於て、一の入口を見出し、此れより内部に下り、遂に太陽球に到る。彼は自から身を變じ、新造の世界見物に、天より降れる新參の小天使として、太陽の守神たるウリエルを欺き、守神によりて、何處の方角に地球のあるかを詳にし、遂に樂園の附近なる、ニフアテス山嶺に下降す。

七四 失樂園解題 (二)

魔王愈々
誘惑の手
掛りを得

ウリエル
の忠告と
去る魔王の
逃

(第四卷)は、魔王が低徊願望して、其の全能主に對したる謀反を、悔恨し、其の漂浪の現状を憤慨するに始まる。猛情中に炎し、兇相外に露はる。此迄彼の行動を注視したるウリエルも、始めて魔王が小天使にあらずして、其實は惡靈たることを知れり。魔王は愈々惡念の臍を固め、エデンの樂園に向ふ。樂園の光景を詳記す。彼は始めて亞當と夏娃とを見て、其の形容の美妙にして、兩人の幸福の情態を詳にし、自から驚嘆するを禁じ得ず。然も魔王は是非共、彼等を失墜せしむ可く決心し、偶々兩人が智慧の樹に就て語り、若し其果を喫すれば、死の罰を被る可しとの對話を聞き、始めて誘惑の手掛りを得たりと悦ぶ。却説ウリエルは、陽光に乗じて、天國(天と混同する勿れ、天は神神子、天使の居る所也)天國は新たに創造せられたる、而して人間の未だ墜落せられざる以前の樂園也)の門衛たる、ガブリエルに忠告して曰く、惡靈混沌を過ぎて、太陽に徑し、

神子の罪
罰と魔王
及び兩人

天使マイ
ケルと亞
當

か愧恥、罪惡の念、俄然として兩人の間に出で來る。兩人交々相答じ、
 (第十卷)神子自からエデンに下降し、亞當、夏娃、及び魔王に向て、其懲罰を申渡す。
 此に於て魔王は、其の住所に還り、「バンデモニアム」の大評定所に於て、魔群に
 向て、其の旅行の効果を説示す。看よ魔王を始め、彼等は悉く皆な蛇となれり。罪
 と死とは、地獄よりエデンに上り來りて、此を占有せんとす。然も全能主は、其の
 神子によりて、死と罪とが、遂に衰亡す可きを豫言し、更らに天使に命じて、地球
 を従前より粗惡ならしむ。是れ墜落せる人間の住所なれば也。亞當と夏娃とは、
 懺悔痛恨、自から禁せず、唯だ神に祈願して、強ひて慰安を求むるのみ。
 (第十一卷)神子の執成によりて、天なる神は、天使マイケルをエデンに遣はし、人
 の前途を示し、特に代贖の希望を示す。マイケルは亞當に向て、其の近くエデン
 より、追放せらる可きを告げ、更らに彼を高山の巔に導き、天地開闢より、大洪水
 に至る歴史を、彼の眼前に開展す。
 (第十二卷)マイケルは更らに、洪水以後の以色列の歴史より、基督の降誕、基督教

兩人樂園
の失墜と
大團圓

の傳播に至る事を語り、其の神子の贖罪の爲めに、人間の救濟せらる可きを繰
 り返へし。斯くて彼は亞當と夏娃とを導き、エデンの門に到る。時に猛烈なる天
 使チエルビムは、下降し來り、炎々たる神劍を揮ひ、將に彼等を追立てんとする
 に似たり。彼等兩人は樂園を失墜して、半は悲傷し、半は救濟の希望を懷き、一步
 樂園を回顧し、一步前途を瞻望し、遅々として、其の寂寞たる行路を辿るを以て、
 大團圓と爲す。此に至りて魔王なく、地獄なく、神なく、天なく、天國なく、天使なし。
 剩すものは唯だ人類の影象あるのみ。

七五 全體の結構

失樂園に對する一片の觀察

失樂園愛讀の理由

今更ら『失樂園』の文藝的評價を下さんとするは、嗚呼の沙汰也。然も尙ほ無言にして、通過する能はず。請ふ試みに其の一二を語らしめよ。敢て之を以て斷案とするにあらず、唯だ一片の觀察のみ。

何故に『失樂園』を愛讀する乎、此の疑問に對して、ストップ・フォー・ド・ブルックは、三個の理由を與へたり。曰く、第一其の物語の面白き爲め也、第二其の美妙なる章節の爲め也、第三其の技巧の卓越せるが爲め也、第四以上の三者が、超偉なる天才の想像力によりて、赫灼たる總體を造り、一致を成したれば也。是れ固より一面の觀察也。而して博士ジョンソンは曰く、『失樂園』は讀者賞嘆して卷を掩ひ、再び之を緝くを忘却する書籍の一也。何人も此れより長からんことを望むものなけむ。其の誦讀は快樂にあらずして、寧ろ義務に屬す。』と、是亦た一論也。

其作の不朽が爲め

平凡なる好題

作者の力に對する大なる成就

三十七八年戰役に於て、露國の兵士が、滿洲の塹壕中に於て、『失樂園』の露譯を讀みつゝありしとは、英國觀戰記者の記事中にあり。彌耳敦は固より選擇せられたる少數者に訴へたらんも、其の題目が時間、空間に超越して、無邊永久なるは、偶々其作をして不朽、普遍ならしめたる所以にあらずして、何ぞや。露國兵士の之を愛讀したるが如きは、蓋し主として、其の物語に興味を惹きたるが故ならずんばあらず。

凡そ眞成の大作は、素人には素人相當の受用あり、玄人には玄人相當の受用あり。乃ち『失樂園』の如き、日曜學校の生徒にも、其の物語としては、面白く、然も其の崇美、莊嚴の偉觀に至りては、天下の文宗も、叩頭尙ほ足らざるを覺えしむるものなからず。吾人は此點に於て、返すくも彌耳敦が、好題目を捉へ得たるを賀せずんばあらず。漫に平凡也と云ふ勿れ、平凡なるが故に好題目たる也。彼は單に其の時代に制限せられず、地方に局限せられず、人種若くは國民に極限せられざるのみならず、直ちに天、樂園、地獄等を其の舞臺となし、神や、神子や、

魔王や、天使や、人を以て、其の役者となしたり。但だ此の如き大題目は、殆んど總ての作者を絶望せしめ、多くの作者を失敗せしめ、極めて少數の作者をして、遲疑、呻吟せしむるに拘らず、彼は何等の辛苦なく、之を成就し、而して其の餘力は、却て他の『復樂園』と『サムソン、テゴニス、テス』に及べり。吾人が賀するは、此の題目の天地、古今、人類一般に通用するが爲めのみならず、更らに作者たる彼の性格、教養、閱歷、才能等に最も恰當したるが爲め也。金扇を揮うて、綺筵に舞ふは、好女也。鐵棒を揮うて、戰場に馳するは、勇夫也。他人に於て、奇蹟と思ふ事も、彌耳敦に於て、尋常なるは、彼が力の之に相應するものあれば也。

吾人は『失樂園』を讀む毎に、恰も埃及の沙漠に、突兀たる金字塔を見るの感なくんばならず。吾人は其の積み上げたる一石に就ても、築き成せる一室に就ても、固より其の非凡の伎倆を感ず。然も吾人をして、感嘆禁ずる能はざらしむるは、其の總體の結構也。而して其の背景の荒寥、漠遠、縹渺、杳冥なるが爲めに、愈々其の崇美の觀を、鮮明、深刻ならしめずんばならず。

失樂園と總體の結構

但だ彌耳敦や然らず

博士ジョンソンの批評

惟ふに崇美と、虚誇とは、相距る一步のみ。苟も其の力足らざる者にして、強ひて崇美の感を挑起せしめんとす。其の結果は、失敗に止らずして、却て其の反對なる虚誇に、終らざるもの少し。彼の壯句、豪字を排列し、自から得たりとするは、恰も兒童が鬼面を被りたるが如く、徒らに傍人をして、失笑せしめずんばならず。但だ彌耳敦や然らざる也。

博士ジョンソン曰く、『彼の詩の特色は、崇美にあり。彼は時としては自から降りて、優雅たることあり。然も彼の原質は偉大也。彼は時としては愛嬌を以て、自から處するあり。されど彼の本來の態度は、巨大なる峻高にあり。彼は人を樂ましむる必要あるに際しては、樂ましむることを得る也。されど彼の獨特の力は、人を驚かすにあり。』と、是れ彌耳敦を評し、併せて『失樂園』を評して、大過なきに庶幾し。彌耳敦に對して、同情少なき文士の言、既に此の如し。況んや其の他をや。『失樂園』は、大體に於て、驚嘆す可き大作也。

七六 主人公は誰ぞ

不完全にして美の大作的

マコレイが『失樂園』を、完好の大作と稱したるは、彼の少年客氣の言のみ。吾人はテイエと與に、不完全にして、崇美なる大作と斷ずるを以て、適評と認めずんばあらず。若し仔細に解剖し來らば、其の脚色にも、其の結構にも、將た其の章節にも、文句にも、幾多の缺點あらむ。此の如きは、専門の批評家に一任して可也。但だ吾人は、此作の龍頭蛇尾たるを、遺憾とせずんばあざる也。

十二卷に飛過氣を

蓋し彌耳敦の健翮の、最も高翔したるは、第一卷と第二卷とにあり。三卷以下に到りては、漸く下降の傾向あり。然も寧ろ驚異とす可きは、十二卷を打ち透して、何等の故障なく、一氣呵成に、飛過したるにあり。此の如き雄飛は、古今詩人未曾有と云ふも、甚だしき華詞にあらず。未だ知らず、彼が氣魄の分量幾許ぞ。

極力の描寫は魔王

『失樂園』を讀んで、第一に生ずる問題は、誰を以て、其の主人公となすかに在り。或は曰く、魔王也。或は亞當也。或は曰く、遂に主人公なしと。何れにもせよ、作

魔王と大天使の面影

者が極力描寫したるは、魔王其物也。『失樂園』の魔王は、大江山の酒吞童子にあらずして、寧ろ奈翁と相似たり。然も彌耳敦が奈翁を模型として、魔王を描かざりしは、『失樂園』が、奈翁出生百餘年前に出版せられたるを以て、知る可し。乃ち却て奈翁は、魔王を模範としたるやも、未だ知る可らざる也。

魔王の人格とカイルの斷定

魔王は墮落したる大天使也。されば大天使の面影は、地獄の底に於ても、群魔評定の席上にも、混沌界旅行に際しても、天使と衝突の場合も、樂園闖入、夏娃誘惑の時にも、概ね然らざるはなき也。彼は寧ろ人の長たる奸雄の資格ありて、決して碌々、倅々の小丈夫にあらず。

の涙を垂れざるにあらざれば彼の怨毒心や、無上也然も樂園の中に、無心、無罪の男女が、徜徉、和樂するを見ては、之を誘惑するの無情なるを解せざるにあらざれば、彼は純惡にあらざり、善惡錯綜し、唯だ最後に於て、惡根恒に善根に打克つのみ、吾人は幾度か魔王に對して、同情を献げんと欲し、強ひて自から抑止せり。乃ちカイライムの如きも、彌耳敦は魔王の人格に於て、自個の特立獨行の兀傲なる精神と、運命の打算に超越する氣象とを、露呈せりと斷定したり。是れ詮鑿に過ぎたるも、幾分の眞理あるに似たり。

然も吾人をして、臆測を逞うせしめん乎、彼は王政恢復の時に於て、幾度か昔時の哥倫に想著したらむ。若し哥倫をして、今日にあらしめば、奈何、彼は廢竄して自から屏息す可き乎、抑々彼の大勇猛は、彼を崇拜し、彼に愛著する義徒を糾合して、再舉を謀る可き乎、彌耳敦は眞摯なる信徒也、彼は魔王の味方にあらずる也。されど彼は詩人也、彼の想像は、聖書の文句以外に、馳騁するを禁ずる能はざる也、惟ふに彼が魔軍敗潰、魔王沒落を叙するに際して、豈に其の政治、及び社會

王政恢復の
時哥倫
に想著

魔王の粉
本は哥倫

魔王の一
去と舞臺
の寂寞

の現狀に接觸せずして已まん哉、此の如くして彼は、賤しむ可き魔王よりも、寧ろ畏る可き魔王を描き、畏る可き魔王よりも、時として驚嘆す可き魔王を描きたるには非ざるなき乎、而して魔王の不用心的粉本として、哥倫其人の影子は、恒に彼の腦裡に來往したるには非ざるなき乎。

されば魔王一たび舞臺を去れば、恰も主人公を亡ひたる饗宴の如し。縱令酒は川の如く、肉は陵の如く、清歌妙舞、風雲を驚かすも、轉々寂寞の感を免れざるが如し、其の龍頭蛇尾の譏あるも、是れ作者の力の足らざるにあらず、全體の脚色、固に如何ともす可らざるが爲めならず、吾人は魔王の去るを惜み、併せて魔王が本書を通じて、漸次に墮落し往くを惜しむ。

二個の大なる矛盾

失樂園第一卷第二
と光の氣魄

第七章 晩年の製作と其の終焉

七七 時代思潮の代表 (一)

何人も仔細に、『失樂園』を讀破したる者は、二個の大なる矛盾を認めざるを得ざる可し。そは一方に於ては、此の題目が時間空間を超越し、世紀國民を無視したるに拘らず、他方に於ては、其の内容の極めて時代的にして、且つ國民的なることは是れ也。而して此の矛盾は、寧ろ却て『失樂園』をして、深甚、微妙なる意義あらしむる所以にして、且つ天下後世をして、痛快、緊切の興味を、覺えしむる所以ならずんばあらず。

スキデダスの歴史中に於て、其の文藻の秀峙したる一は、ペリクレスの雅典戰死者を弔ふの演説也。左傳中に於て、出色の文字の一は、呂相絶秦の書也。前者は偉麗にして、頌揚の神品とも稱す可く、後者は曲辯、飾辭を逞うしたるに拘らず、尙ほ辯護士の口舌の最上乘と云ふ可し。然も之を『失樂園』の第一卷より、第二

卷に於る魔王及び魔群幹部の和戰大評定の討論に比すれば、何れも其の氣魄、光焰の稀薄なるを感ずるを、禁ずる能はざる也。

モロックの主戰論とベリアルとの平和論の展開とベリアルの起立の影を寫す

モロックの主戰論に對し、ベリアルが平和説を唱ふるや、其の大主義に於て、到底反對し難きを覘破し、先づ一應之を承認しつゝ、更らに利害上より打算し、其の不可なるを陳し、其の狀宛も笱皮を剝ぐが如く、咄々人に逼るの概あり。惟ふにモロックは胡濇菴にして、ベリアルは秦檜也。秦檜の論法も、彼が巧妙には若かざる可き也。而して更らにマムモンの賛成論あり。全會の氣色、既に八分通りは、現狀維持に傾かんとするや、局面更らに開展し、乍ち天外一奇峰を生じ、ベリアルは、現狀維持に傾かんとするや、開口一番直ちに、平和の特む可らざるを喝破し、滿場の情氣を攪醒し來る。而して徐ろに説いて、『失樂園』の題目に入る。吾人は如上の討論を目して、到底詩人の空中樓閣と信ずる能はず。惟ふに是れ豈にビム、ハムデン輩の長期議院に於る、活ける雄辯の影寫にあらずして何ぞや。吾人は地獄の火土に於ける、大評定所よりも、寧ろウェストミンスターの大議場を聯想

獨闢の乾坤を占得

せずして、止む能はざる也。

蓋し沙翁の該撒劇中に於けるブルタスの演説に對する、アントニイの演説は、此種の絶頂と云ふ可きに庶幾し。然も彌耳敦の史詩中の大討論は、甲論乙駁以外に、別に最後の論脈を打開し來る。乃ち此點に於ては、彼は獨闢の乾坤を、占め得たりと云ふを妨げず。吾人は英國の古文書、古記録を繙き來りて、當時の討論の光景を、其の片言隻語中より撫拾せんよりも、寧ろ『失樂園』の魔群幹部の討論中より、其の傳神的、光景を想像するの、却て眞を得るに近きを、信せざらんとするも能はざる也。

大評定と英國議會議法の

尙ほ看過す可らざるは、彌耳敦が魔群大評定を叙するに際して、英國議會の議院法を、殆んど其儘適用したるの一事也。英國の議會に於ては、最初に勅語あり、國王自ら朗讀し、或は代讀せしむ。而して其の勅語に對して、賛成、若くは修正の動議出で來り、兩黨の首領交々相討論す。惟ふに彌耳敦の此の大評定を描くや、其の腦底豫じめ此の議院法ありしならむ。但だ國王の位置に立つ魔王、自から

討論の席上に列し、之に参加したる丈は、英國議會には其例なきも、其他は總て相同じと云ふも妨げず。

時代の鏡
と作者の
人の鏡
其

若夫れ魔王が、「驩迎す、戰慄よ、驩迎す、無間地獄よ。天より最も遼遠なる汝地獄よ、汝の新領主を受取れ。汝に來れる主人は、場所も變ずる能はず、時間も移す能はざる精神を有するぞ。精神は精神を以て、住所と爲す。而して此の精神や、地獄を以て天と做す可く、天を以て地獄と做すべし。」との一節の如き、知らず是れ天より墜落したる、魔王の傲語なる乎。將た世と背き、時と違ひ、獨り衰朽の躬を、敗殘の餘に剩したる、盲詩人の述懐なる乎。吾人は記して此に到りて、『失樂園』は、時代の鏡たるのみならず、更らに作者其人の鏡たるを、識認せずんば、あらず。豈に曾だ作者が、自から暴露し來れる第一卷、第三卷、第七卷、第九卷の端緒のみと云はん哉。

七八 時代思潮の代表 (二)

大なる
時代の
意味の
思潮の
表作的
物作

彌耳敦は、自から時代思潮の代表的詩人たるを、屑とせざりしならむ。されど彼が主觀的性格は、其の作者を、作の中心とするを、禁ずる能はざりし也。既に作者を無視する能はずんば、焉んぞ作者の周旋したる時代を、無視するを得ん哉。此の如くして、『失樂園』は、世界的不朽の大作たると同時に、亦た清教徒の一大詩史也。即ち大なる意味に於て、時代思潮の代表的作物也。時代とは、其の著作せられたる、査ス二世の墮落時代にあらず、エリザベスより、クロンウェル末期迄を云ふ也。

彼の教養
と思想見

彼は世の所謂物識り學者にあらず。されど其の教養は、當時に於て比類罕なりと云ふ可し。而して彼は思想、見識に於ては、極めて不羈、獨立なると與に、復た時代の兒たりし也。別言すれば、彼は其の思想、偏僻、習慣等に於て、同時代と頗る共通の點多かりし也。されば彼の書中の役者は、上は神より、下は亞當、夏娃に至る

亞當に對する破的の名評

テームの評言

迄、概ね當時の清教徒的習氣あるを免れざる也。而して此の習氣の存する所、尤も吾人に多大の興味を興ふ。

テームは其の佛人たるが爲めに、此の習氣を看破するには、頗る炯眼なりしが如し。其の評言は、稍々冷酷に失するも、概して正鵠を外れざるに似たり。特に亞當を評して、彼は英國を經由して、樂園に入れるものなりとの一句は、殆んど「失樂園」中の主人公、若くは副主人公とも云ふ可き、亞當に對する破的の名評たるに庶幾し。何となれば、彼れ亞當は、其の言語、動作、一として清教徒的英國士人の習氣を脱せざれば也。

若夫れ亞當が夏娃をして、天使を饗應せしむる一節の如き、テームは之を評して曰く、何たる好家妻ぞ、若し亞當が議員候補者たる場合には、彼女は若干の投票を、田舎紳士中より贏ち得可き乎と。又た曰く、彌耳敦の耶和華は莊重の君主にして、何となく查斯一世に似たりと。又た曰く、彌耳敦の神様は、學校教師が生徒の過失に陥るを前知し、他日文句なしに鞭撻の快を逞うせんが爲めに、豫じ

意外の副産物の

大なる獲物は彌耳敦の眞影

彼の畢生の心事

め校則を説示するものに似たりと。此は餘りに酷評也。併ながら現時の知識程度に於ては、何人も「失樂園」の神學に、頗る不感服の點多きを免れざる可し。然も詩は神學にあらず、吾人は此によりて、寧ろ當時の思潮の美化せられたるを見て、意外の副産物を得たるの感を做さざんばあらず。

然も此れよりも大なる獲物は、彌耳敦其人の眞影也。或る評者は、第三卷の一節より五十五節、第七卷の一節より三十九節、第九卷の一節より四十七節を以て、其の自叙傳の歴卷と云へり。されど吾人は、最も第六卷の二十九節より、三十七節に至る句を愛す。是れ蓋し天使アブヂェルに對する賛辭なるも、其實は夫子自から道ふ所なれば也。曰く、「神の家來よ、天晴れ出來せり。謀反せる多數の敵に打ち向ひ、隻手を揮うて、彼等の武器よりも、威力ある言論にて眞理を護持し、天下の非難を事ともせず、暴行よりもより大なる、苦痛を忍びて、眞理の證明をなしぬ。蓋し汝の拳々服膺するは、假令世を舉げて、汝を邪惡と審判するも、唯だ神の前に義とせらるゝにあれば也。」と、嗚呼是れ彼の畢生の心事也。

本色の歌
行と戯曲

杜市と彌耳敦

三五二

魔王と婦
人の弱點

樂園退去
の大團圓

彌耳敦の本色の歌行にありて、戯曲にあらざるは論なし。然も彼を稱して、全く此れなしと云ふは非也。試みに魔王が夏娃を誘惑するの一齣を見よ。魔王も一度は夏娃の無邪氣と、美麗とに打れて、茫然たりし也。されど其の本然の魔性に立ち返り、珍物と、諂諛とを以て、彼女を誑さんと企てたり。魔王は實に婦人の弱點を知れり。好奇心と、虚榮心とは、實に女性の二大弱點也。魔王既に此の管鍵を握る、此れより歩々醜弄し來る、豈に其の必然の結果を疑はん哉。若夫れ亞當が夏娃の失墜を見て、自から失墜覺悟しつゝ、禁果を喫したるが如き而して其後、互に交々相咎め、遂に夏娃が其の過を謝して、せめて霎時にもせよ、我等夫婦の生存する際、兩人間に平和あらしめよと、結ぶに到る迄、尋常有り觸れたる物語なるに係らず、讀者をして、覺えず息を吐くの餘地なからしむる也。

若夫れ彼等が樂園退去の大團圓の如きは、所謂る悲哀の快感を挑起し、人をして低徊止む能はざらしむ。吾人は彌耳敦が戯曲を以て、本色にあらざると云ふも、彼は全く戯曲的技巧を有せざるにあらざる也。要するに『失樂園』の大作は、千

態萬象、あらゆる現象を網羅す。吾人の評説は、僅に其の一端に過ぎざるのみ。

七九 復樂園 (一)

復樂園に於て一瞥に

彌耳敦の畢生の志望は、『失樂園』の完成と與に、遂行せられたる也。然も彼は尙ほ餘勇を鼓して、其の伴隨者たる『復樂園』及び其の劇詩としての最後の試みたる『サムソン・アゴニステス』とを出せり。吾人は今茲に『復樂園』に就て、聊か一瞥を與ふるの必要を感ず。

復樂園の附庸

『復樂園』の『失樂園』に對するは、猶ほ月の太陽に於けるが如し。乃ち月なきも、太陽あるを妨げず、然も太陽なければ、月なき也。要するに『失樂園』は、『復樂園』なきも、單行す可き大史詩也。されど『復樂園』は、唯だ『失樂園』の附庸として、其の存在を許さるゝに過ぎず。作者に於ても、既に一切の經緯は、『失樂園』に於て諒知せられたるものとして、茲に其の後篇若くは續篇を構成したるのみ。吾人は兩詩を、連帶するものとして、相稱するを得可し。されど決して對立するものとして、相稱す可らざる也。附庸は殷盛なるも、何處迄も附庸也。

極めて單純の筋書

『復樂園』の名は、仰山なれども、其實は僅かに基督が荒野に於て、惡魔に誘惑せられつゝ、遂に之に打克ちたりと云ふ、極めて單純の筋書に過ぎず。即ち其の要領は、新約聖書馬太傳第四章の一節より、十一節に到るもの、若くは路加傳第四章の一節より、十三節に到るものに、若干の肉と文とを加味したるに過ぎず。今夫れ亞當、夏娃が、魔王の誘惑に打負けて、樂園を追はれたるを以て、『失樂園』の楔子とせば、基督が惡魔の誘惑に打克ちたるを以て、主眼とする此詩を、『復樂園』と云ふも、必ずしも妥當を缺くと云ふ可らず。而して兩詩の間、自から照應の妙あるや、論を俟たざる也。

復樂園の本事と基督

然も若し眞に『復樂園』の本事を叙せんとせば、少くとも基督が自から十字架に上りて、人類の爲めに、其罪を贖ふに至る顛末に及ばずんば、未だ全しと云ふ可らず。されど此の如きは、是れ『失樂園』の後に、更らに一の『失樂園』を作する也。吾人は精彩、燦爛、金碧陸離の大作の後に於て、却て此の淡墨、白描の『復樂園』を得たるを見て、寧ろ其の兩者相濟ふの、却て悦ぶ可きを認め、敢て其の『失樂

兩者相濟ふの悦び

園』に比して見劣りのするを遺憾とせざる也。而して世或は『復樂園』を目して彌耳敦の未完稿と猜するが如きは、恐らくは作者匠心獨造の苦を諒とする能はざる、擔板漢の言ならむ。

抑々彌耳敦は、果して當初より此の題目に手を染むる企圖ありし乎、否乎。將た其の年少の友生エルウードの小話が、偶然にも彼の心機を、此に向けしめたる乎。勿論一六四一年の頃、彼が他日大作を試みる可き題目として、記載したる覺帳の中には、新約聖書中より、且つは基督一代記中よりも、種々の標記なきにあらざるも、未だ『復樂園』の前身と覺しきものを見ず。之に反してエルウードの自傳の所記は、如何にも尤もらしき筋合なきにあらず。其の要領は左の如し。一六六五年、彌耳敦が倫敦の疫病を避けて、バッキンガム州に在るや、エルウード彼を訪ふ。彼一の稿本を出し、携へ還りて之を讀ましむ。エルウード之を披けば、乃ち『失樂園』の原稿也。『予は之を一讀し、之を携へて彌耳敦を訪ひ、其の好意を謝して、之を返附せり。彼は予に向て之を好むやと問ひ、予は恭しく且つ有體

復樂園の経路著

エルウード自傳の所記

復樂園の事は何の事か

に、其旨を答へたり。斯くて話次予は、氣輕げに彼に打ち向て曰く、御身は既に『失樂園』に就て多く語り給へり、未だ知らず、樂園復興の事に就ては奈何と。彼黙して答へず、聊か思ふ所あるが如くして坐せり。須臾にして話頭は、他に轉じ去れり。疫病止みて彼が倫敦に還るや、予彼を訪ふ。彼更らに一の稿本を出して之を示す。題して『復樂園』と云ふ。彼欣然たる語調もて語りて曰く、此の稿本は、一に君に負ふ所あり。君が過般、『復樂園』は奈何との質問を發する迄は、予實に未だ此の題目に考へ及ばざりし也。』と、吾人は大體に於て、此言を據る可しと做すもの也。

然らば則ち、其の製作は何の時なりし乎。吾人はマッソンと與に、『失樂園』出版以前に、既に其の完成を告げたりしならむと、猜定する也。即ち彼が避疫の爲め、地方寓居中に之を始め、一六六六年中には、之を脱稿し、其の翌年一六六七年、『失樂園』出版の際には、作者の手許には、既に稿本として完成したるもの、如し。若夫れ何故に之を『失樂園』と同時に、出版せざりし乎に到りては、多少の理

復樂園の製作時代

由あらんも其の重なる一は、作者が之を以て、『失樂園』の如き大作と同一視せざりしが爲めならずんばならず。

八〇 復 樂 園 (二)

復樂園と失樂園との優劣問題

マコレーは、彌耳敦が『復樂園』を以て、『失樂園』よりも優れりと做したるの謬見は、吾人之を承認するに遲疑せずと云ひしも、吾人は未だ彌耳敦が此の如き謬見に陥りたる事實を見出さざる也。惟ふに彼の姪フリップが『世上一般の批判は、『復樂園』を以て、『失樂園』より頗る劣れる作として、非難したり。然も作者たる彼は、斯る評判を聴く可き、辛抱力を有せざりしなり。』との一句は、遂に後世をして、斯る速了の誤解に陥らしめたるにあらざるなき乎。吾人は彌耳敦が『復樂園』に對して、世評の賸々たるを憤慨したらんと推察す。然も此を以て、直ちに彼が『失樂園』に優るの傑作となしたりと、臆定す可き理由なき也。蓋し作者は、『失樂園』には、『失樂園』に相應する待遇を與へ、『復樂園』には、『復樂園』に相應する待遇を與へんことを、期待したるなる可く、徒らに『失樂園』を頌讚して、『復樂園』を貶斥するを以て、其の衡平を得たるものにあらずとした

復樂園の
賞讃者

るならむ。果して然らば吾人も亦た作者と同感也。但だ世上には寧ろ『復樂園』を優れりとせずんば少くとも之を以て完璧となすの評者なしとせず。博士ジョンソン曰く、若し此詩の作者にして彌耳敦ならず、他の摸倣者たらしめば、其の天下一般の讃揚を博せんこと、必せりと。ウォーグウォースは、之を目して、彌耳敦詩集中の最も完備、圓成の作と云へり。然も此の如きは、唯だ世人が餘りに、『失樂園』に眩惑せられて、却て閉目して、『復樂園』を看過するに對して、特に此中に、彌耳敦の及ぶ可らざる美妙の點あるを指示したるに過ぎず。東海道汽車の旅行に際して、富岳の爲めに、函根を忘るゝ勿れと云ふは可也。されど函根の景は、富岳に優ると云ふは非也。

復樂園の
内容と作
者の伎倆

『復樂園』に於ては、基督と惡魔以外には、何等の役者なく。荒野、山嶺、聖殿の絶頂以外には、何等の舞臺なく。所謂る戀愛もなく、罪惡もなく、喧嘩もなく、和睦もなく、兩手に汗を握らする如き、きせど際疾き刹那もなく、人の涙を零す可き、情愛の閃めきもなし。唯だ基督は拒み、惡魔は誘ふの、單簡なる脚色なるに拘らず、四卷二千

十二分の
老腕

行の長篇を、殆んど一の情句なく、殆んど多くの蕪詞なく、朱絃疏越、絃外餘韻を剩まし。人をして枯淡の裡、別に滋味あり、生硬の中、更らに秀腴を帯ぶの感ありしめたるが如き、是豈に尋常作家の能く夢想する所ならん哉。

パチソンの
評言

吾人は此作を稱して、強弩の末と云ふに憚らず。されど其の餘威の尙ほ鐵札を貫くに到りては、實に作者の老腕の十二分なるを、識認せざらんとするも能はざる也。パチソン曰く、『復樂園』に於ては、彌耳敦は、更に一層の嚴酷なる文調を使用せり。此詩に於ては、彼は單に想像を檢束したるのみならず、更に殆んど之を壓止せり。彼は、聖書の文句を増大せり、されど未だ原文にあらざる事情を、添加したるとなし。僅々二十行の散文、聖書中に於ける、惡魔の基督を誘惑する記事を、釋述して、何等の出來事をも追加せず、何等の旁徑にも立ち寄らず。滔々二千行の無韻律詩と倣すの、伎倆に到りては、轉々驚嘆せしめずんばあらずと。又た曰く、彌耳敦は曾て云く、詩は素樸、敏感、熱情を以て、要旨とすと。蓋し熱情を騰らしむるもの、素樸に若くはなし。而して『復樂園』に於ては、彼は衣被素樸、殆ん

熱情と素
樸

豪華落盡
見天真

杜市と彌耳敦
三六二
ど裸體たらしめんとす。蓋し此作や恐らくは、あらゆる言語に現存する詩として、最も無飾の詩たる可しと。何れも持平の見たるに庶幾し。
吾人は『失樂園』に於ては、彼が苦境を見るも、未だ其の老境を見ず。然も『復樂園』に於ては、併せて其の老境を見るを、禁ずる能はず。老幹亭々、葉なく、花なし。是れ此詩の特色にして、亦た以て彼の詞腸の漸く硬化し去りたるを、想ひ見る也。然も是れ所謂『豪華落盡見天真』もの耶、否耶。

サムソン
に就ての
概評

八一 サムソン (一)

『復樂園』は、一六七〇年、『サムソン・アゴニステス』の劇詩と與に、二百二十頁の小八折本として、特に彌耳敦の自費にて、出版せられたり。彼が何故に、『失樂園』の出版者シムモンズに委託せざりしやは、其の『失樂園』第一版一千三百部、賣却済の料金として、一六六九年四月に、五十圓を受取りたるに拘らず、其の再版の漸く一六七四年に出で來りたるを見れば、惟ふに書肆の怠惰は、彼をして自費出版の己むなきに、到らしめたるにあらざるなき歟。そは兎も角も、此の兩書を一冊となしたるは、唯だ何れも單行本とするよりも、合本とするを以て、出版上の便宜としたる以外には、何等の理由なきが如し。吾人は此れより更に、『サムソン・アゴニステス』に就て、概評を試みんと欲する也。

彌耳敦は史詩家として、世界に轟けり。されど彼の素志は、寧ろ劇詩家たるにありし也。彼は既に『失樂園』の或る部分を、劇詩として屬稿したる程たりし也。而

彼の素志
は寧ろ劇
詩家

四圍の情
況と彼の
中年以後

して彼は何故に、其の素志を抛つて、史詩を作りし乎。或は自から其の天分の前者にあらずして、後者にありしを覺りしが爲め乎。彼は少壯の時に於て既に『アーケデス』を作れり、既に魔神ゴムスを作れり。而して此の二作は、劇詩として、傳唱せられたるのみならず、更らに脚本として、舞臺に於て實演せられたり。然も四圍の情況は、彼の中年以降に於ては、復た少壯輕快の才華を、戯曲に煥發せしむるを許さざりし也。乃ち一六四〇年、長期議院召集の頃より、彼の演劇に對する意見は、著しく變化したり。彼は此れよりして、觀劇者たることを罷めたり。然も戯曲ドラマ、寧ろ悲劇トラジコ其物に對しては、文學の絶頂として、之を崇敬し、詩人の最高最健全の理想を開陳す可き、無上の體制として、之を嘆美したり。されば彼は、『失樂園』の題目を採取したるも、尙ほ之を劇詩として、制作せんと企てたりし也。然も四圍の情況は、愈々演劇に反對し來れり。一六四二年九月二日、長期議院は、國難の存續する際、一切の演劇を停止し、倫敦の劇場を閉鎖せり。此れより王政恢復に到る十八年間、演劇は全く跡を英國に絶てり。斯る場合に於て、如何に世

演劇の停
止と彼の
史詩

畢竟手段
の問題耳

俗の戯曲と彌耳敦の劇詩と、其皮相を一にして、其の内容を殊にするにせよ、強ひて此に頼りて、其の大作を試みんとするは、彌耳敦としては、寧ろ思慮を缺ぐ仕打と云はざるを得ず。彼が史詩を擇びたるは、故らに荆棘を避けて、坦途に就きたる也。然も是れ畢竟主義の問題にあらずして、手段の問題なれば也。彼は主義の爲めには、固より水火をも辭せざる也。此の如くして彼は、『失樂園』を成せり。而して其の隨伴者たる『復樂園』も出で來れり。今は世に思ひ殘す所なし、彼豈に其の少壯の理想を試みずして已まん哉。

最終の重
なる一詩

此の劇詩の出來したるは、恐らく一六六七年、『失樂園』出版の後、『復樂園』完成の後ならむ。若し此を以て、彼が最終の詩と云ふ能はずんば、少くとも其の重なる一と云ふ可し。即ち彼が詩腸の最後の苦汁を、此に傾け盡したりと云ふも、過言にあらざる可し。然らば則ち彼は、何故に此の題目を擇みたりし乎。吾人は既に一六四一年の、彼が覺帳中に、サムソンに關する二個の題目あるを、發見する也。其の一は、サムソンがフィリスチン人の婦を娶る、初度の結婚より、此に牽聯

サムソンの境遇と彼の境遇と

したる争端に及び其二是サムソン晩年の境遇即ち彼が其の祭日に於て、フィリスチン人に復讐する顛末に至る。されば此の題目は平生彼の胸中に爛熟したる一と云ふ可きに似たり。然も彼が最後の作として此の題目を採りたる重なる理由は彼の境遇とサムソンの境遇とが多くの點に於て相類似するが爲めにあらずして何ぞや。吾人は此の悲劇を單に盲詩人掉尾の傑作として見るよりもサムソンを假りて彼の胸中三斗の痛恨を吐き出したる自叙傳として看るを以て寧ろ作者の意を得たるに庶幾しと信ずる也。

八二 サムソン (二)

サムソンの筋書

「サムソン・テ・ゴニステス」の筋書は概して舊約聖書士師記の第八章より第十章に至る事實を演劇化したるに過ぎず。蓋しサムソンは以色列人の魁首にして神の申し子也。彼は不思議の靈力ありて以色列人をフィリスチン人の抑壓より濟ふ可き運命を擔うて出で來れり。然るに彼の初婚のフィリスチン婦人は彼を欺きて彼の秘密を敵に賣れり。彼の再び接近したる婦人は彼を欺き彼の靈力の本源の彼の髮毛にあるを聞知し彼の睡眠に乗じて之を切斷し、彼を縛してフィリスチン人に渡せり。サムソンは其の兩眼を抉られ爾來囚奴となり銅鏈に繋がれ磨を挽き居たり。斯る折しも彼の髮毛は漸次に生じ來れり。時恰もフィリスチン人の祭禮に際し彼を呼び來りて其技を演せしむ。彼之に赴き神に念じて其の靈力を恢復し祭場の大廈を倒し總てのフィリスチン人の觀覽者を殺し彼も亦た之と與に壓死せられたりと云ふ。是れ士師記の要領

寧ろ甘んじて
神罰に

也。而して彌耳敦悲劇の筋書は、更に左の如しと爲す也。
サムソンは、ガザの牢屋にあり。彼は囚奴也。盲目也。彼は苦役に服しつゝある也。此日宛も異神の祭日にて、彼は霎時休業し、牢屋の外なる幽僻の一隅に坐し、清鮮の大氣を呼吸し、獨り冥想に耽りつゝあり。時に彼の友人、若くは以色列同族等、彼を見舞ひ來り、何れも彼を慰藉せんとす。斯くて彼の老父、マオナ亦た來りて、彼の憂悶を霽らさんと勗め、償金もて彼の自由を、贖はんことを告ぐ。而して此の祭日も、畢竟フィリスチン人が、サムソンの手より救はれたる感謝を、異神に捧ぐる爲めなることを告ぐ。然もサムソンは之を聞て、寧ろ其心を痛めたりし也。彼曰く今日の境遇は、自業自得也。予は贖はれて自由たらんよりも、寧ろ甘んじて神罰に服せんのみと。

病める獅子
の如く

老父はサムソンを贖はんが爲めに、フィリスチンの首長等と、會見す可く去る。而して其後には、彼を囚奴たらしめたる彼の再婚(?)の婦、ゲッラは、彼と相對して、世辭、追從、辯疏、文句等の々、嗷妮々を費す。又たハラッファなる大力の輕薄兒來

神の攝理
を讚美し
て、局を
結ぶ

りて、頻りに彼を調弄す。彼は病める獅子の如く、瞋る。斯くてフィリスチンの役人出で來り、此の祭禮に際して、首長及び民衆、彼の力技を觀んことを求むるを告げ、彼を誘ひ行かんとす。彼は佛然として之を拒み、再び彼に近くなからしむ。然も彼は、やがて是れ神の御召なりとの感想を、胸中より生じ、方さに行く可く、心機を一轉したる際に、役人は再び出で來り、若し來らずんば、是非とも引ずり行かんとする、氣勢を示す。
彼は祭場に赴く。而して舞臺一轉、彼の老父は、久しからずして其子の自由を、贖ひ得可き希望を齎らし出で來る。然るにサムソン在らず、却て遙に一大叫喚を聞く。是れ何事ぞ、使者は、息を切らして馳せ來る。老父は何事ならんと聞けば、彼は祭場に於ける顛末を物語る。即ちサムソンは、自から斃れて、併せて敵を塵にしたる也。斯くて彼の老父は、サムソンは、サムソンの如くして斃る。彼は英雄的生涯を、英雄の如くして終れりと云ふ。斯くて合唱は、神の攝理を讚美して、局を結ぶ。

此の悲劇
と作者の
小序

老後の思
想と年來
の劇

杜甫と彌耳敦

三七〇

此の悲劇には、特に作者の小序を添へたり。彼は何故に其の晩年に於て、特殊なる悲劇を作りたるかの理由を辯疏したり。蓋し王政恢復以來、俗悪なる演劇は、勃然として頭を擡げ來りたるに拘らず、英國の識慮ある人士中には、尙ほ戯曲を以て罪惡の媒介物視したる、習氣少からざるが爲めに、作者をして張膽明目、其の自から之を作りたる所以を、明白ならしめたるならむ。

彼は、『古來の悲劇は、總ての詩中に於て、最も嚴肅に、最も道義的に、且つ最も有益なるもの也。』と斷定し、其の證據として使徒保羅パウロさへも、希臘悲劇作者ユリピデスの詞句を引用せりと云ひ、而して之を以て、他の俚鄙、俗醜の喜劇と、混同す可らざるを説き、彼が特に古代希臘の作者を模範として、合唱コラスと、活動の一致とに、心を用ひたるを語り、更らに此作は、讀む可き爲めに作りたるものにして、演ず可き爲めにあらざることを、言明したり。活動の一致とは、一切の興味を主題に集中して、敢て散漫ならしめざるを云ふ也。此の如く苦心慘淡の結果、漸くにして彼が老後の思出にして、年來の理想たる劇詩を、成すことを得たりし也。

彌耳敦詩
中於熱
情凝塊
於於熱

古典的
精神の
豐富
の偉大

八三 サムソン (三)

人或は曰く、理情に勝てば、散文可也、情理に勝てば、詩可也と。蓋し「サムソン・アゴニステス」は、彌耳敦詩作中の總てに於て、最も強度なる熱情の凝塊也。彼は一個のサムソンなる古人を藉りて、其の胸奥に蟠屈、鬱積したる不平、痛恨、幽愁、悔恨等、あらゆる最後の絶叫を、做せり。所謂る字々皆血、句々皆涙、而して之を行るに莊重、冷嚴、崇高、蒼勁、簡古の詞を以てす。其の百代に雄視する、亦た宜べならずや。

ゲーテ晩年、エクケルマンに語りて曰く、『予頃彌耳敦の「サムソン」を讀む、蓋し近世諸家の作中、未だ此の如き古典的精神の豐富なるものを見ず、彼れ彌耳敦や、實に偉大也。』と。然も彼の古典的精神や、若し仔細に之を解剖せん乎、吾人は希臘、希伯來の二大要素の、極めて微妙なる化學的抱合を、此中に看取せずんばならず。即ち其の體制に於ては、作者自ら明言したる如く、希臘悲劇を典型

此の中核
には作者
の活

としたるに相違なき也。然も其の敵讐に對する大赫怒、神明の冥護に對する大信心の如きは、分明に是れ希伯來的にして、希臘の教養と、希伯來の理想とを、打て一丸となしたるものにあらずして、何ぞや。

然も之を目して、古貌、古心と云ふは、皮相の見のみ。此の中核には、則ち儼乎として、作者自身が活躍し居るを知らずや。乃ち作者の名を掩うて、之を讀むも、其の傑作たるは、誰れしも疑を容れず。然も作者の何人たるを詳にして、之を讀まん乎。其の興味は、十倍、百倍、千萬倍せずんばあらず。世或は之を以て、彼の少壯の作魔神と比較し、兩者の間に軒輊を試みんとするが如き者あり。是れ實に没分曉の極のみ。マコレイが魔神を揚げて、此を抑へたるが如きは、畢竟評者が、學窓を飛び出したる即今の境遇によりて、輕率なる判断を下したるに過ぎず。蓋し「サムソン・アゴニステス」は、老人が老人を相手として、書きたるもの也。身自から人海の險波、危礁を航破したる者にあらざれば、這中の消息を解すると能はざる也。

兩者俱に
各々妙所
に踰る

若し吾人をして評せしめば、兩者俱に各々其の妙所に臻れりと云はんのみ。魔神は青春の作也。サムソンは老大の作也。前者は青春の理想を歌ひ、後者は老大の實歴を語る。前者は前途を瞻望し、後者は過去を回顧す。前者は文藝復興の氣分横溢し、之を凝集するに光華、純美なる、清教徒的精神を以てし、後者は希臘古典の格調、體裁に則りて、老硬、假塞なる清教徒的憤慨を吐く。即ち前者に於て、徳の權化は、純白、潔麗なる處女にして、後者に於ては、傲兀、廢殘、一たび墮落したるも、更らに悔悟して、天命を待ちつゝあるサムソン也。吾人は到底兩者を優劣す可き標準を有せざる也。

但だ此の兩者に共通し、且つ總て彌耳敦の諸作を、一貫したる大主腦は、善惡相戦うて、善最後の勝利を得るの一事也。人間弱さも、神によりて強きの一事也。蓋是れ彌耳敦畢生の大本領なれば也。乃ち「失樂園」に於てさへも、其の題目の彼が如きに拘らず、尙ほ其の最後に於ては、神子代贖によりて、其の救濟せらる可き希望を剩せり。彌耳敦は到底絶望せざりし也。彼は絶望中に於てさへも、尙ほ

兩者共通
の一貫した
る大主腦

希望を見出せり。サムソンが自から死して、敵を塵にしたるが如き、是れ徒死に
あらず、勝利の死也。目的到達の死也。彼れ彌耳敦は總てに打負けつゝも、其の心
中は尙ほ勝利者たりし也。

八四 サムソン (四)

腦底恒に
彌耳敦の彌

希伯來の
サムソンの
彌耳敦

自叙傳的
鋒鏘

彌耳敦がサムソンを描くに際して、腦底恒に一個の彌耳敦ありしは、苟も此作
を一瞥すれば、分明也。彼等は多くの點に於て、相一致せり。彌耳敦も自から天の
選民、若くは選子なりと信せり。サムソンも亦た然りし也。彌耳敦も神勅を奉じ、
之に獎勵して活動せり。而して其の結果は、無殘にも敵黨の勝利となれり。サム
ソンも亦た然り。彼は以色列人を、フィラスチン人より救ふを以て、其の天職と
なせり。而して業半ばにして、其身却て敵の囚奴となれり。彌耳敦も其の結婚に
よりて、失敗せり。サムソンの一生の過誤も、其の敵側の婦人を娶りしにあり。而
して兩者與に盲目となれり。兩者與に敵中に孤處して、其の侮辱の焦點となれ
り。此の如く算し來れば、希伯來のサムソンは、即ち英國の彌耳敦なりと云ふも
可也。英國のサムソンは、希伯來の彌耳敦と云ふも、亦た可也。
願ふに彼の自叙傳的鋒鏘は、年と與に愈々露骨となれり。『失樂園』に比すれば、

『復樂園』は、一層作者の本體、讀者に接近し、而して『復樂園』に比すれば、『サムソン』は、更らに一層接觸し來る。約言すれば、『サムソン』は、僅かに希伯來服を纏ひたる一個の老彌耳敦のみ。之を稱して自叙傳と云ふは、其の個々の事實に就て、比擬して然るにあらず、乃ち其の根本的著想に就て、最も然か云ふ可きを覺ゆ。

惟ふに彼は、如何なる動機によりて、此作を企てし乎。文人たる彼は、其の多年の宿望たる悲劇に、指を觸れずして已む能はざりし、藝術的發作もありしならむ。されど更に此れよりも大なるは、彼自身の悲劇也。彼にして若し能く世と推移せん乎、即ち歐洲大陸の旅行を、中止することなくして、其の講學的歲月を、古典的異郷に送らん乎。これ程彼の一身に取りては、安全なるはなかりしならむ。何人も彼を召喚したる者あざりし也。乃ち歸國するも、彼は一個の傍觀者として、學者的生活を遂ぐるに、何等の差支あざりし也。彼家富めるにあらざるも、彼の父は、彼を支持するに足るの資産を有せり。而して彼の節儉なる、如何なる

彼の自身
の悲劇の
爲め

二十年の
惡戰苦闘
と一身の
廢殘

好題目と
最後の熱
血

場合に於ても、簡易生活にて足りし也。彼は何等の外壓的事情ありて、彼を革命の渦中に驅遣したるに、あらざる也。但だ彼の神に對し、國に對し、人に對し、自己に對する責任の觀念は、彼をして二十年の惡戰、苦闘に従事せしめたるのみ。而して其の兩目を失ひ、財産の過半を失ひ、剩す者は、唯だ敵黨の橫行と、一身の廢殘のみ。彼にして枯木死灰なるも、尙ほ號哭、以て天を呼ばずんば、あらず。況や本來詩人的熱腸漢に於てをや。

之を單純なる述懐とせん乎、王政恢復の高潮期也。是れ徒らに忌諱に觸れ、危險を累ぬる所以也。然らざるも、老人の愚痴談たるに過ぎざる也。是に於てか、彼は此の好題目を假りて、其の最後の熱血を吐き來れり。要するにサムソンは、唯だ彌耳敦の僭僞のみ。彼は此の假なる悲劇に託して、實なる悲劇を語りたるのみ。尋常の文人は、假を以て真となす也。但だ彼や真を以て假となせり。されど其の真や、掩ふべからざる也。

蓋し彌耳敦悲劇の發端は、其の王黨鄉紳の女を娶りたるにあり。而して此の煩

彌耳敦悲
劇の發端

累は、一生彼の身に種々の事件となりて、附き纏へり、惟ふに彼も深く之を悔恨したるならむ。サムソンが其の背信婦、ダリラに對する感情、及び言動は、直ちに彌耳敦其人の先妻に對する、胸奥の寫真と云ふも、不可ならず。而してサムソンの述懐は、概ね彼の述懐と云ふも、決して不當ならず。

但だ彌耳敦の廢殘は、英國民の豹變之が主因たり、サムソンの廢殘は、彼が過誤之が主因たり。さればサムソンは、我自から我を咎め、彌耳敦は我自から國民を咎む。彼は此點に於て、サムソンと頗る趣を殊にするものなからず。然もサムソンの自から悔恨しつゝ、遂に神の冥助によりて、フィリスチン人に、打勝つ可きを確信したる如く、彌耳敦も亦た英國人民が猛省して、清教徒的大革命の精神が、早晚勝利を得可きを確信したるものとすれば、此作は一面彼の自叙傳にして、併せて又た英國政教界の前途を先知したる、豫言書と云ふを得可し。

惟ふに彼が既に畢生の目的たる『失樂園』を成就し、今は此世に多く思ひ殘す所なき時に際し、幽齋兀坐、往を顧み、來を望み、孤掌鳴り難く、獨絃奏する能はず、

彼の自叙傳と英國政教界の

絶望中に慰安を

空しく殘生を、群魔跳梁の園中に送るの情懷に想著すれば、吾人は彼がサムソンの口を藉りて、『若し神にして聞き給はゞ、唯だ一の祈願あり、そは速かに死を與へ給へ。』の一句の、如何に沈痛なるかを、諒とせずんばあらず。然も彌耳敦は、最後迄も倔強漢也、彼は此の絶望中にも、尚ほ平和と慰安とを見出す也。何となれば、神の手は決して、彼より離れざるを確信すれば也。

八五 晩年の生活

彼の晩年の清福比較

若し彌耳敦晩年の生活を以て、直ちにサムソンの如しと思はゞ、是れ大なる速了也。彼の心理的生活としては、サムソンは其の活ける寫真也。然も事實に於ては、彼の晩年は、多福と云ふ能はざるも、比較的清福と云ふを得可かりし也。彼は政治、宗教方面に於ては、全く時論に容れられざりしに拘らず、詩人としての聲譽は、實に一世を撼かせり。古今無數の詩人中に於て、彼が如く、生前に其の盛名を博したるもの、幾許かある。彼は必ずしも知己を、百世に待つ迄もなく、當代の詞宗、ドライデンをして、彼の脚下に跪拜するを禁ずる能はざらしめたり。彼は播種者に止まらず、併せて收穫者たりし也。吾人は此點に於て、彼の晩年を憐むよりも、寧ろ之を羨むの不遇文人の多かる可きを、記憶せざる可らざる也。乃ち政客として失敗したる彼も、文人としては、實に成功したりし也。

晩年の容貌と生活

彼の晩年の容貌に就ては、目撃者の所記、稍々其の髣髴を得るに庶幾し。曰く彼の街頭を往來するや、鼠色の上衣、若くは外套を著け、銀柄の小劔を帯びぬ。固より健強の體格とは、受取られず、中肉よりも瘦せ、中脊よりも短かし。然も淡蒼色の髪と、其の美なる顔とは、彼を其の年齢よりも、若かく見せしめたりと。又た曰く、好天氣の日には、彼は清鮮の大氣を吸ふ可く、毎に門口に於ける庭園に、鼠色の粗らき服を著けて在りと。彼を室内に見たる者曰く、一二の階段を上れば、鋪びたる綠色の窓掛ある部屋に、彼は臂掛椅子に坐しつゝあり。其の衣服は黒色にして、清楚に、其の容貌は蒼白なれども、生氣あり。其の手と指とは、痛風を惱みつゝ、痛風石を懷き居たりと。蓋し痛風は、彌耳敦傳家の敵にして、彼は「サムソン」を起稿する以前より、此病に冒されたりしが如し。彼曰く、此れなければ失明も尙ほ忍ぶ可しと。然も彼は痛風にも尙ほ辛抱したり。彼は其の訪問者に對して、極めて恭敬にして、殷勤に、然も何處やら堂々乎たる態度を持したりし也。而して會話は、彼の快樂の一にして、更らに大なる快樂は、音楽たりし也。彼の耳は聰にして、殆んど目の用を兼ねたり。彼は婦人の歌を聴きつゝ、其の容貌の如

彌耳敦傳家の痛風

一日の時間割を有効に使用

何を暗知せり。

社甫と彌耳教

三八二

飲食物の質素節制

彼は何事にも規帳面たりし也。其の一日に於ける時間割の如きも、極めて正しく、有効に使用せられたり。彼が少壯の際には、半夜迄も勉強したり。然も爾來九時に就床し、夏は四時に、冬は五時に起床せり。而して其の最初の勤は、先づ希伯來の聖書を讀むにあり。それより十二時迄勉強し、約一時間運動し、而して午餐を爲し。それより或は風琴を弄し、或は自から歌ひ、或は他の歌ふを聴き、更らに六時迄勉強し。それより八時迄來客に接し、而して輕き晚餐をなし、一服の煙草と、一杯の水とを喫し、寢に入る。是れ其の定例也。

彼は飲食物に就ては、極めて質素、且つ節制を保てり。彼は決して、強烈なる飲料を使用せず、乃ち其の晚餐の如きも、數片の麵包と、數顆の橄欖實とに過ぎず。而して彼の三個の娘が、一六六九年家を出で、他に移るや、彼の家庭には、彼の妻、下婢、及び日中に來りて役に就く、一僕のみ。彼は此の如くして、其の盛名の下に、比較的安靜なる晩年を送れり。

英國史の出來

八六 彼の終焉

然も彼は死に抵る迄、其のペンを休止する能はざりし也。彼は其の晩年に於て、若干の著作、若くは舊作の補修をなせり。一六七〇年には、彼の英國史出で來れり。此書は六卷にして、其の前四卷は、彼が共和政府就官以前の作に係り、其の後二卷は、共和政府時代の作に係る。然も僅かにノルマン征服期に止まる。而して此書には、彼の肖像中尤も善く、且つ當人に就て親しく描きたる信頼すべき、彼の肖像を附し、美本として出で來れり。彼は本來、完備せる英國史を編する豫定なりしも、其の不可能を見て、其の脱稿せる部分を出版したる也。

彼は其の前年一六六九年には、拉典文法書を出版し、一六七二年には、拉典の論理書を出版せり。何れも彼が村夫子時代の舊稿にして、以て彼の輕重を倣すに足らざる也。一六七三年、當時の社會が、查斯二世の羅馬舊教に對する檢束を撤去したるを見て、王が羅馬教に私あるを猜し、物議騒然、遂に王に迫りて、其の解

拉典文法書と論理書の出版

第七章 八六彼の終焉

三八三

放令を取消さしむるや。彼は論客の舊態に復し、「眞實の宗教、異端分離、寛裕」と題する小冊子を刊行し、彼の素論を成る可く手柔かに開陳したり。要は羅馬舊教を除けば、其他は自由を與へよと云ふにあり。而して同年には、彼が前年出版したる、小詩集の再版成れり。

一六七四年は、即ち彼が最後の年にして、最も多忙の年也。「失樂園」の再版も、此年に出で來れり。彼が劍橋大學に於ける、拉典文の習作と、拉典文の私書翰とは、合冊として出で來れり。而して彼が最後の口授譯述に成りたりと思はるゝ、波蘭王の檄文と題するものも、同年の八月、九月の交に出版せられたり。若夫れ彼の遺著として、世に出でたるものは、一六八二年に、露國及び露國より支那に接する東部諸邦史あり。而して更らに人目を聳動したるは、一八二三年に、倫敦の公文書廳に於て、偶然發見せられたる、彼の書記官として起草したる、拉典公文書と、晩年の著作なる、拉典語にて書したる基督教理論、是れ也。

此の二原稿は、彌耳敦が英國に於て、出版せんと欲して、其の官允を得ざりしが

最後の多
忙なる一
年

拉典公文
書と基督
教理論

埋没一
百五十
年

アリア
ス派と
凡神
論者

爲めに、之を友人に託し。而して友人は、彼が死せる翌年一六七五年、之を和蘭なるアムステルダムに於て、出版せんと欲し、偶々英國官憲の故障の爲めに果さず。其儘官憲に納附し、之を公文書堆裡に埋没せしむる。約一百五十年、遂に十九世紀の上半期に於て、偶然之を發見するに到りし也。彼の書記官時代の拉典公文書は、姑らく措き、基督教理論は、彼が散文中、最も特色ある文字にして、且つ彼が信仰を最も大膽に、且つ眞率に告白したるもの也。其の議論の得失は、別問題として、如何に彼が不羈獨立の眞男兒たるかを、證す可き好著也。

此書によれば、彼は三位一體論者にあらずして、神と基督とを以て、同體と爲す意見に反對したる、アリアス派に屬するを知る可し。而して彼は、無中有を生ずべからざるを論據として、一切萬有、皆な神より出で來りたりと云へば、或は彼を凡神論者中に、伍せしむることをも、做し得可し。彼は聖書の權威に、絶對的信賴し、之を以て一切の標準となせり。乃ち一夫多妻の如きも、聖書に禁止せざるが故に、必ずしも不可ならずと云へり。而して全篇の調子は、莊重、嚴肅にして、實

に彼が眞理を探討し、眞理を告白するの勇往、猛進なる精神を見る可き、最後の
舉證者たるに庶幾し。

何等の苦
悩なく永

彼は一六七四年七月には、自から死期の近きを知れり。十月に到りて、彼は極め
て快活にして、其健康を恢復したるが如く、見受けられたり。然も十一月に迫ん
で、痛風の襲ふ所となり、其の八日の夜、其室内に看護しつゝある者さへ、知らざ
る間に、何等の苦悩なく、天命を遂げて逝けり。享年六十五歳と十一個月也。

遺産分配

彼の遺産は、其の家具、什器等の外、九千圓、現時の見積りにて約二萬七千圓内外
たりし也。彼は一六七四年七月、弟クリストフアに向て、口頭にて遺言し、其の全
部を其妻に與へたり。然も三人の娘等は、之に服せず、遂に訴訟に及べり。而して
仲裁の結果は、其の三分の一を、三人の娘に分配し、三分の二を寡婦に與へたり。
此の如くして、波瀾多き彌耳敦の生涯は、死後尙ほ多少の波瀾を以て、其局を了
したり。

尙語るべ

吾人は彼に就て、尙ほ語る可き所多し。されど本論の前途遼遠也。吾人は須らく

き者多し

此れより支那の窮詩人、杜甫に轉じ、更らに杜甫と彌耳敦との、比較研究に達す
るを待て、而して後、徐ろに開陳する所あらむ。

彌耳敦より
杜甫に移
轉

杜甫と彌
耳敦の位
置の相違

第八章 杜甫以前の支那

八七 獨擅の位置

彌耳敦より杜甫に移轉するは、棟割長家の甲號より乙號に轉宅するの比にあらず。其の地を以てすれば英國より支那也。其の時代を以てすれば、第十七世紀より、第八世紀也。彼等の間に、人種、言語、學問、風俗、宗教、あらゆる差別あるのみならず。其の年代に於ても、殆んど九百年の隔離あり。吾人は此の兩詩人を紹介するに際して、特に如上の差別と、隔離とに就て、讀者の注意を要求す。

杜甫の支那詩人間に於ける位置は、彌耳敦の英國詩人間に於ける位置よりも、更らに絶特也。彌耳敦が英國の古今を通じて大家たるに於て、何人も異存なし。但だ彼に比して、更らに八面敵無き、より大なる沙翁シェイクスピア彼の前にあり。彼の後に、彼よりも寧ろ或る部分に人氣あるバイロンあり、ウァーグナーあり、或は近くはテンニソン、ブラウニング等あり。何人も彌耳敦に向て、一指を加ふる能は

杜甫は前
に往者な
く後者に
來る者なし

同日の論
にあらず

ざるも英國の詩壇は、未だ彼の獨擅に任ずと云ふを許さざる也。但だ杜甫に至りては然らず。同時の好敵手李白なきにあらざるも、彼は前に往者なきのみならず、彼の後に來る者は、殆んど彼を宗とせざる者なきに至れり。何人も英國の詩は、彌耳敦に至りて大成せりと云ふ能はず。然も支那の詩は、杜甫に至りて大成せり。彼の後に大家として、唐に白居易、韓愈等あり。宋に蘇東坡、黃山谷、陸放翁の徒あり。金に元遺山あり。元に虞道園あり。明に李東陽、李獻吉等あり。明末清初に錢牧齋あり。然も彼等は、未だ曾て子美に瓣香せざるものなき也。彼等は其の出入の門徑、相同じからざるも、何れも杜甫を以て、其の本尊とせざるはなき也。

之を英國の第十七世紀の末に於けるドライデン、十八世紀に於けるポープ、ダレ、グロバア等あり。十九世紀の初に於けるバイロン、ウォーヅワース、其の中期以降に於けるテンニソン、ブラウニング等あり。各々一家の風を做したるに比すれば、決して同日の論にあらず。

杜甫の詩
と朱元晦
の經書

是れ後人
の罪のみ

杜甫に對
して競者
なし

惟ふに支那に於ては、詩の杜甫に於ける、猶ほ經書の朱元晦に於ける如し。集めて大成したると同時に、天下後世をして、悉く其の藩籬中に籠絡し去りて、更に其の雄飛、高翔するを得ざらしめたり。後世の詩人は、唯だ杜甫を目的として、其の步趨、科白、一に杜甫たらざらんことを、是れ恐るゝの趣なしとせず。乃ち切言すれば、支那の詩は、杜甫に至りて、其の盛を極め、併せて其の衰運を招けりと云ふ可し。

然も是れ豈に杜甫の責任ならんや。是れ唯だ後人の氣魄、志趣、彼に及かざるの罪のみ。彼等が杜甫を師として、自然と吾心とを師とせざりし罪のみ。固より支那に於ても、多少の反抗者なきにあらざりし也。然も杜甫の詩に於ける獨擅の權威は、朱熹に比して、更らに大なりき。何となれば、朱子學に對しては、有力なる競争者の王陽明、明の中葉以降に出で來りたるも、杜甫に對しては、遂に此の如き競争者を見出さざれば也。或は明初の高啓の如きは、杜甫よりも、寧ろ李白に傾きたりと稱せらるゝも、彼あるが爲めに、杜甫の勢力に、一毫の増減をも加ふ

支那詩壇に於ける絶頂の權威

杜甫と彌耳敦

三九二

る能はざりしを見ずや。

之を要するに、孔子の聖人たる、王羲之の書家たる、杜甫の詩人たる、韓退之の文士たる、支那に於ては、太陽の東より出で、西に没するが如く、殆んど自然の約束として受取られ、何人も之に向て、疑を挟むを容さざりし状あり。吾人は今ま杜甫に就て語るに際して、彼が何故に此の如き絶頂、至上なる權威を、詩壇に有するに至りしかの疑問を、回避する能はず。是れ固より詩人としての彼が、天才によるならむ。されど若し天才を論せば、或は彼と同時の李白を以て、より以上と云ふべき理由なきにあらじ。吾人は未だ一端を擧げて、容易に速断す可らざる也。

然も杜甫の詩を諒解せんと欲せば、杜甫其人を諒解せざる可らず。杜甫其人を諒解せんと欲せば、彼の時代に關する概念を有せざる可らず。吾人は須らく先づ、彼の時代に就て、鳥瞰的觀察を遂ぐ可きのみ。

先づ彼の時代を知るを要す

八八 漢 と 唐

漢人種の雄威と漢代

漢人種の消長勢力

唐虞以來清末に至る迄、漢人種の最も雄盛を極めたるは、漢と唐と也。支那人が漢、唐の二朝を目して、殆んど理想的天國視するは、決して偶然にあらざる也。若夫れ一部の識者によりて、支那文明の極致と稱せられたる、周代に於ては、戎狄の侵犯あり、平王の東遷の如きも、畢竟戎寇を避けたる也。

乃ち司馬晋五胡の亂以來、隋の統一に及ぶ迄、約三百年、中原悉く異人種の跳梁跋扈に一任し、漢人種は、僅かに江左に偏安したるに過ぎず。唐末五代の初に至り、漢人種の勢力、復た萎靡し、趙宋に至りては、文治の美、前代を軼ぐと稱したるも、其の極盛時に於てさへも、東に契丹あり、西に夏あり、年々金縉を輸して、敵に賂ふに過ぎず。而して靖康の變、金人長驅、徽宗、欽宗は、捕虜となりて、敵兵に携へ去られ、宋は僅かに江南、巴蜀の一角を、保有したるに過ぎず。元の蒙古より起り、清の滿洲より起る、何れも中原を擧げて、異人種の征服に一任す。固より言ふ可

漢高と武帝

きなし。但だ明に於ては、漢人の勢力一時支那本土を統一したるも、恒に北狄、南倭の爲めに疲困せられ、二百五六十一年間、殆んど寧日多からざりし也。然るに漢代に於ては、漢高三尺の劔を提げて、天下を定め、國威漸く振ひ、武帝に至り、其の雄才大略ある、屢々兵を塞外に出し、遠駕長馭、其の勢力は、東は朝鮮に及び、之を郡縣となし、西は中央亞細亞に及び、漢人種の屯田を進んで、現時の吐魯蕃、烏魯木齊等、各方面に見るに到れり。蓋し漢人種統一して、強盛なるの日は、支那本土、塞外に對して恐怖たり、然らざるも敬憚たり。若夫れ漢人種分裂して、衰弱の日は、支那本土、塞外の好餌たり、然らざるも奇貨たり。而して吾人は、支那古今の史乘に於て、前者たるの日は、甚だ少く、後者たるの日は、甚だ多かりしことを見て、所謂漢人種の自衛力に就て、一團の疑念なからんとするも、能はざる也。

漢人種の自衛力如何

漢人種の文明と文弱

漢人種が、恒に塞外の諸種屬に侵犯せられたるは、文化の程度、相懸隔したるが爲め乎。戰爭に於ては、文明人必ず野蠻人に打ち負けねばならぬ。約束は、焉くに

唐代の文化と西域

ある乎。文明なる羅馬人は、該撒の下に、日耳曼を北歐に驅逐せり。文明なる漢人は、匈奴、烏孫を臣屬せしめたり。文明なる唐人は、漢人よりも更らに大なる兵力と、文化の力とを以て、西域を征服したり。若し兵力の副ふあらば、文化は寧ろ征服力にして、決して被征服力にあらず。吾人は漢人種の文弱を以て、其の文明なるが故と斷言す可き、實證を有せざる也。

武帝と朝鮮統治の實證

吾人は現時に於ける、中央亞細亞の發掘に於て、唐代の文明が、如何に西域の極端迄も浸潤したるかを、確かめ得る也。而して此の文明は、恰も亞歷山^{アレキサンダー}が、希臘の文明を、西亞細亞に普及せしめたるが如く、兵力に隨伴したるは、固より問ふ迄もなき也。吾人は唐代文化の西域に於ける普及を以て、直ちに治化の普及と同視せざる迄も、少くとも稍々之に庶幾しと云ふを得可きを疑はず。今や朝鮮に於ては、大同江以南の地方より、頻りに漢人種の遺物、墳墓等を發掘し、武帝の朝鮮統治が、空文にあらずして、實際なりしことを、著々確かめつゝあり。而して西域に於けるベリオ、スタイン、乃至大谷師等の探討、發掘は、期せずし

西域に於ける文明の接

文弱の漢人に対する古案

杜甫と彌耳敦

三九六

て漢人種の文明と希臘人の文明と、印度人の文明とが、此の沙漠の大海に於て、偶然接觸したる事實を暗示しつゝある也。而して如上の事實は、吾人をして漢人種が、一種の膨脹力を有し、同化力を有する、偉大なる人種たるを、識認せしめざらんとするも能はざる也。
此の如き偉大なる人種にして、恒に比較的野蠻なる、比較的少數なる、塞外の諸種屬に犯攻せられ、動もすれば支配せらるゝ所以のものは、何ぞや。吾人は漢人種が、本來文弱人種にあらざるなき乎を、疑はざらんとするも能はず。而して其の文弱は、文明なるが故にあらずして、文明と否とに拘らず、文弱なるが故なりと判ずるを以て、寧ろ事實に近きものと信せずんばあらず。嗚呼是れ實に、歴史上の一大不可思議也。されど文弱の二字は、歴史が漢人種に對する、千古の鐵案也。

八九 唐 太宗

支那歷代君主中の雄者

隋の煬帝と其の結果

盲目の世界には、眇者王たり、痿者の社會には、跛者覇たり。されば支那に於て、眞に雄武なる者あらば、天下を統一するに於て、何かあらむ。固より馬上天下を得たるが故に、馬上天下を守る能はざるは、必ずしも支那に限りたるにあらざらざれど、支那の如き文弱國に於ては、雄武の光明は、暗中の燭火の如く、特に燦爛たるものある也。此の意味に於て、唐の太宗の實に支那歷代諸君主中に於て、及ぶ可らざる所以を見る也。蓋し彼は何事よりも、先づ雄武の人傑たりしを以て也。雄武とは、單に匹夫の勇にあらず、帝王の大膽勇、大偉略を意味する也。
五胡の亂より隋に至る、約三百年、統一の氣運は、隋の文帝によりて啓かれ、煬帝に至りて、大成す可くして、却て大亂を醸せり。是れ自然の大勢と云はんよりも、寧ろ惡政の結果と云はざるを得ず。而して十八歳の青年李世民は、其父唐公李淵を説得し、其の之を聞かざるや、苦肉の計を以て、彼を強要し、父をして『今日

第八章 八九 唐 太宗

三九七

太宗十八
舉義兵

破家亡身亦由汝。化家爲國亦由汝矣。」の言を發せしめ、遂に義兵を擧げたり。而して其の効果は、白樂天の所謂る「太宗十八舉義兵、白旄黃鉞定兩京、擒充戮竇四海清、二十有四功業成、二十有九即帝位、三十有五致太平。」の句の如くにして、殆んど破竹の勢を以て、其の目的を達したり。吾人は漢と唐とが、武力を以て天下を統一したるが爲めに、其の必然の結果として、其の威勢が、四境の外に及びたるを、記憶するを要す。杜甫が所謂る「風塵三尺劍、社稷一戎衣。」の句は、太宗創業の勳勞を囊括して、餘蘊なきに庶幾し。

太宗は偉
大なる政
治家

然も太宗は、單に雄武を以て、一代に卓越したるのみにあらず、凡そ支那の帝王中、彼が如く偉大なる政治家は、殆んど其匹あらざりし也。彼は何人よりも、該撒に接近したる英雄也。彼は治國の要を知れり。彼は如何なる場合に、劍を抜く可きを知ると、與に如何なる場合に、劍を藏む可きを知れり。儒教、文學、筆翰、佛典、刑法、其他唐代の文化、一として彼の提撕誘掖を被らざるものあらず。吾人は彼が獨り自から用ふるの材ありて、却て能く群材を驅使し、獨り自から見るの見識

絶無僅有
の大經世
家の

ありて、却て能く衆言を聽納し、房杜の政治的技倆、李靖、徐世勳の軍事的天材をして、皆な其所を得せしめたる大識度を、驚嘆せざらんとするも能はず。彼の宋代の政治家司馬光、彼を評して曰く、

太宗文武之才、高出前古、驅策英雄、網羅俊乂、好用善謀、樂聞直諫、拯民於水火之中、而措之衽席之上、使盜賊化爲君子、呻吟轉爲謳歌、衣食有餘、刑措不用、突厥之渠、繫頸闕庭、北海之濱、悉爲州縣、蓋三代以還、中國之盛、未之有也。

確論と云ふ可し。彼は實に自から天下に宰たるのみならず、天下の材を集めて、天下の務に當らしめたり。吾人は該撒が不幸にして、未完成の大經世家として、刺殺せられたるを以て、未だ猝かに兩者の優劣を、判ずるを敢てせざるも、彼は實に漢人種中に於ける、絶無僅有の大經世家たるを、疑ふの餘地なき也。

自古帝王多疾勝己者、朕見人之善、若己有之、人之行能、不能兼備、朕常弃其所短、取其所长、人主往々進賢則欲實諸懷、退不肖則欲推諸壑、朕見賢者則敬之、不肖者則憐之、賢不肖各得其所、人主多惡正直、陰誅顯戮、無代無之、朕踐祚以來、正直

之士比肩於朝未嘗黜責一人自古皆貴中華賤夷狄朕獨愛之如一故其種落皆依朕如父母。

漢人種大動機

自ら萬乘の才を以て任ず

是れ太宗自から侍臣に語りし所也語矯飾を免れざるも少くとも彼の理想を見る可し特に彼が華夷一視に到りては眞に漢人種の勢力を境外に膨脹せしめたる一大動機たらずして何ぞや。太宗嘗て自から文を爲りて魏の太祖を祭りて曰く、「臨危制變料敵設奇一將之智有餘萬乘之才不足。」と是れ彼が曹孟徳に對して不滿なる所而して恐くは彼や自から萬乘の才を以て任じたるならむ乃ち彼や能く自から知る者と謂ふ可き也然も萬乘の才たる第一資格は彼の雄武にある也則ち武徳之れが素地たりしが故に文徳亦た隨て光明を放ちし也。

九〇 大帝國としての唐

唐の天下と太宗の力

唐の高祖の時に於ては尙ほ未だ内地群雄の割據するあり而して其虚に乗じて屢々外患ありされば一時殆んど遷都の議を決せんとしたる程なりき或は曰く突厥の屢々關中に寇する所以は子女玉帛皆な長安にあるが故也若し長安を焚いて都とせずんば胡寇自から息まむと然も秦王世民一太宗一の諫止によりて中止せられたりし也唐の天下を統一したるは固より太宗の力に由る而して其の威勢を四境の外に轟かしたるも亦た固より太宗の力に由る宗徹りせば唐の天下も或は弱宋と擇ぶ所あらざりしならむも未だ知る可らざる也。

太宗突厥の膽を破る

高祖の武徳七年突厥の頡利可汗其姪突利可汗と國を擧げて入寇し營を連ねて南下し來る太宗乃ち騎を帥ひ馳せて虜陣に詣り之に告げて曰く國家可汗と和親す何爲ぞ約に負き深く我が地に入る我は秦王也當時彼は秦王として

藩邸に在り、可汗能く闘はゞ、獨り出て我と闘へ。若し衆を以て來らば、我は直ちに此の百騎を以て、相當らんのみと、彼は此の如くして、突厥の膽を破り、之を挫けり。

身を挺して難に衝

然も突厥の來寇は、此に止まらざりし也。太宗踐祚の當初、頡利は突利と十餘萬騎を合して、涇州に入り、頡利進んで、渭水便橋の北に至る。太宗自ら高士廉、房玄齡等六騎を率ゐ、徑ちに渭水の上に詣り、頡利と水を隔て、語り、責むるに約に負くを以てす。突厥大に驚き、皆な馬を下りて羅拜す。彼は此の如く、恒に身を挺して、難に衝り、止だに能く外寇を走らしめたるのみならず、更らに敵酋を懷柔して、之を心服せしめたり。

庶幾く前恥を雪

其の突利可汗の入朝するや、太宗侍臣に語りて曰く、往きには太上皇——高祖——百姓の故を以て、臣を突厥に稱せり。朕常に心を痛ましむ。今ま單于稽顙す。庶幾くは前恥を雪ぐ可しと。此に由りて觀れば、唐朝の創始には、突厥と對等の交際だに克はずして、臣屬の名を表したるを見る可し。太宗微りせば、高祖も或は石

太宗と外夷の降伏

敬塘と大なる徑庭あらざりしやも、未だ知る可らざる也。

吾人は此に於て、唐の天下の太宗に負ふ所の、多大なるを識認せずんば、あらず。要するに、太宗なければ、唐の大帝國なしと云ふも可也。何となれば、太宗ありて始めて外夷に對し、退守的政策を排して、進攻的政策を實行するを得たれば也。蓋し貞觀四年には、突厥の巢窟を衝き、頡利可汗を擒にし、四夷酋長闕に詣り、太宗を請うて、天可汗と爲す。上皇頡利を擒にするを聞き、嘆じて曰く、漢高祖白登に困み、報ずる能はず。今ま我が子能く突厥を滅し、吾が託付人を得、復た何をか憂へん哉と。

雪恥報百千古

太宗太上皇を奉じて、酒を未央宮に置く、上皇頡利可汗をして、起て舞はしむ。又た嶺南の蠻酋馮智に命じて、詩を詠せしむ。笑て曰く、胡越一家、古未だあらざる也。貞觀九年には、吐谷渾に克ち、其の十二年には、吐蕃を破り、其の十四年には、高昌國を滅し、安西都護府を交河城現時の所謂る吐魯蕃に置けり。其の十八年には、高麗を親征し、未だ全く其の目的を達するを得ずして、師を班したるも、尙

唐の盛時
と威令の
普及

杜甫と彌耳敦

四〇四

は其の威を鴨綠江畔に振へり。其の二十年には、薛延陀を撃ちて之を降し、勅勒諸部を招諭し、燕然都護府を置き、之を鎮す。太宗自から詩を作りて、『雪恥酬百王、除兇報千古』と云ふも、未だ必ずしも自分免許の大言とのみ、嗤ふ可からざる也。

蓋し唐の盛時に於ては、其の威令の及ぶ所、東は朝鮮半島に至り、西は亞富汗の北境に至り、北は今日の露領西邊利に至り、南は交趾、安南に至る。而して印度、波斯との交通、乃至亞刺比亞、東羅馬との消息、又た相通ずるものありし也。蓋し此の時代を以て、英國のエリサベス女皇の時代に比す。其の世界的大帝國として、此れ彼に優るもの遠しと云はざるを得ず。此の如き時代に於て、文學の興隆せざるもの、未だ之れ有らず。吾人は唐代の詩と、唐代の帝國的發展とに就て、緊密の關係あるを、忘却す可らざる也。

九一 則天武后(一)

太宗の情
力と其子
高宗

吾人は唐代の歴史を語る可き義務なき也。されど少くとも、杜甫の時代に就て、概念を有せんとせば、其の大綱を知るの必要あり。太宗の前に太宗なく、太宗の後に太宗なし。太宗の子高宗は、所謂の怕婦皇帝として、歴史上著名なる一人也。彼は其の皇后武氏に制せられて、空しく伴食帝王として、記憶せられたり。然も太宗の情力は、尙ほ其の子孫迄も、若干の威靈を剩せり。朝鮮半島が、全く唐の支配を受けたるも、此の時代也。日本の勢力の、殆んど朝鮮半島より、驅逐せられたるも、此の時代也。而して唐の勢力が、西域に延長し、安西都護府を庫車に進めたるも、此の時代也。高宗は内悍婦に制せられつゝも、外に向ては大唐の天子として、殆んど太宗と相均しき威嚴を、保有したりしが如し。

吾人は記事の順序として、此に於て則天武后其人に及ばざるを得ず。蓋し彼女は、支那二十四朝の女性中に於て、上は漢初の呂后より、下は清末の西太后に至

支那歷朝
女性中特
色の一

四明天武后
の專制

女性中の
最嗜殺者

る迄を通じて、最も特色ある一人とせざる可らず。彼女は十四歳にして、太宗の後宮に入り、太宗崩御の後、二十六歳、群妾と與に尼となる。高宗寺に幸して之を悦ぶ。偶々、王皇后、蕭淑妃と寵を争ひ、彼女をして密に髮を長せしめ、高宗に勧めて之を納る。既に入るや、乍ち皇后、淑妃の寵を奪ひ、三十二歳、昭儀より皇后に進む。高宗風眩に苦み、百司の奏事を視る能はず。皇后をして之を決せしむ。彼女が皇帝在世の際は、殆んど攝政として、政を専らにする。二十五年、其の崩御後は、其子中宗を廢し、其子睿宗を廢し、六年の後、自から篡立して、國號を改めて周と稱し、在位十五年、前後合して、四十六年の專制を行へり。今夫れ、呂后の制を稱する、八年に過ぎず。西太后の垂簾の政も、前後合算して、二十五年に過ぎず。吾人は未だ則天武后の如く、專制力の無限にして、且つ悠久なりし事例を、支那の史乘に見ざる也。而して彼女は何事を做せし乎。凡そ女性として、彼女の如く殺を嗜む者、未だ之れ有らざる可し。婦人は嫉妬の凝塊也。されば其の一たび、嫉妬の念に支配せらるゝや、如何なる事をも、忍ばざ

所生の愛
を犠牲

殺人を以
て一種の
樂事とす

る所なき也。彼女の昭儀たるや、女子を産めり。皇后撫弄して去るや、昭儀潛に女子を衾中に斃し、高宗の至るを覗ひ、陽はに歡笑して衾を發す。女死せり。左右曰く、皇后適々至れりと。昭儀悲啼す。帝怒りて曰く、皇后吾女を殺すと。后以て自ら解する無く、尋いで廢せらる。是れ所生の愛を犠牲として、取りて代る可き方便に供したる也。皇后王氏、淑妃蕭氏の廢せらるゝや、高宗尙ほ之を憐むの情あり。武后乃ち人を遣はして、杖つこと各一百、手足を斷去して、酒甕中に投じて曰く、二姫をして骨醉はしめよと。數日にして死するや、又た之を斬れり。是れ呂后の人彘と、異曲同惡と云ふ可き歟。

然も彼女の殺を嗜むや、單に嫉妬の爲と云ふ可らざるに似たり。彼女は前代の名臣、長孫無忌、褚遂良を竄逐し、死に抵らしめ、又た上官儀を殺せり。是れ彼女が皇后と爲るの進路を妨害したるの、復讐と云ふ可き歟。其の制を稱するの後、告密の門を開き、酷吏を縱つて大獄を興し、屢々將相を屠戮せり。而して李氏の宗室に到ては、殆んど遺類なき迄に至らしめたり。而して其の姉子魏國夫人の、高

天下を失はざりしは、何ぞ

宗の私する所となるや、之を毒殺し、却て其罪を兄子二人に嫁し、并せて之を殺せり。而して吾が出生にあらざる、高宗の諸子を殺して、自から足らず、更らに其の賢徳天下に聞えたる、吾が所生の太子宏を殺し、其の弟賢の次で太子となるや、又た之を殺し、更らに賢の子光順を殺し、僅かに一子守禮も亦た宮中に幽し、屢々杖たれたり。其他其の孫を殺し、女孫を殺し、女孫の婿を殺し、其の女婿を殺し、更らに其の嬖寵者を殺し、殆んど人を殺すを以て、一種の樂事と做すの觀なきにあらざり。而して彼女が天下を失はざりし所以は何ぞや。

九二 則天武后(二)

支那人は本來事大主義者

武后と強者の位置

則天武后が千古未曾有の忍人たることは、論なき也。而して彼女は、何故に唐の天下を奪ひ、且つ保ちたる乎。吾人は彼女が、唐の宗室を屠戮するに際し、唐の社稷を變更するに際し、即ち唐の天下を篡ふに際し、滿朝一人の敢て之に有効なる反對を試みたるものなきを見て、支那の所謂國民性に就き、其の實物教育を得たる感なき能はず。要するに支那人には、忠義は、空言にして、實行にあらざる也。支那人は本來事大主義者也。強者の權に對しては、其の何者たるを問はず、之に服従するを以て、殆んど自然の約束と認めたり。而して武后が其志を逞うしたる所以の一は、彼女が強者たりしが爲めならずばならず。武后は、高宗在世の際に於て、既に強者たる位置を占めたり。されば彼女が強者たるは、帝位を篡奪したるが爲めにあらざりして、寧ろ強者たりしが故に、帝位を篡奪するを得たりし也。然も其の之を保持したる所以も、亦固より彼女が強者

君主の保
有の略
と識度

たりしが爲めならずんばならず。彼女は淫穢なる支那の宮廷中に於て、最も淫穢の甚だしき標本たりし也。彼女の嬖幸者は、前後幾許人を以て、數ふ可し。然も其の大權下移に至りては、彼女の一生中、斷じて是れあらざりし也。彼女は如何なる場合にも、其の主權者たる身分を、一點一畫をも毀傷せられざりし也。是れ彼女が支那歴代の帝王中、殆んど罕に觀る所たり。則ち彼女が天下を保有したるは、其の君主權を保有したれば也。而して彼女は之を保有するに足るの膽略と、識度とを兼有したりし也。

告密の門
を開く

彼女が告密の門を發くや、奴をして其主を訴へしめ、子弟をして其の家長を訴へしめ、僚友をして互ひに相訴へしめ、隣保をして交々相訴へしむ。史家記して曰く、『朝士人々自危、相見莫敢交言。道路以目、或因入朝、密遣掩捕、每朝輒與家人訣曰、未知復相見否。』と。此の如き危殆の情態に、其の臣僚を擠し、而して尙ほ比較的天下の平康を保持したる所以は何ぞや。彼女が一切の缺點、失徳多きに拘らず、君主としての大權を、自個に掌握したれば也。而して其の大權を、己の爲め

大權を天
下の爲に
善用す

に恒に悪用したるに拘らず、復た天下の爲めに、之を善用したるが爲めならずんばならず。

夫以懷義易之等床第之間、何言不可。中傷善類、而后迄不爲所動搖、則其能別白人才、主持國是有大過人者、其視懷義易之等、不過如面首之類。人主富有四海、妃嬪動至千百、后既身爲女主、而所寵倖不過數人、固亦無足深怪。故后初不以爲諱、亦若不必諱也。至用入行政之大端、則獨握其綱、至老不可撓撼。陸贄謂、后收人心、擢才俊、當時稱知人之明。累朝賴多士之用。李絳亦言、后命官猥多、而開元中名臣多出。其選舊書本紀贊謂、后不惜官爵、籠絡豪傑、以自助。有一言合、輒不次用、不稱職、亦廢誅不少。假務取實才、眞賢、然則區々帷薄不修、固其末節、而知人善任、權不下移、不可謂非女中英主也。

女中の英
主

是れ趙翼の論にして、大體に於て、其の肯綮に中れるものに似たり。吾人は彼女が殺を嗜むを以て、強者と云はざる也。忍人たるを以て、強者と云はざる也。此の如き徒は、却て臆病者の中にも、多くを見出す也。但だ彼女や、勇猛なる意志と、聰

三者相合
して目的
を達す

杜市と彌耳致

四二二

明なる謙度と、熱沸、不息なる名譽心とを有せり。而して此の三者は、相合して以て、太宗の功業未だ人心に新たなるの時代に於て、彼女をして、其の篡奪の目的を遂ぐるを得せしめたる也。

武后と露
國カサリ
ン二世

自ら露國
の帝位を
踐む

カサリ
ン二世の
政的手腕

九三 則天武后(三)

若し支那以外の女主に於て、則天武后と相對照す可きを求めば、唯だ一個の露國女帝カサリン二世あるのみ。吾人は此の二女主が、其の君主たる美點、強點に於ても、醜所、弱所に於ても、互ひに相類似するもの多きを見て、聊か奇異の感を作さずんばあらず。

カサリンは獨逸人也、即ち異邦として、露國の宮廷に入り、其の言語、宗教、風俗、習慣を受用して、露國人以上の露國人となれり。彼女は其の夫婿として、露西亞の大帝國を治むるよりも、寧ろ顛狂院に住す可き彼得に配せり。彼女は其姑エリサベスの崩御後、三十四歳にして、其の夫婿を廢し、且つ殺し、自から露國の帝位を踐めり。而して此れよりして、彼女は内政を改良し、地方行政區を定め、租稅制度を更革し、銀行を設け、農業を勸め、市町を營み、兵備を振作し、學校、病院を建立し、茲に彼得大帝以後、再び彼得大帝出づるの思あらしめたり。乃ち馬鈴薯の如

彼女の對外政策と雄圖英略

全國に治安を興ふ

きも、彼女によりて露國に移植せられたる也、吾人は此點に於て、彼女は則天武后以上の行政的手腕ありと云はざるを得ず。

更らに彼女の大を見るは、對外政策也、現時の露國大帝國は、彼得大帝に創まり、彼女に成ると云ふも、過言にあらず、彼女は土耳其を破り、其の南部露西亞に於ける韃靼人を驅逐し、悉く黒海の東岸を占領し、他日君府に出づるの端を啓らき、更らに普墺と、波蘭を分割し、而して其の東洋に志を逞うせんとするや、日本の漂流民を優遇し、彼等をして、日本語の教授をさへなさしめたり、其の雄圖英略、實に天下を蓋ふに足るものあり。

吾人は則天武后が、支那の内政を、幾許改善したるかを詳にせず、されど彼女は少くとも、全國に治安を興へたり、支那には治安以上の善政なし、治安は即ち支那に於ては、理想の善政也、吾人は則天武后の帝國主義に就て、多く語るの要なし、其の國威は、貞觀の盛時に及ばざるも、尙ほ未だ多く失墜したりと云ふ可らず、而して彼女が人材を鑑識し、人物を駕御するの術に至りては、寧ろカサリン

李敬業の傲

君徳なきも臣節を竭さしむ

内行の醜穢二者一

をして、顔色なからしむるものなしとせず、李敬業の反するや、傲を作りて、武后を斥して、其の醜詆を極む、彼女之を一讀して、「一抔之土未乾、六尺之孤安在。」に至り、嬰然として曰く、是れ誰の爲る所ぞ、或は曰く、駱賓王なりと、彼女曰く、此の如き人材をして不遇ならしむる、是れ宰相の過なりと、彼女は人材に急也、收めて吾用と爲すに於ては、何等の狐疑あらざりし也。

カサリンは、佛國のウオルテル、デイデロ等、所謂る十八世紀佛國自由思想の感化を被り、自から手を喜劇の製作に染めたり、而して則天武后に至りては、蚤に文學の士を重用したるのみならず、擧人の老子を習ふを罷め、自から作る所の『臣軌』を習はしむ、彼女は自から君として君徳なきも、臣をして臣節を竭さしめんとしたりし也、而して彼女の『臣軌』は、太宗の其子高宗に興へたる『帝範』と與に、一對の好著として、特に我が帝國に於ては、王朝の古より、大正の御代に至る迄、尊重せられつゝある也。

吾人は最後に於て、彼女等が其の内行の醜穢なるに於て、其の揆を一にするを

善なる者
より強
者なるも
弱者

驚かざるを得ず。如何に趙翼が、則天武后の爲めに回護するも、其の汚行は則ち汚行也。偉大なる女性たるが爲めに、汚行を寛恕す可き理由なき也。而してカサリンに至ては、亦頗る此に類するものあり。彼女が其の寵嬖者に賞賜したる者前後通計、無慮二十萬磅に上れりと云ふ。即ち二億圓の遊蕩費は、大國の君主としても、決して少額と云ふ可らず。吾人は未だ此の如き通算を、則天武后の上を試みる材料を有せざるも、彼女の濫費も、決して少額ならざりしを知る也。然も此の如き穢德、汚行ありて、尙ほ天下の治安を維持したる所以は、彼女が能く強者として、天下に臨みたるが爲めのみ。天下は善なる弱者よりも、惡なる強者に謳歌す。善なる弱者は、秩序を維持する能はざるも、惡なる強者は、彼自から其の秩序を破らざる限りは、之を維持するを得れば也。而して秩序は何物よりも、人民の寶なれば也。

九四 強者の權

支那に於
ける人君の
天職

支那に於ては、唐虞三代の古より、漢唐に至る迄、人君の天職に就ては、理論上殆んど遺憾無き迄に、講明せられたり。「德惟善政、政在養民」とは、君德の主要として、大禹の自から宣言したる所也。「撫育黎元、陶均庶類」とは、唐太宗が帝範の主腦として、皇太子に誨へたる所也。然も極めて少數の除外例の他は、概ね君主は土地、民人を私有し、之を隨意に措置するを以て、君主當然の特權となしたるものに似たり。

君主は牧
者人民は
群羊

蓋し其の賢君と稱し、惡主と云ふは、唯だ其の私有物を處分するの巧拙如何によりて、區別せらるゝに過ぎず。乃ち君主は牧者にして、人民は群羊也。此の群羊を生かすも、殺すも、牧者の勝手也。但だ群羊をして、特別の痛苦を感せしめず、其の毛皮を輸さしむるは、是れ賢なる牧者にして、之を殘殺し、之を豺狼の餌となすが如きは、惡若くは、愚なる牧者也。普天の下王土たり、率土の濱王臣たりとは、

太宗は牧者の賢

支那と強者の權

唯だ一個の小民も一枚の田畑も君主の私有物たるを意味したる迄にして、君主が其の國家及び國民に對して何等の責任なく、義務なく、且つ何等自製の必要を感じざる所以職として此に存せずんばならず。

唐の太宗の如きは、牧者の賢なる者也。彼は天下を私有とする念に於て、恐らくは他の君主と同一たりしならむ。然も彼は群羊を肥大ならしむるは、自ら肥大なる所以と解したり。彼は管仲の所謂、與ふるの取りたることを解したる、國家の持主たりし也。是れ貞觀の政治が、歴史に稀有なる光明を放つ所以也。然も彼に繼ぎ來れる君主等は、極めて短視なる牧者にして、唯だ我が隨時發作したる意志の如く、振舞ひ、群羊を殘殺するを以て、能事となせり。

吾人は支那が、民本主義の國家なりと云ふの觀察に、與みする能はず。支那に於ては、事實上君主の天職を、無視する程なれば、民本主義にあらざるは勿論、又君本主義にもあらず。要するに支那には、唯だ強者の權が、極めて造作なく、極めて無遠慮に、識認せられ、踐行せらるゝあるのみ。されば一の強者出づれば、天下は

征服者即ち帝王

強者と專制

強者の權の推移耳

乍ち彼の私有に歸し、之を私有する間、彼は隨意に之を措置するを得る也。然も彼若くは彼の子孫、弱者となるに於ては、又た他の強者來り代りて、前の如く振舞ふ也。支那に於ては、征服の要請以外に、一切の要請なし。征服者若し土民ならば、土民を帝王と作すも可也。高祖は泗上の亭長にあらずや。征服者若し盜賊ならば、盜賊を帝王と作すも可也。後梁の太祖の如き是れ也。征服者若し乞食坊主ならば、彼を帝王と作すも可也。明の太祖乃ち然りと爲す。固より其の北狄たり、西戎たり、東夷たり、南蠻たるに關せざる也。六朝時代の北朝、若くは金、元、清の例、以て徴す可き也。

支那に於ては、強者たる一日、以て一日の專制を、逞うするを得べし。強者たる十年、以て十年の專制を、逞うするを得べし。然も若し強者たるの資格を、失墜せん乎、彼は乍ち現在に於ける威權を、剝奪せらるゝのみならず、過去に於ける、專制の追懲を課せらるゝことを、覺悟せざる可らず。

要するに支那の所謂、禪讓と云ひ、放伐と云ひ、革命と云ひ、騷亂と云ひ、割據と

云ひ統一と云ひ、會盟と云ひ、征戰と云ふ、唯だ此の強者の權の推移、與奪の葛藤を意味するものに過ぎず。小は宮廷の陰謀より、大は内外の戰爭に至る迄、若し一たび此の鍵を手にせん乎、如何なる難問題も、直ちに解釋し得られずんばあらず。

吾人は未だ支那人の如き、沒理想の人種を見たることなし。吾人は未だ支那の如く、物質的勢力の偉大なる邦土を見たることなし。固より其の長久なる年代と、廣汎なる版圖に於ては、若干の除外例は存す可し。然も是れ唯だ除外例として存するのみ。吾人は支那の歴史に於て、暴君、闇君、庸君、惡君の頗る多くして、其の英主、明主、賢主、善主の少きを見て、不可思議に思ふも、其實は是れ唯だ平凡なる真理也。彼等は君主としての根本的大誤謬に陥りたれば也。則ち其の誤謬とは、土地民人を私有物視する事是れのみ。是れ彼等が、道樂息子が其の父祖の財產を蕩盡するが如く、天下を蕩盡したる所以也。

沒理想の支那人の
君主的な
根本的誤謬の
大なる種

九五 武后より玄宗迄

則天武后の末年は、彼女も強者たるの權を失ふ可く、餘儀なくせられたり。制度に據らず、組織に據らず、唯だ個人的威力に據りたる彼女の政權は、彼女の老病と與に、去らざる可らざる運命となれり。卑怯なる官吏等も、今は推移の動を策す可き、時節到來したりとなし、太子を擁立せり。中宗皇帝是れ也。彼は曾て高宗に紹で帝位に即き、一年にして廢せられ、其弟睿宗に譲り、武后簞立後、久うして再び皇太子となり、茲に再び帝位を踐みたる也。

中宗皇帝は、恐らくは其父高宗よりも、庸愚たりしならむ。而して皇后韋氏は、武后の如く政治的機略、識度なくして、其の淫縱は、相ひ及びけり。彼女は中宗の、武后の爲めに幽閉せらるゝや、艱苦を共にせり。中宗が惶恐の餘、自殺せんとするや、屢々之を沮止したり。此に於て中宗は、彼女を徳とし、再び天日を見るに際せば、何事も彼女の思ふ儘に、一任す可しと約束したり。而して今や其の約束の實行

武后の末年と中宗の踐位の

中宗皇帝と皇后韋氏の

期は到來したりし也。此に於てか則天武后時代の匪政は、其の英雄的色彩を控除して、再び繰り返されたり。憐む可き中宗は、在位五年にして、其の皇后韋氏と、其女安樂公主との爲めに、弑せられたり。

思ひ遣らるる中宗の庸闇

漢初に於ては、呂氏の亂を平ぐるや、上に文帝の明君あり、下に陳平、周勃の賢相あり、遂に漢祚をして、永久ならしむるの基を定めたり。されど中宗には、文帝の徳なく、張柬之、桓彥範の徒、亦た漢相等の比にあらず。身親から武氏の禍亂中に、漾うたる中宗は、皇后韋氏が、其の私通したる武氏の黨魁、武三思と双陸するに際し、點籌の役目を勤めたる程なれば、其の庸闇の程度も、思ひやらるゝ也。

睿宗も亦、庸主

然も韋后の根據は、武后の如く強大ならず。此の機會に於て、宮廷内人心の不安に乗じ、睿宗の子隆基は、韋后及び、其女安樂公主を殺し、睿宗を擁立したり。彼は中宗の弟にして、高宗の子、太宗の孫也。彼は曾て在位七年にして、其母武后の爲めに廢せられ、此に於て二十年を隔て、重ねて帝位に即けり。彼も亦た庸主也。彼は其妹太平公主が、韋后の亂を靖むるに與りて力あるを以て、之を尊寵し、彼

女性者の豪傑、太平公主

女の權威をして、中外を傾けしめたり。太平公主は、女性者の豪傑也。沈敏にして、權略あり。武后の實子にして、武后亦た己に類すとなし、獨り諸子中に於て、愛幸を専らにせしめたり。彼女は、睿宗の皇太子隆基の英武を見て、其の己に不利なるを曉り、之を代へんと欲し。此に於てか宮廷内に、太平公主黨と、皇太子黨との軋轢を來たせり。然も皇太子は、韋后の亂を平げたる元勳也。睿宗迎立の第一人也。睿宗が其の勢の己に逼るを見て、位を譲りたるは、寧ろ自然の成行と云ふ可し。此の如くして唐の歴史中、最も演劇的脚色の豊富なる、玄宗皇帝の時代は、出で來れり。

玄宗皇帝と盛唐の稱

玄宗皇帝は、唐朝三百年間、最も長き在位の天子也。太宗の在位さへも、二十三年に止まり、武后の長生を以てして、其の僭位二十一年に過ぎず。然も玄宗は、在位實に四十三年、其の睿宗の禪を受けたる先天元年と、肅宗に位を禪りたる至德元年とを、通算すれば、實に四十五年にして、恰も太宗に倍するものあり。而して此の時代は、唐朝の文物、制度、百工、技藝の殆んど絶頂に達したる開發期にして、

所謂る盛唐の稱、決して空言にあらず。
人或は曰く、支那に於ては詩は唐代にあり、唐代は盛唐にありと、然り支那の大
詩人は、殆んど此間に輩出せり。杜甫、李白は勿論、王維、王昌齡、孟浩然、岑參、高適の
徒、何れも此の時代の作者たらざるはなき也。されど是れ嘗に詩のみにあらず、
唐代の文明は、此の玄宗の殆んど半世紀に於ける治世に於て、遺憾なき發達を
遂げたり。而して彼は秦平の天子として、殆んど申分なき資格を有したりし也。

九六 玄宗皇帝

若し玄宗皇帝をして、開元年中に崩御せしめん乎、彼は太宗に次ぐの英明の君
主として、唐代の史上に、赫々たる光を放たずんばあらず。但だ彼が在位の、四十
五年に互りたるが爲めに、其の前半の勵精爲治は、後半の荒怠放侈と相反視し、
轉々人をして彼の真相を、没却せしむるものなくんばあらず。然も總べて之を
論ずるに、彼は決して凡庸の君主にあざりし也。彼は君主として、多くの美德
を具へたるのみならず、個人としても、多くの長所を有したり。

彼は決して臆病者にあざりし也。彼が韋氏の亂を平ぐるや、宛も我が中大兄
皇子の、入鹿誅殺の擧に類せり。其の太平公主の黨を一掃するや、神機迅發、他を
して手を措くの餘地なからしめたり。彼にして若し斯心を失はざらしめば、百
の安祿山、史思明あるも、決して一兵をも動かす能はざりしならむ。吾人は彼が
初政に於て、風俗の奢靡を戒しめ、珠玉、錦繡を殿前に焚きたるを見て、未だ必ず

寛大は寧ろ弱點

しも偽善、矯飾の行爲と認めざる也。惟ふに彼は克厲、節儉、此の如くして始めて、天下の治化を遂ぐ可しと信じたるならむ。

彼は支那の君主、若くは首長に屢々見る如き、殘忍の性を有せず。彼は其の一生を通じて、寛大の天子として見る可く、否な寧ろ彼の缺點と云ふ可き程に、寛大なりしが如し。而して其の各皇族に對しても、友愛親懇を極め、其の長枕、大被を爲りて、兄弟と同寢したるが如き。而して彼等が過あるも、其の從屬を罪して、毫も彼等に及ばしめず。例せば、彼が諸王と禁約して、群臣と交結せしめざるや、岐王範之を破る。彼乃ち其の遊宴者を貶謫し、然も範を待つ故の如く、曰く、吾が兄弟自から間無し、但だ趨競の徒、強ひて相託附するのみと、彼の不豫なるや、薛王業妃の弟、竊かに謀る所あり。事覺はれて、杖死せらるゝや、業は妃と惶懼罪を待つ。彼階を降り、業の手を執りて曰く、吾若し必ず兄弟を猜するあらば、天地實に之を殛せんと。即ち之と與に宴飲し、仍て妃を慰諭して、位を復せしめたり。彼が群臣を待つ、亦た概ね此の權衡を失せず。吾人は羅馬の賢帝マァカスさへも、此

寛裕の一

太宗と地を易へしめば如何

の一事に於ては、彼に超ゆる能はざりしを見る也。

彼の曾祖父太宗は、自から射て其兄建成を殺せり。猛將尉遲敬徳をして、吾弟元吉を殺さしめたり。若し彼をして此間に處せしめば、此の如く甚だしきに至らざりしやも、未だ知る可らず。若し太宗をして、彼と地を易へしめば、或は皇族中に幾許の悲劇を演じたらんも、未だ知る可らず。而して彼は寛裕の君子たるのみならず、亦た克く人を知り、人に任ずるの道を知れり。蓋し開元の治をして、貞觀に比するに至らしめたるは、實に姚崇、宋璟等が、相接して政を執りたるに、由らずんばならず。史家曰く、

姚崇宋璟の二相

姚崇相繼爲相、崇善應變、成務、璟善守法、持正、二人志操不同、然協心輔佐、使賦役寬平、刑罰清省、百姓富庶、唐世賢相、前稱房杜、後稱姚宋、它人莫得比焉。

是れ實に平允の觀察也。

玄宗の治世は、恰も我が 明治天皇の御治世と、其の延長を同うせり。然も我が 明治天皇の 聖徳は、日に就り、月に將み、歳と與に其の止まる所を知らざらん

自ら治化に酔ひ倦む

通人的資格の濫用

としたり。然るに玄宗は、自から其の治化に酔へり、自から其の政治に倦めり、且つ彼は帝王としては、餘りに通人たりし也。通人必ずしも帝王たるに適せざるにあらず。乃ち英國先帝エドワード七世の如きも、通人たるに於ては、必ずしも彼に劣らざりし也。然も其の通人たる資格さへも、帝王たる天職の遂行に應用し、利用し、善用したり。英國の今日ある職としてエドワード七世の歐洲に於ける、握手政策の餘澤たらずんばあらず。然るに彼れ玄宗皇帝や、其の通人的資格を、沈湎冒色に濫用せり。此の如くして彼の後半世は、自から天下禍亂の種子を下して、自から其の收穫者たる可く、餘儀なくせられたり。

九七 宦官と藩鎮

帝王の天職と自覺心の不十分

強硬の意志を缺く

唐代の禍機は宦官と藩鎮

玄宗は文武の全材と云ふ可きに庶幾かりし也。彼は文學に深厚なる趣味を有せり。彼は自から孝經の注釋を作りて、之を天下に頒てり。彼の詩と、彼の筆翰とは、乃ち平人とするも、尙ほ稱す可き價值なしとせず。然も彼は帝王の天職に就て、十分なる自覺心を有せざりし也。彼は前半生に稼ぎ溜めたる財産を、後半生に蕩盡す可く、狂肆なる成金者に倣へり。而して彼は帝王として多くの資格を、具備したるに拘らず、唯だ一の強硬なる意志を缺けり。彼の寛大は、必ずしも薄弱なる意志の結果と云ふ可らざるも、彼の寛大の美德は、往々にして薄弱なる意志と併行したり。彼は此點に於て、太宗は固より、則天武后にさへも、及ばざる遠しと云はざるを得ず。

凡そ唐代の禍機は、宦官と藩鎮とより甚だしきはなし。宦官中に在りて事を以、君を立て、君を廢し、君を弑する、木偶よりも輕し。之を外にしては、藩鎮各々其

兵を擁し、天子の命を奉せず互ひに小獨立國をなし、遂に尾大掉はず、國家を分解せしむ。而して此の兩者は、何れも玄宗自から其備を作りたるに由らずんば、あらず。乃ち彼は安祿山の禍亂を養成したる責任者たるのみならず、唐朝衰亡の起因を作りたる首惡と云はざるを得ず。豈に管だ彼が荒色、廢政を以て、彼を罪す可きのみならん哉。

支那歷朝
と宦官

支那に於て、宦官が其の政柄を竊みたるは、必ずしも唐代に創まりしにあらざ、秦始皇の時に趙高あり、東漢には十常侍の徒あり、而して唐以後、明末の如き、亦た最も甚だしきものあり。されど彼等は、何れも未だ兵權を有せざりし也。然も唐代に於ては、宦官をして禁軍を典らしめ、又た樞密の職を帯ばしめたり。此に於てか鼠は虎となり、蛇は龍となれり。初め太宗の制を定むるや、内侍省は三品官を置かず。武后寵嬖多きも、宦官事を用ひず。中宗の時、宦官七品以上千餘人に至りたるも、然も緋を衣る者尙ほ寡かりし也。但だ玄宗に至りて、高力士を擧げて右監門將軍となし、内侍省事に知たらしめ、爾來三品將軍に叙せらるゝ者、

玄宗の高
力士寵用

多く、緋紫を衣る者千餘人に至り、此に於て宦官の權愈々盛に、遂に滔天の勢を爲せり。而して德宗に至りて、藉すに兵權を以てし、遂に濟ふ可らざるに至らしめたり。然も其端を發きたるは、玄宗が高力士を寵用したるに、是れ由らざんばあらず。

玄宗と藩
鎮の制度

藩鎮の制度は、必ずしも玄宗の朝に於て、創まれりと云ふ可らず。高宗の朝にも兵權を有する都督にして、刺史の善惡を監視する按察使、採訪處使等を兼る者、既に節度使の名あり。然も未だ官制として、存置せられざりし也。玄宗に至りて、四邊に皆な節度使を置き、數州を以て一鎮となし、刺史をして之に隸屬せしめ、天寶の初に於て、十大鎮を定め、之に配置するに、多くは漢人種以外の武將を以てしたり。彼等は其の土地を有し、其の人民を有し、其の甲兵を有し、其の財賦を有す。宛然たる小獨立國君主たり。朝命を奉ずる、彼等に便ならば、彼等之を奉じ、奉ずる不便ならば、彼等之を奉せず。威權彼等に移りて、朝廷之を如何ともする能はざるに至れり。爾來安祿山の亂を経て、功臣、勳將輩出し、彼等皆な一個、若く

藩鎮は宛
然小獨立
國君主

太宗時代の折衝府

兵農全く分る

國に叛鎮あり鎮に叛兵あり

は數個の藩鎮に據り、遂に國家瓦解の漸を成せり。
 蓋し唐初に於ては、兵農未だ分離せざりし也。太宗の時代には、折衝府六百有餘あり。民を籍して府兵となし、農隙を以て戰を教ふ。二十にして兵となり、六十にして免ず。征行あれば、將に命じて之を率ゐしめ、事訖れば輒ち罷め、兵は府に散じ、將は朝に歸するの制たりし也。然も一方に壯丁を徵發し、他方にも亦た雜徭を課す。此に於てか逃亡者相接し、百姓之に苦しめり。開元中張説の建議に原き、壯士を召募し、之を宿衛に充て、州縣をして雜役するなからしむ。此の如くして兵農全く分る。乃ち兵は一種の職業となれり。而して今尙ほ支那に於ては、此の召募兵制度を維持しつゝあり。
 若夫れ日本に於ては、兵農分離するも、兵事は武門武士の階級に限りたるも、支那に於ては、一般國民より隨意に召募したり。乃ち節度使は、此の召募兵を擁して、以て動もすれば天子の命に抗するに至れり。而して兵も亦た動もすれば、節度使の命に抗し、此に於て國に叛鎮あり、鎮に叛兵あり。驕將、悍卒、以て天下の死

命を制するに至りし也。

九八 唐の女禍

女禍と不思議の因縁

宦官、藩鎮の弊の一半は、寧ろ制度にありと云ふを得べし。されど女禍に至りては、不思議の因縁ありて、唐の皇家に付き纏へるものに似たり。其の初代高祖が、唐公李淵として、晉陽の留守たるや、官監裴寂は、私かに宮人を以て、入りて侍せしめたり。是れ云ふ迄もなく、隋の煬帝の宮人も、其子李世民——太宗——の擧兵に際し、高祖の遲疑するや、暗に此の弱點を捉へて、脅嚇の資料とせり。即ち彼は父に向て、事發はれて、族誅を恐るゝが爲めに、然かするの意を仄示せり。女色は實に、高祖決意の最大動機となりし也。

太宗の曠世の明主たるを以てして、其弟齊王元吉を殺し、其妻を納れて、妃と爲せり。廬江王瑗の反を以て誅せらるゝや、其姫亦た入りて左右に侍せり。而して貞觀の末、武氏は才人として宮中にあり、其子高宗に至りては、父妾武氏を納れて后となせり。是れ實に人倫を無視するの甚だしきものにあらずや。

太宗の人倫無視

玄宗自身の大變

經驗の忘却

太宗と婦人の印象

武后及び中宗の皇后韋氏の淫虐、穢亂なる、寧ろ多く語らざるを以て、其の要領を得べし。而して韋后の其女安樂公主と與に、中宗を弑したるが如き、唐代の女禍も、殆んど絶頂に達したりと云ふ可し。然るに其の女禍の亂脈を、蕩除したる玄宗彼自身が、更により大なる女禍に罹りたるに至りては、吾人は經驗の効果甚だ稀薄なるに、驚かざらんとするも能はざる也。

知らず彼れ玄宗は、其の自から、經驗したる所を、忘却したる乎。太宗の如きは、漁色に於て、人後に落ちざる強者たり。されど彼は、遂に其の政柄を婦人の爲めに、左右せられたることあらざりし也。要するに彼が婦人の色を好むは、猶ほ彼が王羲之の書を好むが如し。彼は之を愛玩したるのみ。彼は其の皇后長孫氏の内助に待ちし所多大にして、亦た之を識認するに吝かならざりしも、是れ良に内助にして、内害にあらざりし也。其他の婦人に就ては、何等の印象を、彼に與へたるものあらざりし也。其子高宗の如きは、逆さまに其の皇后武氏の爲めに制せられたり。而して玄宗に至りては、更らに此れより甚だしきものありし也。但だ楊

皇后王氏
を廢す

貴妃が、武后程の大惡黨たらざりしを以て、僥倖となす可きのみ。
玄宗は其の政治の美、太宗の貞觀時代に比す可き、開元十二年に於て、皇后王氏を廢せり。是れ武惠妃を寵したる結果也。彼は武惠妃を皇后たらしめんと欲して得ず、其の逝くや、快々として自から樂しまず。史家記して曰く、

初武惠妃薨、上悼念不已、後宮數千、無當意者、或言壽王妃楊氏之美、絶世無双、上見而悅之、乃令妃自以其意、乞爲女官、號太眞、更爲壽王妻、左衛郎將韋昭訓女、潛內太眞宮中、太眞肌態豐艷、曉音律、性警穎、善承迎上意、不替歲、寵遇如惠妃、宮中號曰娘子、凡儀體皆如皇后。

太眞の入
内と玄宗
の不倫

武惠妃の逝きしは、開元二十五年にして、太眞の入内は、天寶三載也。其の中間八年のみ、白樂天の長恨歌には、「楊家有女初長成、養在深閨人未識」とあれども、是れ唯だ皇家の爲めに諱みたる婉詞のみ。其實彼女は、玄宗の子壽王の妃として、十年の歲月を壽邸に送りし者也。即ち高宗は死せる父の妾を納れ、玄宗は生ける子の妾を納る。其の不倫の程度に於ては、何人も之に尙ふ所なかる可し。此の

玄宗の後
半生と晩
年の凄凉
悲愴

の如くして女禍の横潰、縦溢を見ざらんとするも、それ豈に得可ん哉。
彼は其の後半生に於て、堂々たる有唐の天子として、我が市井暴富家の驕兒が、一朝に巨萬の財産を相續し、乍ち柳巷華街の職業的女性に溺れ、其の結果、又た一朝にして寒乞兒となりたるが如き、徑路を繰り返へせり。但だ我が市井の驕兒の、其の末路は、往々溺愛せる婦人によりて、衣食するに反し、彼は天子たるが爲めに、却てより大なる不仕合を被り、溺愛せる婦人に別れ、空しく凄凉、悲愴なる晩年を送りしのみ。

天職の閑
却と倦怠
の倦意

吾人は玄宗の如き、英明の君主にして、此の如き末路を見、實に人間の價値は、時と處とによりて、亂高下あるを省念せずんばあらず。惟ふに是れ豈に女禍のみと云はん哉。彼が君主の天職を閑却して、其の政治に倦怠したるの結果のみ。

九九貨と色

玄宗は支那の理想的人物

玄宗の豪奢天下を失はんとす

富の進歩

玄宗皇帝は、恐らくは支那的理想の人物ならむ。支那人の欲望は、貨と色と也。而して彼れ玄宗皇帝は、此の兩者に於て、何等拘束なき自由を逞うしたり。蓋し四十五年の泰平は、支那の富をして、長足の進歩をなさしめたり。而して太宗の帝國主義は、支那四境の門戸を開放し、世界のあらゆる物資、珍寶、奇貨を、支那に蒐集せしめたり。試みに其の一二を擧げん乎。龜茲國よりは、遊仙枕を奉り、交趾國よりは、避寒犀を献ず。虢國夫人には、夜明枕あり、安祿山には、金雞障あり、申王には、高麗の赤鷹あり、岐王には、北山の黃鸝あり。彼の安祿山の反旗を翻す前年、天寶十三載に於ては、支那本土の戸口九百六十一萬餘、人口五千二百八十八萬餘と稱すれば、亦た以て其の殷庶の一斑を、概察するに足るものある也。

當今の所謂る成金輩が、一夕の宴會に、一人前百金、乃至數百金を費して、自から豪とするを見れば、天下の富を、悉く自個の私有と心得たる玄宗が、開元の初政

悪番頭の李林甫

久しく堪ふる能はず

に於て、錦繡珠玉を、殿前に焼き棄てたる當時を忘却し、或は宮人をして、霓裳羽衣の曲を舞はしめ、或は舞馬百匹をして、盃を銜み壽を上らしめ、或は犀象を引て場に入れ、且つ拜し且つ舞はしめ、沈香亭を築き、大液池を穿ち、被底の鴛鴦を擬し、風流の陣を張り、大いに成金氣質を發揮したるも、決して不思議にあらざる也。多くの成金輩、其の程度に於ては、何れも多少の相違あるも、概ね小玄宗たらざるはなし。但だ彼は唐の天子たりしが爲めに、一家を亡は^{つし}ずして、却て天下を亡はんとしたりしのみ。

彼は不幸にして、悪番頭に委任せり。そは口蜜腹劍の李林甫是れ也。開元の初期に於ける、姚宋等の賢相は云はずもがな、其他張說、韓休、張九齡の如き、何れも相位を辱しめざる名臣たりし也。韓休の相となるや、彼宴遊小過あれば、輒ち左右を顧みて曰く、韓休知るや否や、言終らざるに、諫疏已に至る。左右曰く、休相と爲り、陛下殊に舊よりも瘦せたりと。彼曰く、吾瘠たりと雖も、天下は肥ゆと。彼は此の如き賢明の主也。然も彼は久しく之に堪ふる能はざりし也。史家曰く、

上即位以來、所用之相、姚宗尚、通、宋璟、尚、法、張嘉貞、尚、吏、張說、尚、文、李元紘、杜暹、尚、儉、韓休、張九齡、尚、直、各其所長也。九齡既得罪、自是朝廷之士、皆容身保位、無復直言。

李林甫の曲事

而して張九齡に襲いで、宰相となりたるは、實に李林甫也。史家曰く、上晩年自恃承平、以爲天下無復可憂、遂深居禁中、專以聲色自娛、悉委政事於林甫。林甫媚事左右、迎合上意、以固其寵。杜絕言路、掩蔽聰明、以成其姦。妬賢疾能、排抑勝己、以保其位。屢起大獄、誅逐貴臣、以張其勢。自皇太子以下、畏之側足。凡在相位十九年、養成天下之亂、而上不之寤也。

楊貴妃の寵幸

此の如く惡番頭と、艶妾とは、内外相表裏して、遂に天寶の亂を醸生したり。楊貴妃の寵幸は、其の一門姉妹兄弟に及べり。爲めに當時の民間は、『生男勿喜、女勿悲、君今看女作門楣』の謠を來たせり。而して彼女は天寶五載に、始悍不遜を以て、一度宮中を出され、乍ちに召還せられたり。而して同九載に、再び宮中を出されて、又た乍ち召還せられたり。彼女の玄宗に及ぼす勢力は、召還の度毎に増加

驕奢の狀

し來れり。彼女が羯胡の安祿山と、母子と稱しても、宮掖に對食しても、彼は平然として之を禁せざりし也。彼の鼻毛や、三千丈と云ふ可し。當時如何に彼が驕奢に耽りたるかは、諸貴戚競うて食を獻じ、水陸珍羞數千盤、一盤の費中人十家の産に値したりと云ひ、安祿山に賜ふに、五斗入りの黄金の飯櫃二個、同銀の米浙盆二個を賜へりと云ふを見て、彼が黄金を見る、糞土の如かりしを知る可し。

驕奢と文弱

然も驕奢は、必ず文弱と相伴ふもの也。當時太宗以來の府兵は、名ありて實なく、僅に官吏あるのみ。張說の意見によりて成りたる、其の召募兵の如きは、皆な市井負販、無賴の子弟、固より干戈を執るを習はず。而して民間兵器を挾むの禁令を布き、子弟武官たる、父兄擯けて齒せず。されば一夫臂を攘へば、天下瓦解するは、是れ自然の數のみ。而して彼れ玄宗は曰く、朝事は之を宰相に附し、邊事は之を諸將に附す、夫れ復た何をか憂へんと。

一夫臂を攘へば天下瓦解

所謂宰相と諸將

所謂其の宰相とは、楊蒲を善くするを以て、寵任を得たる楊貴妃の親黨、楊國忠の徒乎。其の諸將とは、楊貴妃の兒として、錦綉の大襴褌に便々たる大腹を裹ま

一身以て
國家盛衰
の標本た
り

杜市と彌耳鼓
四四二
れ、宮女等によりて、綵輿に昇れ、醜聲宮内に漏れ、野望關外に溢る、安祿山の徒
乎、吾人は玄宗の在位四十五年間の跡を見て、國家盛衰の標本を、宛も彼一人に
集めたるの感なくんばあらず。是れ豈に女禍のみと云はん哉。但だ當時の諸將
中、一人の豪傑なく、遂に代りて天下を取り得る者あざりしが爲めに、形式丈
にても、唐朝の再造を見るを得たるのみ。唐家の再造、豈に止だ李郭の力のみと
云はん哉。

一〇〇 漁陽鞞鼓

玄宗時代
の征戰

玄宗は漢武若くは唐太宗の如く、積極的に四境を開拓し、大陸を席捲するの雄
圖、遠略あざりし也。されど邊功を邀むるは、邊將の本能的動機也。唯だ大權上
にあり、此の邊將を駕御し、或は攻め、或は守らしむるを得る也。然も大權下に移
らん乎、邊將皆な自個を利せんが爲めに、隨意の運動を逞うせずんばあらず。玄
宗時代の征戰は、概ね是也。

漢人種は
文弱人種は

由來漢人種は、文弱人種也。彼等の中には、孫吳の兵法家を生じたり。されど概し
て之を觀察すれば、武事は彼等の好む所にあざる也。されば一朝事あれば、自
から之に赴くを欲せず、他を雇役せずんばあらず。乃ち玄宗時代に於ても、諸將
の錚々たる者、其の多數は、漢人種以外の出たらざんばあらず。安祿山は營州雜
胡也。史思明も亦た然り。哥舒翰の父祖は、突騎施別部酋長也。李光弼は契丹王楮
洛の子也。高仙芝は高麗人也。封常清は猗氏人也。知らず玄宗は何故に、此の如く

諸將の錚々
たる者は胡

胡人を使用したる乎。

李林甫奏言、文臣爲將、怯當矢石、不若用寒峻胡人、胡人則勇決習戰、寒族則孤立無黨、陛下誠以恩治其心、彼必能爲朝廷盡死、上悅其言、至是諸道節度使盡用胡人。

外人使用
通有支那の

濛龍の極
まる所の安極
反祿山の謀

然も是れ玄宗の時代にのみ限りたる事にあらず、長髮賊の亂に、英人ゴルトン將軍を用ひ、日清戰爭に獨逸人ハンネッケンを用ひ、南北革命戰爭に、日本の豫備將校を用ひたる如く、苟も其の便宜さへあらば、彼等は毫も遲疑する所なき也。但だ玄宗に於て、其の甚だしきを見るのみ、詩人歌うて曰く、『漁陽鞞鼓動地來、驚破霓裳羽衣曲。』と、濛龍の極まる所は、遂に安祿山の謀反となれり。是れ實に天寶十四載十一月也。

祿山乘鐵鑿、步騎精銳、烟塵千里、鼓譟震地、時海內承平、百姓累世不識兵革、猝聞范陽兵起、遠近震駭、河北皆祿山統內、所過州縣、望風瓦解、守令或開門出迎、或棄城竄匿、或爲所擒戮、無敢拒之者。

倉皇蜀に
蒙塵

危急の際
にも人君
の度あり

と。玄宗は今や、其の年貢を納む可き時節に際會せり。彼は自から嘆じて、二十四郡曾て一人の義士無きかと曰へり。然り、其名未だ長安の天子に顯はれざる。唯だ一の平原太守顏真卿ありしのみ。而して彼の風を聞て起つ者、無きにあらず。りしも、固より賊兵を支持す可くもあらず。斯くて洛陽は賊の據る所となり、潼關守らず、彼は倉皇蜀に蒙塵せり。

吾人は玄宗が此の危急の際に於ても、尙ほ人君の度ありしを、記憶せざる可らず。楊國忠が賊に與へざらんが爲めに、左藏を焚かんと請ふや、彼愀然として曰く、賊來りて得ずんば、必ず更らに百姓を掠めむ、之を與ふるに若かず、重ねて吾が赤子を困しましむる勿れと、而して楊國忠が便橋を焚くや、彼曰く、士庶各々賊を避け生を求む、奈何んぞ其路を絶たむと、高力士を留めて、之を撲滅し來らしめたり。彼は民の糲飯を献ずるや、皆な其直を酬いて、之を慰勞せり。彼は尙食の御膳を舉げて至るや、先づ從官に賜うて、而して後之を食せり。彼は軍隊の憤怒に餘儀なくせられて、楊國忠、及び楊貴妃姉妹の殺戮を傍觀せり。乃ち彼の

馬嵬驛の
悲劇

一身と雖も、今は其の自由を得ざれば也。彼は遂に將士の心を安んせんが爲めに、馬嵬驛に於て、其の最愛の楊貴妃を佛堂に引き、之を殺すに任せり。彼は父老の言を聽き、皇太子の在留を肯諾せり。而して彼の岐山に至るや、又たしも軍隊は、暴動を起さんとせり。史家記して曰く、

上至岐山、或言賊前鋒且至、上遽還宿扶風郡。士卒潛懷去就、往々流言不遜。陳玄禮不能制、上患之。會成都貢春綵十餘萬匹、至扶風、上命悉陳之於庭、召將士入、臨軒諭之曰、朕比來老耄、託任失人、致逆胡亂常、須遠避其鋒。知卿等皆蒼猝從朕、不得別父母妻子、芟涉至此、勞苦至矣。朕甚愧之。蜀路阻長、郡縣褊小、人馬衆多、或不能供、今聽卿等各還家、朕獨與子孫中官前行入蜀、亦足自達。今日與卿等訣別、可共分此綵、以備資糧。若歸見父母及長安父老、爲朕致意、各好自愛也。因泣下霑襟。衆皆哭曰、臣等死生從陛下、不敢有二。良久曰、去留聽卿、自是流言始息。

大なる哉
耽溺の禍

記して此に至れば、彼は決して庸闇の君主にはあらざりし也。嗚呼耽溺の禍、亦大なる哉。

肅宗と安
祿山の

一〇一 肅宗より代宗迄

若し安祿山をして足利尊氏たらしめ、史思明をして、足利直義たらしめば、唐の天下を取りて、之に代る能はざる迄も、之を中分して、其の一半を保有するを得たりしならむ。若し肅宗、若くは代宗をして、太宗たらしめば、或は唐朝の再造を全うしたらんも、未だ知る可らず。但だ彼我與に其人にあらざりしが爲めに、安祿山の亂平ぎたるも、有唐の天子は、内にしては宦官に困しめられ、外にしては藩鎮に制せられ、遂に自から振ふに由なかりしのみ。

肅宗の即位

同紇の兵を假りて
唐朝の再造

玄宗の子肅宗は、玄宗と與に蜀に赴かんとして、父老等の爲めに遮り止められ、遂に天寶十五載、即ち至徳元載七月、位に靈武に即けり。彼は太子たると二十年、然も帝王の襟度に於て、一も玄宗に及かず。但だ玄宗程の耽溺あらざりしのみ。彼は白衣山人李泌を謀主として、其の帷幄に參せしめたり。郭子儀、李光弼の徒、皆な其力を竭せり。彼は郭子儀の獻策を容れ、回紇の兵を假りて、安史の亂を蕩

除せんと試みたり。回紇の懐仁可汗は、其子葉護をして、回紇及び西域の衆十五萬を率ゐて、來援せり。此に依りて、長安を恢復せり。又た洛陽を恢復せり。而して玄宗も亦た、蜀より復歸せり。此の如くして、唐朝は形式の上に於て、再造せられたり。

宣者李輔國と張皇后

肅宗は庸主なれども、闇主にあらず。然も彼も亦た、宣者李輔國と張皇后とに制せられ、遂に如何ともする能はざりし也。李輔國は、彼が皇太子たるの際に於て、彼を擁護したる功勞者也。張皇后は、戎馬間關の際に於て、彼と艱苦を共にしたる恩愛あり。史家記して曰く、

張良娣性巧慧、能得上意、從上來朔方、時從兵單寡、良娣每寢、常居上前、上曰、禦寇非婦人所能、良娣曰、蒼猝之際、妾以身當之、殿下可從、後逸去、至靈武、產子三日、起縫戰士衣、上止之、對曰、此非妾自養之時、上以是益憐之。

是亦た一個の女妖

是亦た一個の女妖のみ。但だ彼女は、楊貴妃の奢侈なく、李輔國は、李林甫の辣腕なきも、其の朝政を紊亂するに於ては、稍々之に類似するの力ありしものに似

肅宗の崩御と張皇后李輔國の

たり。彼等は相謀りて、玄宗が外人と交通するを理由として、肅宗の病に乗じて、詔を矯めて之を西内に遷し、體の善き幽囚となせり。而して肅宗の柔弱なる、百戰艱難復兩京、范陽餘孽尙縱橫、太平天子無愁思、內殿惟聞打子聲。』の狀あり。空しく飲宴遊戯に、其の歲月を消磨せり。

肅宗は在位七年にして、其父玄宗の跡を趁ひ、父子相接して崩御せり。而して此れと同時に、宮廷陰謀は行はれたり。張皇后と李輔國とは、當初に於て、相結託したるに拘らず、晩年互ひに隙あり。肅宗の疾篤きや、張后太子を召して、李輔國を除かん」と謀る。太子應せず。其謀漏れ、李輔國は、宣者程元振と相議して、張后及び一味の諸王を殺し、而して後玄宗及び肅宗の喪を發し、太子をして位に即かしむ。所謂る代宗皇帝是れ也。

代宗と李輔國

代宗は廣平王俶にして、天下兵馬元帥として、屢々戰場に臨めり。然も彼も亦た、李輔國に制せられたり。輔國曰く、大家但だ禁中に居れ、外事老奴の處分に聽けと。彼其心平かならざるも、輔國が禁兵を握るが爲めに、之を如何ともする能は

ざりし也。而して遂に盜をして、其の第に入らしめ、輔國の首及び一臂を竊み去らしめたり。

前門の狼
と後門の虎

されど彼は、更らに宦者程元振、魚朝恩の徒を寵用し、爲めに繼かに前門の狼を退けて、却て後門の虎を進めたり。宦者専横の弊は、玄宗以降、年代と與に愈々其の劇だしきを加へ來れり。而して外にしては、回紇、吐蕃等の動もすれば、其虚を視ふあり。内にしては、安史の餘孽未だ全く蕩除せず。而して勳勞の諸將、各々飛揚、跋扈の志を逞うせんとするあり。而して彼れ代宗や、玄宗が宇文融をして、聚斂の政を逞うせしめたる如く、劉晏をして、利財の事に幹たらしめ、胡僧不空三藏に歸依し、佛果を祈り、僅かに眼前の苟安を貪ぼり、國勢をして徒らに萎靡、不振に陥らしめたり。

國勢を萎
らし振むに
陥る

吾人が唐朝の歴史を説くは、此に止まる。何となれば、杜甫の死は、代宗の大暦五年にして、其の以後は、本論に何等の干係なければ也。

登岳陽樓

昔聞洞庭水今在
岳陽樓吳楚東南
坼乾坤日夜浮親
朋喪一孛危病骨
孤舟我馬關坐北
憑軒涕泗流



杜甫

杜甫の本
傳に到著

彌耳敦の
主觀以
詩人

杜甫の遠
祖と祖父

第九章 杜甫の生涯

一〇二 文士の血統

吾人は漸く杜甫の本傳に到著せり。然も彼の傳記としては、舊新唐書均く本傳あれども、極めて簡略にして、其の所記數葉に過ぎず。之を彌耳敦傳の精詳、審密、博證、旁引、人をして彌耳敦博物館に入りたる思あらしむるものに比すれば、兩詩人の幸、不幸は、同日の論にあらず。但だ彼は彌耳敦の如く、否な彌耳敦より以上の、主觀的詩人也。賴ひに今日迄保存せられつゝある、古體三百九十首、近體一千六首、殆ど皆な間接、直接、彼の傳記ならざれば、其の資料たり。苟も彼の詩を一讀すれば、到底作者其人を看過する能はざるは、彼が詩の特色也。人或は杜詩によりて、唐代の酒價を知るを得たりと稱するも、尤も知るを得たるは、作者其人の生活と、遭際と、思想と也。一切の杜詩、舉げて作者の自傳と稱するも可也。彼は文學者たる、豊富の血液を齎して出で來れり。彼の遠祖は、所謂る左傳の僻

ありと自稱したる平吳の功臣、司馬晋の將軍、杜預元凱也。預の左傳の註釋は、左傳と與に不朽の作たり。後世杜註に加ふる者あり、されど遂に之れに代ふるものなき也。而して彼の祖父杜審言は、初唐の詩人として、大家の一に列せり。此の如く、彼は後天的詩人たる前に、既に先天的詩人たりし也。

杜審言は詩人として、杜甫の祖父たるを辱しめざる、大家也。而して彼が簡傲、自恃の氣質も、亦た若干、乃孫杜甫を聯想す可きものなからず。本傳に曰く、

審言恃才高、以傲世、見疾、蘇味道爲天官侍郎、審言集判、出謂人曰、味道必死、人驚問故、答曰、彼見吾判、且羞死、又嘗語人曰、吾文章、當得屈宋作、衛官、吾筆、當得王羲之北面、其於誕類此。

彼が曾て貶謫せられて、獄に繋かれ、將さに死せんとするや、彼の子并年十三、及を哀みて、其の構罪者を刺し、并亦た殺さる。而して彼は爲めに免かるゝを得たり。知る可し、杜氏の血管には、止だに傲慢の血あるのみならず、亦た慷慨の血存したることを、彼が蘇味道に贈る五言排律中の、

大家杜審言

杜氏の血管には傲慢と存す

雲淨妖星落、秋高塞馬肥。據鞍雄劍動、搖筆羽書飛。

の句を讀み、又た早春遊望の五律の、

雲霞出海曙、梅柳度江春。淑氣催黃鳥、晴光轉綠蘋。

の句を誦すれば、杜甫の詩の、自から淵源の存する所を知るに於て、餘師なくんばあらず。

何處までも自惚漢

審言は何處迄も自惚漢也。其の死せんとするや、尙ほ左の如き大言を吐けり。本傳に曰く、

初審言病甚、宋之間武平一等、省候何如、答曰、甚爲造化小兒相苦、尙何言、然吾在久歷公等、今且死、固大慰、但恨不見替人云。

審言の子閑、閑の子即ち杜甫也。吾人は未だ杜甫の父杜閑に就て、多く知る所なし。されど彼は、其の父たる審言よりも、子たる甫よりも、平凡漢たりしならむ。彼は奉天の令にて終りたれば、其の官位も上達したりと稱す可らず。彼の作として、後世に存したるものなければ、其の文藻も多く顯はれざりしならむ。

杜甫の父杜閑

詩中の自述

杜氏は本来、京兆杜陵より出で、後襄陽に移り、更らに河南の鞏縣に徙る。吾人は杜甫が詩中の自述によりて、聊か其の内容的生活と、外接的境遇とを、知るを得る也。

杜甫の生誕と一生

彼は睿宗の先天元年、即ち玄宗踐祚の初年に生る。彼の一生は玄宗と始終し、更らに肅宗を経て、代宗の大暦五年、五十九歳にて逝けり。乃ち彌耳敦に比して、七歳を短くせり。然も彼にして長生したらんも、恐らくは現存以外に、多くの製作を期待する能はざる可し。何となれば、彼は彌耳敦の如く、特殊の目的を定め、終生の事業として、其の全力を之に集注したるに非ずして、唯だ其の身世、閱歷に於て、其興を遣り、懷を陳べ、情を暢べ、志を叙したるに過ぎざれば也。而して此の如き機會は、彼が五十九年の歳月中に於て、特に天寶末期の、倏忽大變動の時節に於て、最も多大に發生し、彼は一も之を逸せず、殆ど悉く之を捉へ來りて、彼の詩囊中に入れたれば也。『人生七十古來稀』とは、彼の詩句也。彼は此の古稀に達せざるも、其の詩卷は、長へに天地の間に留め得たり。彼復た何をか憾みん哉。

詩卷長留天地間

杜甫と彌耳敦

四五四

一〇三 處世に拙なる詩人

杜甫は早熟兒

杜甫は多くの文人と與に、早熟兒たりしが如し。彼は曰く、『七齡思即壯。開口詠鳳皇。九齡書大字。有作成一囊。』と、即ち彼は七歳にして、既に詩人たりし也。又た曰く、『往昔十四五。出遊翰墨場。斯文崔魏徒。以我比班揚。』と、崔魏とは、當時の名士崔尙、魏啓心にして、班揚とは、班固、揚雄ならむ。十四五歳の少年を、此の如き大家に比似するとは、聊か杜氏家傳の自惚も、加味し居るならんも、兎も角も、彼が夙成の才童たることは、識認せざる可らざる也。

世途發程の當初より不幸

然も不幸は、恒に彼の世途發程の當初より、附き纏へり。彼は二十にして姑蘇に下り、浙江を渡り、剡溪に遊び、開元二十三年、二十四歳にして京兆の貢舉に赴きたれども、不幸にして落第せり。『歸帆拂天姥。中歲貢舊鄉。氣劇屈賈壘。目短曹劉墻。忤下考功第。獨辭京兆堂。』と、是れ則ち彼が吳越漫遊後、落第の始末を叙したる也。彼は一蹶氣尙ほ餒えず、揚々乎として齊趙の間に遊べり。『放蕩齊趙間。裘

第九章 一〇三 處世に拙なる詩人

四五五

處世の術に最も拙

最も李白に拳々

馬頗清狂』と、惟ふに彼は此際に於て、青春の快興を飽喫したるならむ。然も彼は處世の術に於て、他の多くの詩人に比して、最も拙なりしが如し。彼は開元二十九年より、天寶三載の間、概ね洛陽にあり、同四載に齊州に遊び、同五載に長安に歸れり。『快意八九年。西歸到咸陽』もの是也。惟ふに天寶三四載の交は、彼が其の好敵手たる李白と、從遊したる時期ならむ。當時白は翰林より放歸せられて、梁宋齊魯の間を客遊せり。彼は一生の中に於て、其の同時の詩人中、最も李白に拳々たりしが如し。其の集中に於て、白に言及するもの、十四處あり。其の『醉眠秋共被携手日同行』の句を誦すれば、彼等兩人の交驩の状見る可く、『世人皆欲殺。吾意獨憐才』の句を誦すれば、彼が李白に對する、傾倒の情を見る可し。而して李白は曰く、『思君若汶水。浩蕩寄南征』と。又た曰く、『何時石門路。重有金樽開』と。彼等が白眼相接せず、互ひに相交驩したるを見れば、文士相輕んずるの語は、彼等兩人に向ては、適用す可らざるが如し。但だ甫が白に於ける如く、白が甫を推重したるや、否やは、疑問也。吾人は必ずしも、飯顆山頭の一首の

杜甫の一人第者

評書破萬卷。下筆如有神。

立身の方便を得ず

爲めに、然か謂ふにあらず。

天寶六載、天下に一藝ある者を徵して、韋下に詣らしむ。李林甫尙書省に命じて之を試みしめ、皆な之を下第せしむ。而して彼れ林甫は、玄宗に向て、之を口實として、野に遺賢なきを賀せり。然も自から遺賢の魁を以て居る杜甫、亦た下第者の一人たりし也。當時彼の生活は、恐らくは左の詩句にて、最も痛快に説明せられむ。

甫昔少年日。早充觀國賓。讀書破萬卷。下筆如有神。賦料揚雄敵。詩看子建親。李邕求識面。王翰願卜鄰。自謂頗挺出。立登要路津。致君堯舜上。再使風俗淳。此意竟蕭條。行歌非隱淪。騎驢三十載。旅食京華春。朝扣富兒門。暮隨肥馬塵。殘杯與冷炙。到處潛悲辛。主上頃見徵。歛然欲求伸。青冥却垂翅。蹭蹬無縱鱗。

彼は此の如く長安、洛陽の間に彷徨して、立身の方便を求め、遂ひに得ず。今や饑窘其身に迫り、如何ともする能はざるに到れり。而して天寶十載、彼年四十にして、三大禮賦を進むるや、玄宗之を奇とし、制を集賢院に待たしむ。然も未だ無官、

高く自ら
稱道

四十四歳
にして漸
く一官

無職の身のみ、彼は此間に於て、數々賦頌を上り、因りて高く自から稱道せり。
 且言先臣恕預以來、承儒守官十一世、迨審言以文章顯、中宗時、臣賴緒業、自七歲
 屬辭、且四十年、然衣不蓋體、嘗寄食於人、竊恐轉死溝壑、伏惟天子哀憐之、令執先
 人故事、拔泥塗之久辱、則臣之述作、雖不足鼓吹六經、先鳴數子、至沈鬱頓挫、隨時
 敏給、揚雄枚臯、可企及也、有臣如此、陛下其忍棄之。
 と。彼は餓死に瀕しても、尙ほ杜氏家傳の自負心を、抛却せざる也。然も彼の學者
 的門地にして、且つ彼の藝能を以てして、此の如く窮地に陥る所以のもの、豈に
 彼が處世の術に於て、非常なる缺點ありしが爲めならざるを得んや、而して彼
 は天寶十四載、河西尉を授けられ、拜せず、右衛率府胄曹參軍に改められ、四十四
 歳にして、漸く一官を贏ち得たりし也。

一〇四 一官久しからず

彼が集中
の大文字

許身一何愚
竊比稷與契

天寶十四載十一月、彼は職を奉ずる間もなく、其の妻子に會す可く、奉先縣に赴
 けり。當時家累は此處にあり、彼は長安に旅寓の身たりしを以て也。而して彼が
 『自京赴奉先縣詠懷五百字』は、彼が集中の大文字にして、『北征』と與に、彼が畢
 生の本領を覗ふに足るものあり。
 其の冒頭に曰く、『杜陵有布衣。老大意轉拙。許身一何愚。竊比稷與契。』と、彼は四
 十四歳なれば、未だ老大と詫ぶ可らざるに似たり。されど四十を初老と云へば、
 而して彼が五十九歳にて逝きしことを思へば、老大の語も、彼に取りては、妥當
 と云ふも亦た妨げず。但だ處世の拙に至りては、彼自ら知るの明ありと云ふ可
 き歟。然も其の抱負に至りては、后稷たり、司徒契たり。乃ち君を堯舜に致すを以
 て、彼の理想としたるや知る可し。
 若夫れ『生逢堯舜君。不忍便永訣。』と云ひ、『葵藿傾太陽。物性固莫奪。』と云ふ

一幅玄宗
晩年の活
畫圖

杜甫と彌耳敦

四六〇

が如き、固より彼が忠厚の至性を見る可し。『君臣留歡娛樂動般樛嶠』は、玄宗驪山宴遊の事を諷したる也。而して、『形庭所分帛、本自寒女出、鞭撻其夫家、聚斂貢城闕。』と云ひ、『況聞内金盤、盡在衛霍室。』と云ひ、『朱門酒肉臭、路有凍死骨、榮枯咫尺異、惆悵難再述。』と云ふ、死も是れ一幅玄宗晩年荒政、廢治の活畫圖ならずんばあらず。

安祿山の
叛旗と彼
の歸家

蓋し安祿山の范陽に叛旗を擧げたるは、同年の十月にして、彼が奉先縣に赴きたるは、其の十一月也。詩中一句の、此事に説著せざるは何ぞや、彼は未だ之を聞知せざれば也。豈に管だ彼のみならんや、玄宗皇帝彼自身さへも、未だ深く之を信せざりし也。『老妻寄異縣、十口隔風雪、誰能久不顧、庶往共饑渴、入門聞號咷、幼子餓已卒、吾寧捨一哀、里巷亦嗚咽、所愧爲人父、無食致夭折。』と、是れ彼が歸家の光景也。彼は風雪を衝き、久し振りに家に還れば、其の幼子は、營養不足の爲めに、已に死したりし也。

彼の居住は、尙未だ定まる所あらざりしが如し、翌年天寶十五載、即ち肅宗の至

彼の居住
と彼の本
領

徳元載五月には、奉先より白水に往き、舅氏崔少府に依り、六月には、白水より鄜州に往き、肅宗の位に靈武に即きしを聞き、鄜州より行在に赴かんとして、遂に賊中に陥れり。然も彼は如何にして、之を脱し得たる乎。吾人は但だ彼が長安の金光門より出て、徒歩風翔に至りたるを知るのみ。然も彼が其の清節の、毫も玷がれざりしを見て、永王璘に脅かされて、其の謀反に與みしたる李白や、安祿山に降りて、僞官を受けたる王維に比して、彼が爲めに、其の本領を全うし得たることを、慶せずんばあざざる也。

始めての
官人的生
活

至徳二載四月、彼は賊を脱し、鳳翔に於て、肅宗に謁し、左拾遺を拜せり。後人彼を稱して、杜拾遺と爲すもの、之が爲め也。彼は此際に於て、始めて官人的生活を營むを得たるが如し。然もやがて彼は、房琯を救ふの疏を上りて、肅宗の怒に觸れ、三司に詔して、推問せらるゝの厄に遭ひ、宰相張鎰の救によりて、漸く免るゝを得、八月、鄜州に放還せられたり。彼の在職は、此の如く四月より、八月に至るの短時期たりし也。

第九章 一〇四 官久しからず

四六一

彼は此の短時期に於て、岑參を諫官に推薦せり。岑參亦た詩人として、彼の友たり。邊塞の作に於て、特に其の長を示せり。『岑參識度清遠、議論雅正、佳名蚤上、時輩所仰』とは、彼が岑參を品藻したる言也。而して其の口勅三司推問を放つを、奉謝するの狀に曰く、

臣以陷身賊庭、憤惋成疾、實從間道、獲謁龍顏、猶逆未除、愁痛難遏、假廁衰職、願少裨補、竊見房瑄以宰相子、少自樹立、晚爲醇儒、有大臣體、時論許瑄、必位至公輔、廉濟元々、陛下果委以樞密、衆望甚允、觀瑄之深念主憂、義形於色、況畫一保秦、其素所蓄積者已、而瑄性失於簡、酷嗜鼓琴、董蘭庭今之琴工、遊瑄門下有日、貧病之老、依倚爲非、瑄之愛惜人情、一至於玷汗、臣不自度量、歎其功名未垂、而志氣挫衄、覲望陛下、棄細餘大、所以冒死稱述。

と、彼は房瑄を救うたるが爲に、罪せられんとして、漸く罪を免れつゝも、其の謝狀に於て、尙ほ此の如く房瑄を辯護したりし也。彼や自信に於て、固に篤きものと謂ふ可き也。而して之が爲に、肅宗に疎せられたるも、亦た已むを得ざる也。

一〇五 杜甫と房瑄

彼は何故に此の如く、一の房瑄に拳々たりし乎。蓋し房瑄は、其の性の高簡、粗大なるに於て、彼と其の趣を同うせり。但だ瑄は宰相の子にして、彼は縣令の子たりしが爲めに、其の出身に於て、自他の相違ありしのみ。玄宗の蜀に幸するや、高力士に謂て曰く、朝臣誰か來り、誰か來らざる可き。對て曰く、張均、張垠、其の父張說以來、陛下の恩を受くる最も深し。且つ戚里に連る、是れ必ず先づ來らむ。時論皆な謂ふ、房瑄宜しく相たる可しと。而して陛下用ひず、又た祿山嘗て之を薦む、恐くは或は來らずと。玄宗曰く、事未だ知る可らざる也と。瑄至るに及び、上均が兄弟を問ふ、對て曰く、臣帥るて與に偕に來る、逕遑進まざ、其の意を観るに、蓄ふる所あるに似て、而して言ふ能はざる也と。玄宗力士を顧みて曰く、朕固より之を知ると、此の如く房瑄は、氣節の士たりし也。瑄や少にして學を好み、風度沈整、玄宗に従て成都に至り、更らに其命を奉じて、

房瑄と陳陶の敗

杜甫と彌耳敦

四六四

肅宗に靈武に見え、忽ち肅宗の心を得、機務一に彼と參決し、諸將相敢て比するなきに至れり。然も彼性疎濶にして、大言を好み、實用の才を有せず。至徳元載十月、自から請うて賊を討ち、大いに陳陶斜に敗績したり。蓋し彼は、春秋時代の戦法たる車戦を用ひ、牛車二千乗を連ね、却て賊の爲めに火攻せらる。『人畜焚燒、殺卒四萬、血丹野。』とは、史家の記する所。杜甫が『孟冬十月良家子、血作陳陶澤中水、野曠天清無戰聲、四萬義軍同日死。』と詠じたるもの是れ也。

房瑄の罷官と杜甫の諫疏

此の如く瑄は師を喪ふも、肅宗の眷任は、未だ全く衰へざりし也。然も彼の門客董蘭庭は、彼の勢を藉りて、數々賄賂を貪り、遂に有司の効治する所となり、此に於て彼は罷められて、太子少師となり、肅宗に従て都に還れり。杜甫の諫疏は、此際に上りしもの也。而して杜甫も亦た、罪を免かれて、八月鄜州に還り、其家を省み。十月肅宗の長安に還るや、彼亦た其後を追て此に至れり。彼が詠懐五百字に越えたる長篇にして、且つ彼の集中第一の傑作たる『北征』は、實に此の歸省の際に成れり。而して彼は翌乾元元年、再び左拾遺に任せられ、六月出て華州の司

生涯中の幸福なる生活

功に遷れり。

彼は此の半歳に満たざる間に於て、王維、賈至、岑參諸人と唱和し、或は曲江に酣飲し、數奇なる彼の生涯中に於て、最も幸福なる生活を倣せり。賈至が『早朝大明宮呈兩省僚友』の作あるや、彼等皆な之に和せり。當時朝廷は、纔に長安を賊手より恢復し、天下甲兵未だ戢まらざりしも、彼等の詞句には、自から昇平、吉祥の文字、鑿々たらざらばならず。賈至は曰く、『千條弱柳垂青瑣、百囀流鶯繞建章。』と。王維は曰く、『九天闔闔開宮殿、萬國衣冠拜冕旒。』と。岑參は曰く、『花迎劍佩星初落、柳拂旌旗露未乾。』と。杜甫は曰く、『旌旗日暖龍蛇動、宮殿風微燕雀高。』と。而して彼が諫官としての作、及び其の同僚岑參と相唱和したる作、皆な傳ふ可きものある也。

宮殿風微燕雀高

明朝有封事、數問夜如何

岑參は曰く、『白髮悲花落、青雲羨鳥飛。聖朝無闕事、自覺諫書稀。』と。然も熱腸なる杜甫は、此の如く吞氣なる能はざる也。曰く、『不寢聽金鑰、因風想玉珂。明朝有封事、數問夜如何。』と。是れ彼が宿直の詩也。又た曰く、『退朝花底散、歸院柳邊迷。』

第九章 一〇五 杜甫と房瑄

四六五

餘りに忠實

華州司功に出ざる

避人焚諫草。騎馬欲雞棲。」と是れ彼が左掖晚出の詩也。又た曰く、「腐儒衰晚譴。通藉退食遲。廻違寸志。衰職會無一字補。許身愧比双南金。」と。彼は達官となるには、餘りに其の職務に忠實なりしが如し。而して其の曲江對酒の作に曰く、「縱飲久判人共棄。懶朝眞與世相違。吏情更覺滄洲遠。老大悲傷未拂衣。」と。彼は恐らくは、其の薄官に久く甘ずる能はざりしならむ。

然も其の京を出て、地方に赴くは、復た彼の志にあらざりし也。「近侍歸京邑。移官豈至尊。無才日衰老。駐馬望千門。」と。蓋し乾元元年六月、房琯邠州の刺史に貶せられ、彼も亦た其の黨として、華州司功に出されたる也。而して彼は此れより身を終る迄、再び長安に至らざりし也。

一〇六 漂泊的生活

地方官と快して不愉快な生活

彼は諫官より、京畿の地方内務部長に貶斥せられたり、是れ實に彼が四十七歳の時也。彼は乾元元年六月、任に華州に赴き、晚冬洛陽に至れり。彼は地方官として、極めて不愉快なる生活に入りしが如し。

七月六日苦炎蒸。對食暫餐還不能。每愁夜中自足蠹。况乃秋後轉多蠅。束帶發狂欲大呼。簿書何急來相仍。南望青松架短檠。安得赤脚踏層冰。

吾人は此詩を以て、何等の妙味ありと信せず。但だ彼が地方官吏生活の、劈頭の記録として、頗る其の寫實的なるを認めんと欲するのみ。若夫れ彼が同年の重陽の作、「九日藍田崔氏莊」の七律に至りては、彼が律詩中、格調を以て論ずれば、其の白眉と稱するも、過甚ならず。

老去悲秋強自寬。興來今日盡君歡。羞將短髮還吹帽。笑倩旁人爲正冠。藍水遠從千澗落。玉山高並兩峰寒。明年此會知誰健。醉把茱萸仔細看。

九日藍田崔氏莊の七律

詩律の森
嚴と氣魄
の雄大

彼の塞官

秦州雜詩
二十首

彼の殘生
と漂泊

杜市と彌耳敦

四六八

楊誠齋が之を評して、『此詩句々字々皆奇、唐律如此者絕少。』と云ひしは、吾人も裏書するに遲疑せざる所也。彼が詩律の森嚴、精細にして、之を運用する氣魄の雄大、自在なる、殆ど人をして驚嘆せしむるものなからず。然も此詩によりても、彼が此地に安著せざりし狀を見る可し。

彼は何の爲めに洛陽に赴きたる乎。彼は唯だ冬末事を以て、東都に之くと云へるのみ。而して彼は乾元二年春、重ねて華州に回れり。然も關輔饑饉、人皆な生を聊んせず。彼は其の七月に、官を棄て、西に去り、隴を度りて、秦州に客たり。有名なる秦州雜詩二十首は、此間に出で來れり。

滿目悲生事、因人作遠遊。遲迴度隴怯、浩蕩及關愁。水落魚龍夜、山空鳥鼠秋。西征問烽火、心折此淹留。

是れ二十首の第一首也。彼は爾來全く、人に因りて遠遊を作せり。『曠藥能無婦、應門亦有兒。』とは、秦州雜詩中の一節也。乃ち彼は妻兒をも携へたりし也。

彼の殘生は、宛も繫がざるの舟に似たり。彼は漂泊子として、其晩節を過せり。彼

我生苦漂
蕩何時有
終極

生活の窮
迫

は東柯谷に居らんと企てたり。曰く、『對門藤蓋瓦、映竹水穿沙。瘦地翻宜粟、陽坡可種瓜。』と。然も更らに西枝村に草堂を置かんとせり。『近聞西枝西、有谷杉柰稠。亭午頗和暖、石田又足收。』と。彼は此地に於て、其の友人薛據、畢曜が官を遷され、榮進したるを聞き、詩を作りて其の懷抱を述べ、又た友人高適、岑參、賈至、嚴武、李白等に詩を寄せたり。而して彼は又た秦州を去りて、同谷縣に赴かんと欲し、贊上人に別れて曰く、『百川日東流、客去亦不息。我生苦漂蕩、何時有終極。』と。其の秦州を發するや曰く、『我衰更懶拙、生事不自謀。無食問樂土、無衣思南州。』と。彼は水草を趁ふ牧者の如く、同谷縣を指して行けり。『栗亭名更嘉、下有良田疇。充腸多薯蕷、崖蜜亦易求。』と。然も是れ空想のみ。彼は十月同谷縣に赴き、此に寓する月に盈たずして、十二月蜀に入り、成都に至れり。蓋し同谷縣も、彼に於ては、恐らくは聞いて極樂、見て地獄たりしが爲めならずばあらず。

吾人は彼が『乾元中寓居同谷縣作歌七首』を讀んで、十二分の割引を爲すも、尙ほ當時に於ける彼が生活の、甚だ窘迫なりしを知る也。

有客有客字子美。白頭亂髮垂過耳。歲拾橡栗隨祖公。天寒日暮山谷裏。中原無書歸不得。手脚凍皸皮肉死。嗚呼一歌兮歌已哀。悲風爲我從天來。

又た曰く、

長鏡長鏡白木柄。我生託子以爲命。黃獨無苗山雪盛。短衣數挽不掩脛。此時與子空歸來。男呻女吟四壁靜。嗚呼二歌兮歌始放。閭里爲我色惆悵。

自ら勞働
すして糊口

彼は人に因りて遠遊を作しつゝ、今や自から勞働して、糊口せねばならぬ窮境に陥りし也。蓋し聞く、黃獨とは狀芋子の如く、肉白く、皮黄なり、巴漢の人、蒸して之を食ふと、所謂る現時の馬鈴薯の類歟。乃ち杜甫は、自ら山に入りて、橡栗の實を拾ひ、野に於て黃獨の苗を植ゑ、以て其の饑寒を凌がんとしたる也。

乾元二年
役と彼の行

されど彼は、『賢有不黔突。聖有不煖席。况我饑愚人。焉能尙安宅。始來茲山中。休駕喜地僻。奈何迫物累。一歲四行役。』と歌ひ、遂に成都に向へり。蓋し此の乾元二年は、彼に取りて最も行役多き歲たりし也。春期洛陽より華州に回り、秋期華州より秦州に客たり、冬期秦州より同谷縣に赴き、更らに其の十二月を以て、同谷縣

より成都に入りたれば也。彼は實に自から知れる如く、處世の術に於て、最も拙劣たりし也。

一〇七 浣花草堂

浣花溪寺に寓す

『翳翳桑榆日。照我征衣裳。我行山川異。忽在天一方。』是れ彼が成都に入りたる第一の印象也。彼は先づ浣花溪寺に寓したり。『古寺僧牢落。空房客寓居。故人分祿米。鄰舍與園蔬。』と是れ彼が客寓の實況也。故人とは、彭州刺史高適の徒ならむ。彼は遂に成都の西なる浣花溪に卜居して、姑らく茲に其の行李を安頓するを得たり。

須向山陰上小舟

浣花溪水西頭。主人爲卜林塘幽。已知出郭少塵事。更有澄江銷客愁。無數蜻蛉齊上下。一双鸕鷀對浮沈。東行萬里堪乘興。須向山陰上小舟。

彼は此の如く卜居しつゝも、其の漂泊的根性は、尙ほ止まず。東行萬里の念を抛つ能はざりし也。

處々に無心と難題

彼は王十五司馬弟に向て、草堂造營の資を要求し。蕭八明府に桃を覓め、韋二明府に綿竹を覓め、何邑に楹木を覓め、韋班に松樹子を覓め、徐卿に果子を覓め、又

草堂成る

た韋班に瓷盃を覓め、處々に無心、難題を持ち掛けつゝ、遂に上元元年三月に至りて、草堂を成せり。

背郭堂成蔭白茅。綠江路熟俯青郊。楹林礙日吟風葉。籠竹和烟滴露梢。暫止飛鳥將數子。頻來語燕定新巢。旁人錯比揚雄宅。懶惰無心作解嘲。

正に是れ詩人の、理想的住居に庶幾し。若夫れ彼が七律中、慷慨淋漓、史筆の最も超卓したる蜀相の作も、蓋し此際に出來したるならむ。

古今蜀相七律

丞相祠堂何處尋。錦官城外柏森森。映階碧草自春色。隔葉黃鸝空好音。三顧頻繁天下計。兩朝開濟老臣心。出師未捷身先死。長使英雄淚滿襟。

蓋し天下諸葛孔明を詠じたるもの、少しとせず。然も李義山の籌筆驛の七律、纔かに其の武を接するの他は、此の一首を以て、古今東西に獨絶するものと云ふも可也。

然も貧乏神は、恒に彼を追跡せり。彼は曰く、『厚祿故人書斷絶。恒饑童子色淒涼。欲填溝壑惟疎放。自笑狂夫老更狂。』と而して彼の家庭的な生活は、『老妻畫紙爲

貧乏神の家庭に於ける杜甫

某局稚子敲針作釣鉤。多病所須惟藥物。微軀此外更何求。』の句にて、想像するを得る也。彼の妻は、彌耳敦の妻に比すれば、寧ろ家庭的幸福の要素たりしに似たり。彼の兒子も亦た、彌耳敦の兒女に比して、親子相得たりしが如し。蓋し家庭の主人としての彼は、其の生計の孟浪、杜撰の爲めに、家庭を困迫せしめたるに拘らず、彼は寧ろ家族に取りては、好家長たりしに似たり。

聞收芋栗未全貧

錦里先生烏角巾。園收芋栗未全貧。慣看賓客兒童好。得食階除烏雀馴。秋水纒深四五尺。野航恰受兩三人。白沙翠竹江村暮。相送柴門月色新。

今夫れ兒童は客の到るを悦び、烏雀は食を得て馴る。彼の生活や、未だ必ずしも愉快ならずと云ふ可らず。されど彼が友人、高適に寄するの五絶に曰く、

爲問彭州牧何時救急難

百年已過半。秋至轉饑寒。爲問彭州牧。何時救急難。と蓋し高適は、既に彭州の刺史として、達官たりし也。

當代論才子。如公復幾人。驛驢開道路。鷹隼出風塵。行色秋將晚。交情老更親。天涯喜相見。披豁道吾真。

詩朋裴迪

と、是れ彼が重ねて高適に簡したる也。惟ふに高適、彼が爲めに、其の急難を救ひたる爲めならむ歟。上元二年、彼は此の如くして其の五十歳を、成都の浣花草堂に迎へたり。彼は當時に於て、其の詩朋裴迪を得たり。裴迪は王維の親友にして、輞川別業に於て、維と相唱和したる詩人也。裴迪は蜀州にあり、成都を去る支那里程百里に過ぎず。其の詩筒の往來、亦た容易たりし也。而して成都の春は、彼に於て一段の幽賞に値ひしたるが如し。

好雨知時節。當春乃發生。隨風潛入夜。潤物細無聲。野徑雲俱黑。江船火獨明。曉看紅濕處。花重錦官城。

是れ仲春の光景也。又た曰く、花飛有底急。老去願春遲。可惜歡娛地。都非少壯時。寬心應是酒。遣興莫過詩。此意陶潛解。吾生後汝期。

と。又た曰く、

寬心應是酒遣興莫過詩



成都城外杜公祠園北海

社市と彌耳教

黄四娘家花滿蹊。千朵萬朵壓枝低。留連戲蝶時時舞。自在嬌鶯恰恰啼。
嗚呼彼も亦た、成都の花に惱殺せられんとしつゝありし也。

四七六

比較的
安
慰の
成都
生活

貧と老と
交々相迫
る

幾多の交
游

一〇八 成都の生活

彼が成都に於ける、肅宗の上元元年より、代宗の寶應元年七月に至る、約二年半は、彼に取りて、比較的安慰の生活たりしに似たり。上元二年には、彼は浣花草堂に在りて、成都の春を賞し、更らに青城縣に遊べり。『老被樊籠役、貧嗟出入勞。客情投異縣、詩態憶吾曹。』と、其の八月には、『茅屋爲秋風所破歌』の長歌を作りて、其の自個の貧苦より類推して、天下の寒士に對する、滿腔の同情を漏らせり。而して彼は貧と老と、交々相迫るに對して、實に百憂の集まるを、禁ずる能はざりし也。

憶年十五心尙孩。健如黃犢走復來。庭前八月梨棗熟。一日上樹能千迴。即今倏忽已五十。坐臥只多少。行立強將笑語供。主人悲見生涯百憂集。入門依舊四壁空。老妻觀我顏色同。癡兒不知父子禮。叫怒索飯啼門東。

然も彼には幾多の交游ありし也。『交新徒有喜。禮厚慚無才。』とは、徐九少尹の

嚴武

過ぎるを悦ぶ也。『幽棲誠簡略衰白已光輝』とは、范二員外、吳十侍御の枉駕に答ふる也。『故人能領略携酒重相看』は、王侍御が酒を携へて、高適と同じく過ぎるを謝する也。然も彼の友人として、此際特筆す可きは嚴武也。

嚴武は嚴挺之の子也。挺之は、開元の名相姚崇の門下生たり。天寶の初、玄宗大いに彼を用ひんと欲し、李林甫の沮止する所となり、鬱々疾を成して逝く。挺之、交遊を重んじ、生死を與にするを許して易らず。故人の孤女を嫁する數十人、時論之を重しとす。武幼にして豪爽、其母父の愛する所とならず、獨り其妾英を厚す。武始めて八歳、怪んで母に問ふ、母答ふるに、其の實を以てす。武奮然鐵槌を以て、英が寢に就き、其の首を碎く。左右驚き、挺之に白して曰く、郎戲れて英を殺すと。武曰く、安んぞ大臣妾に厚くして、妻に薄うする者あらむ。兒故らに之を殺す、戲に非ざる也。父之を奇として曰く、眞に嚴挺之の子也。彼は玄宗に従うて蜀に赴き、至徳の初、肅宗の行在に抵る。房琯、其の名臣の子なるを以て、薦めて給事中と爲し、已に長安を收めて、京兆少尹たり。房琯の事に坐して、巴州刺史に貶

八歳父の妾を殺す

杜甫と嚴武に貶せらる

杜甫と嚴武

大官枉駕の面目

せられ、之を久うして、東川節度使に遷り、劍南を合して一道と爲すに及んで、成都尹、劍南節度使に擢でらる。而して杜甫が京官を去りて、華州の司功に貶せられたるは、武が巴州に貶せられたると同時、且つ同一の理由にして、甫が成都に在るの際は、宛も武が節を持して、此に鎮たるの日たり。

甫は、武の父挺之の故人にして、武とは與に、房琯の黨類と認められ、其の運命を同うしたる者也。武寄題して曰く、『興發會能騎駿馬終須直到使君灘』と。甫答へて曰く、『何日旌麾出城府草茅無徑欲教鋤』と。而して武や、遂に浣花草堂を過訪せり。

元戎小隊出郊坰問柳尋花到野亭川合東西瞻使節地分南北任流萍扁舟不獨如張翰。皂帽應兼似管寧。寂寞江天雲霧裏何人道有少微星。

流寓、漂泊の一寒詩人も、東川、西川、兩節度使を一身に兼帶したる、大官の枉駕には、周邊の手前、定めて面目を施したるなる可し。其の武が西城晚眺に和するの句に曰く、『汲黯匡君切廉頗出將頻直詞才不出雄略動如神政簡移風速詩清

只須伐竹
開荒徑

立意新』と。而して其の武が雨中見憶の作に、和するや曰く、

何日雨晴雲出溪。白沙青石洗無泥。只須伐竹開荒徑。倚杖穿花聽馬嘶。

と。而して其の武が、青城山道士の乳酒一瓶を送るを、謝するや曰く、

山瓶乳酒下青雲。氣味濃厚幸見分。鳴鞭走送憐漁父。洗盞開嘗對馬軍。

と。彼は嚴武が爲めには、竹徑を拓く可く言明したれども、其の詩人的意況は、寧ろ左の如かりし也。

客至從嘖
不出迎

無數春筍滿林生。柴門密掩斷人行。會須上番看成竹。客至從嘖不出迎。

と。然も武は其の仲夏に、酒僮を携へて草堂に到れり。彼の悦や知る可き也。

竹裏行厨洗玉盤。花邊立馬簇金鞍。非關使者徵求急。自識將軍禮數寬。百年地僻柴門迥。五月江深艸開寒。看弄漁舟移白日。老農何有罄交歡。

と。當時武、彼を援いて、其の幕に入れんとす。而して彼未だ之を許さざる也。彼の志や、故人として相待つにありて、上官下僚として相接するを、樂まざりし也。

個人とし
て相待つ
を望む

一〇九 浪遊 一二年

嚴武長安
に還る

然も彼が最も頼みとしたる嚴武は、寶應元年七月、長安に還れり。彼の送詩に曰く、『四海猶多難。中原憶舊臣。』と。又た曰く、『此身那老蜀。不死會歸秦。公若登臺輔。臨危莫愛身。』と。彼は武に向て切々、懇々の忠告を與へ、併せて其身も亦た武の推薦によりて、長安に復歸せんと期したりし也。而して彼は武を送りて、綿州に到れり。武の甫に別るゝ句に曰く、『試回滄海棹。莫妬敬亭詩。祇是書應寄。無忘酒共持。但令心事在。未肯鬢毛衰。最恨巴山裏。清猿惱夢思。』と。而して甫や送りて、綿州を去る三十里、奉濟驛に到れり。

遠送從此別。青山空復情。幾時杯重把。昨夜月同行。列郡謳歌惜。三朝出入榮。江村獨歸處。寂寞養殘生。

とは、是れ彼が重ねて送別の詞也。彼は此れより綿州に當分滞在したるが如し。而して未だ幾ならず、西川兵馬使徐知道の亂あり。此に於て彼は梓州に入り、家

甫暫らく
綿州に在
り後梓
州に入る

須臾も家
族を忘れ
ず

依然放浪
生活の持
續

浣花草堂
に眷戀

累を成都より迎へ、梓州に至らしむ。其の光祿坂行の作に曰く、

山行落日下絕壁。南望千山萬山赤。樹枝有鳥亂鳴時。曠色無人獨歸客。馬驚不憂
深谷墜。草動只怕長弓射。安得更似開元中。道路即今多擁隔。

是れ彼が梓州に入るの情況也。彼は梓州にありて、遂に其子宗武の生日に遭ひ、
歌うて曰く、「小子何時見。高秋此日生。」と。彼は須臾も其の家族を忘るゝ能は
ざりし也。而して彼は重陽に、嚴武に寄せて曰く、「不眠持漢節。何路出巴山。」と。
蓋し武は兵亂に沮てられて、未だ巴州を出でざりし也。嚴の答句に曰く、「跋馬
望君非一度。冷猿秋雁不勝悲。」と。而して其の十二月には、梓州の屬邑、射洪に往
き、又た通泉に遊べり。廣徳元年より、廣徳二年、嚴武の再び蜀を鎮するに至る間、
彼は依然放浪生活を持続せり。廣徳元年の春は、梓州より漢州に赴き、秋は閬州
に往き、冬晩復た梓州に回れり。彼は此の如く客遊したるも、尙ほ成都の浣花草
堂には、頗る眷戀禁ずる能はざるものありしに似たり。

我生性放誕。雅欲逃自然。嗜酒愛風竹。卜居必林泉。遭亂到蜀江。臥病遣所便。誅茅

舍弟に草
堂を視せ
しむ

吐蕃入寇
代宗遷幸
平

初一畝廣。地方連延。經營上元。初斷手。寶應年。敢謀土木。麗自覺。面勢堅。臺亭隨高
下。敞豁當清川。惟有會心侶。數能同釣船。干戈未偃息。安得酣歌眠。蛟龍無定窟。黃
鶴摩蒼天。古來賢達士。寧受外物牽。願惟魯鈍姿。豈識悔吝先。偶携老妻去。慘澹凌
風烟。事跡無固必。幽貞慚双全。尙念四小松。蔓艸易拘纏。霜骨不堪長。永爲鄰里憐。
彼は亂離の際、尙ほ手栽の四小松が、蔓艸に拘纏せらるゝを掛念したりし也。而
して其の舍弟をして、草堂を檢校せしむるや、曰く、
久客應吾道。相隨獨爾來。熟知江路近。頻爲草堂廻。鵝鴨宜長數。柴荆莫浪開。東林
竹影薄。臘月更須栽。

彼は尙ほ其の舍弟に囑して、其の竹林の栽培を倣さしめたり。
彼は廣徳元年十月、吐蕃入寇して、長安を陥れ、代宗の陝州に幸するを聞き、憤慨
に禁へずして曰く、「西京疲百戰。北關任群兇。關塞三千里。烟花一萬重。」と。彼は
嚴武の後には、最も梓州刺史章彝に頼れり。而して彝も亦た方さに、京官に補せ
られんとする也。其の「奉寄章十侍御」の詩に曰く、

勿云江漢
有垂綸

杜市と綱年致

四八四

淮海維揚一俊人。金章紫綬照青春。指揮能事廻天地。訓練強兵動鬼神。湘西不得歸關羽。河內猶宜借寇恂。朝覲從容問幽仄。勿云江漢有垂綸。惟ふに彼は亦た章の推薦を待ちつゝありしならむ。其の結句は、蓋し反語を以て、其意を寓したる也。然も彼は最早此地に留まるべくもあらず。故に江を下りて、荆南に赴かんとしたり。其の「將赴荆南寄別李劍州」の七律に曰く、

春風回首
仲宣樓

使君高義驅古今。寥落三年坐劍州。但見文翁能化俗。焉知李廣未封侯。路經滄瀨頭。双蓬鬢。天入滄浪一釣舟。戎馬相逢更何日。春風回首仲宣樓。と。然も偶然の事情は、再び彼を成都に引き廻さしむることゝはなりぬ。

一一〇 再び成都に入る

荆南に赴
てかんとし
中止す

廣徳元年、彼が梓州に放浪するの際、如何なる所縁にや、京兆功曹に召し補せられたり。されど彼は此に赴かざりしのみならず、却て江を下りて、荆南に赴かんとせり。當時彼が馬巴州に寄別するの詩に曰く、

勳業終歸馬伏波。功曹非復漢蕭何。扁舟繫纜沙邊久。南國浮雲水上多。獨把漁竿終遠去。難隨鳥翼一相過。知君未愛春湖色。與在驢駒白玉珂。

是れ馬巴州が長安に赴くに際して、自から之に伴ふ能はず、却て湖南に向はんとするを、諷示したる也。然るに彼は意外にも、嚴武が再び節を持って、蜀に来るを聴き、暫らく此事を思ひ止まりたるは、『奉待嚴大夫』の詩にて分明也。

殊方又喜
故人來

殊方又喜故人來。重鎮還須濟世才。常怪偏裨終日待。不知旌節隔年回。欲辭巴徼啼鶯合。遠下荆門去鷓鴣。身老時危思會面。一生襟抱向誰開。

と。蓋し嚴武は、寶應元年秋入朝し、京兆尹を拜し、二聖山陵橋道使と爲り、鄭國公

嚴武蜀に
再來

杜甫も浣
花草堂に
復歸

鄰里喜我
歸沽酒携
胡蘆

に封せられ、黃門侍郎に遷り、元載と厚く相結び、宰相たらんことを求めて得ず、再び劍南の節度使として、赴任することとなりたる也。而して杜甫は、嚴武の入朝を綿州迄送りて、其儘此處に止まり、亂を避けて梓州に入り、此れより荆南に赴かんとするの際に、此報に接したる也。此の如くして、彼が後半の浣花草堂生活は、出で來れり。

楚に赴くべかりし彼は、妻子を携へて、再び成都に向へり。彼が其の途中に於て、先づ嚴武に寄する作中に、『五馬舊曾詣小徑、幾回書札待潛夫』の句あるを見れば、武が彼を招致したるが爲めならむ歟。斯くて彼は廣德二年の春、放浪二年弱の後、浣花草堂に復歸せり。

客裏有所適、歸來知路難。開門野鼠走、散帙壁魚乾。洗杓開新醞、低頭著小冠。馮驩給麴、巖細酌老江干。

若夫『舊犬喜我歸、低徊入衣裾。鄰里喜我歸、沽酒携胡蘆。大官喜我來、遣騎問所須。城郭喜我來、賓客隘村墟』の句を誦すれば、千載の下、尙ほ彼の歸來の光景を、髣髴

嚴武の幕
に入る

相變らず
貧乏

嚴武と杜
甫との關
係は故人

せしむるものある也。

彼は恐らくは不本意ながらも、其の六月を以て、嚴武の幕に入れり。即ち嚴武の推薦にて、節度參謀檢校工部員外郎と爲り、鯀魚袋を賜へり。凡そ唐の制度に於ては、官吏の服裝に三階級あり。最初階は青袍魚袋、次は緋袍魚袋、最上は金紫也。白樂天の所謂『金章照紫袍』もの是也。即ち杜甫も此に於て、漸く現時の所謂勅任官の端に列したる也。後人が杜工部と云ふは、此れが爲め也。

然も彼は相變らず、貧乏なりしが如し。其の『王錄事許脩草堂、貧不到、聊小詰』の絶句は曰く、

爲嘖主錄事、不寄紳堂費。昨屬愁春雨、能忘欲漏時。

と、彼は多くの所謂文士の例に外れず、無心、乞貸を以て、其の權利と心得たるものに似たり。

彼と嚴武との關係は、官長、屬僚にあらずして、舊に仍りて、故人的關係たりしが如し。然も長官としての嚴武は、寧ろ驕慢に失し、屬僚としての彼は、寧ろ假蹇に

過ぎたり。之が爲めに、復た以前の如き、圓滿なる詩酒友誼的關係たる能はざりしが如し。然も彼等兩人が、兎も角も其の始終を完くし得たるは、僥倖と云ふの外なし。惟ふに其の一は、彼等が詩に於て、互ひに契合點を見出したるが爲めにあらざるなき乎。

軍城早秋の唱和詩

吾人は嚴武が「軍城早秋」の詩たる、

昨夜秋風入、漢關朔雲邊。月滿西山、更催飛將追驕虜。莫遣沙場匹馬還。

を誦し、之を杜甫の和詩

秋風煽煽動高旌。玉帳分弓射虜營。已收滴博雲間戍。欲奪蓬婆雪外城。

と對照し、寧ろ原作の優ること一籌なるを、否定する能はず。此の如き詩人の主將が、御客分の一參謀を、除外例として容れ置きたるは、必ずしも全く理由なしと云ふ可らず。但だ杜甫の放恣、氣儘なる、他の屬僚の手前、嚴武が多少當惑したることは、勿論ならむのみ。

御客分

一一一 南下雲安に至る

東縛酬效
小忠

七個月の
在職

嚴武は豪
復漢

杜甫の入幕は、實に其の樂しむ所にあらざりし也。されば彼は嚴武に向て、「東縛酬效、己蹉跎效、小忠」と云へり。惟ふに武の立場より云へば、唯だ故人なるが爲めに、強ひて彼を幕下に收用して、衣食の資を給したる迄にして、斯く杜甫より、恩被せがましき口上を聞くことは、寧ろ意外となしたるならむ。

兎も角も杜甫は、廣德二年六月より、嚴武の幕に入り、翌年即ち永泰元年正月には、浣花草堂に還りたれば、其の期間は、僅かに七個月に過ぎず。彼等兩人が、互ひに此の關係にて相得ざること、以て知る可きのみ。本來嚴武は、一種の豪復漢也。新唐書本傳に云く、

武在蜀放肆、用度無藝、或一言之悅、賞至百萬。蜀雖號富饒、而峻指亟斂、閭里爲空。然虜亦不敢近境。梓州刺史章彝始爲武判官、因小忿殺之。房瑄以故宰相、爲巡內刺史、武慢倨、不爲禮。最厚杜甫、然欲殺甫數矣。李白作蜀道難者、乃爲房與杜危之。

傍若無人
漢の鉢合

杜甫と彌耳敦

四九〇

也、永泰初卒、母哭且曰、而今而後、吾知免爲官婢矣、年四十、其の母さへも武が驕傲、放恣の爲めに罪を得、自から没入せられて、官婢たるの掛念ありしを見れば、彼が傍若無人の程度も、思ひやらるゝ也、而して杜甫も亦た、一種の傍若無人漢也、是れ恰も其の鉢合せと云ふ可き也、新唐書の杜甫本傳に云く、

武以世舊待甫甚善、親至其家、甫見之、或時不巾、而性褊躁傲誕、嘗醉登武牀、瞪視曰、嚴挺之乃有此兒、武亦暴猛、外若不爲忤、中銜之、一日欲殺甫、及梓州刺史章彝、集吏於門、武將出冠鉤于簾三、左右白其母、奔救得止、獨殺彝、
と、舊唐書に曰く、

甫の傲誕

武與甫世舊、待遇甚隆、甫性褊躁、無器度、恃恩放恣、嘗馮醉登武之牀、瞪眦武曰、嚴挺之乃有此兒、武雖急暴、不以爲忤、甫於成都浣花里、種竹植樹、結廬枕江、縱酒嘯詠、與田夫野老相狎蕩、無拘檢、嚴武過之、有時不冠、其傲誕如此、
と、吾人は寧ろ舊唐書に與みせんと欲する也、如何に武が急暴なればとて、まさ

被酒狂言
は上戸の
本性

幕府を
浣花
溪上へ

嚴武の死

か甫を殺さんと迄はせざりしならむ、されど眇乎たる漂泊の一老詩人が、堂々たる節度使を、小兒扱ひにしたることは、武に取りても、聊か不快の感なきにあらずらざりしならむ、況や甫のみ特別待遇を、獨占したるに於てをや、其の同僚諸員の不平も、亦た想ふ可き也、
蓋し甫は、嚴挺之の友人にして、武と年齢の差約十四五歳、彼が酒を被りて、狂言を發したるも、所謂る上戸本性の喩に漏れず、其の平生強ひて鬱塞せしめたる、不平の氣を吐き出したるに、他ならざる可し、

彼は永泰元年正月三日を以て、幕府を辭し、浣花溪上に還れり、而して院内諸公に簡して曰く、「白頭趨幕府、深覺負平生。」と、暢氣なる彼も、同僚には多少の氣兼ありしや知る可し、而して更らに「敵廬遺興奉寄嚴公」の句に曰く、「把酒宜深酌、題詩好細論。」と、又た曰く、「還思長者轍、恐避席爲門。」と、彼は嚴武の舊好を捨てずして、浣花草堂に來遊せんことを求めたる也、

然も嚴武は、其の四月を以て逝けり、是れ彼に取りては、非常なる打撃たりし也、

公來雪山
重公去雪
山輕

蜀を離れ
て雲安に
入る

彼は始終人に依りて生事を營めり、然も今は其の主人を失ひし也。彼の失望や知る可き也。彼が他日八哀の詩を作り、其中に武を加へたるは、固より當然にして、然も其の詩は聊か華詞多きも、『公來雪山重。公去雪山輕』の二句は、斷乎として動かす可らざる定論なり。蓋し武は如何なる失政あるも、之を内にしては、巴蜀の治安を保ち、之を外にしては、吐蕃の衆七萬を當狗城に破り、遂に鹽川を收め、爾來敵をして、境外に近づかしめざりし也。

されば彼は、嚴武の逝きし翌月、即ち永泰元年五月、遂に蜀を離れて南下せり。

五載客蜀郡。一年居梓州。如何關塞阻。轉作瀟湘遊。世事已黃髮。殘生隨白鷗。安危大臣在。何必淚長流。

と、彼は今や五十四歳の中老年也。然も其の貧苦は、彼をして年齢以上の老人たらしめたるならむ。知らず彼は何を前途として、瀟湘の遊を作さんとする乎。彼は戎州より渝州に至り、六月忠州に抵り、此處にて友人高適が、此年正月に死亡したるの報に接し、此處にて嚴武の歸櫬を哭し、其の秋雲安に入り、姑らく其の脚

を留めたり。

一一二 詩作豊富の期

彼は雲安にありて、房琯の靈櫬が閬州より殯を啓らき、東都に歸葬するを聞き、『盡哀知有處、爲客恐長休。』と歌へり。是れ房琯の爲めに悲しむのみならず、併せて自からの爲めに悲しむ也。而して彼の心は、半は長安にあり、半は成都にありし也。

萬里橋西宅、百花潭北莊、層軒皆面水、老樹飽經霜、雪嶺界天白、錦城曠日黃、惜哉形勝地、回首一茫茫。

是れ彼が浣花草堂を憶ふの作也。然も嚴武死後の蜀は、再び争亂の衝となれり。前年渝州殺刺史、今年開州殺刺史、群盜相隨劇虎狼、食人更肯留妻子。とは、其の實況たりし也。然も亦た雲安は彼に取りて、久住の地にあらざりし也。『兩邊山木合、終日子規啼。』彼は歸らんとするも、焉くに歸る可き。彼は、大暦元年の春、遂に雲安より夔州に移れり。

盡哀知有處、
爲客恐長休。

嚴武死後
の蜀

夔州に移

示獠奴阿
段

夔州白帝
城に上る

伏枕雲安縣、遷居白帝城、春知催柳別、江與放船清、農事聞人說、山光見鳥情、禹功饒斷石、且就土微平。

彼は夔州に小住せり。其の獠奴阿段に示す詩に曰く、

山木蒼蒼落日曛、竹竿袅袅細泉分、郡人入夜爭餘瀝、豎子尋源獨不聞、病渴三更廻白首、傳聲一注濕青雲、曾驚陶侃胡奴異、怪爾常穿虎豹群。

獠奴とは、南蠻種屬の奴也。惟ふに彼は、蜀より此奴を携へ來りしならむ。而して夔地井なく、何れも笕を以て、山泉を引きつゝあるが爲めに、旅鳥の彼は當惑したりしならむ。然も阿段が虎豹の群を穿ち、山奥に分け入り、泉源を見出したるを賞して、此詩を作りしものと思はるゝ也。

彼は此地に於て、屢々白帝城に上れり。『江城含變態、一上一回新。』とは、彼の觸目の感懷也。

城尖徑仄旌旆愁、獨立縹緲之飛樓、峽坼雲羆龍虎睡、江清日抱鼉鼉遊、扶桑西枝對斷石、弱水東影隨長流、杖藜歎世者、誰子泣血迸空回白頭。

是れ彼が白帝城の最高樓に上りし即興也。彼は諸葛孔明の廟に遊び、八陣圖を視、又た昭烈皇帝廟に謁せり。彼は大歴元年の秋は、夔州の西閣に寓し、二年の春は赤甲に遷居し、三月は瀘西に遷り、秋は東屯に遷り、未だ幾ならずして、復た東屯より瀘西に歸れり。而して此間に於て、彼は遠く水筒を修めしめ、或は雞欄を樹てしめ、或は蒼耳を摘ましめ、或は萑苳を種えしめ、其の他伐木、果園、稻畦等、貧家の小經濟として、相應の經營を費したり。而して此間に於て、彼の詩作は、最も豊富なりき。

その重なる作も

例せば「諸將五首」の如き、「秋興八首」の如き、「詠懷古跡五首」の如き、其の重なるもの也。世或は杜甫夔州以降の作を以て、東坡海外遷謫以後の作に比し、與に自然の化域に達したるものと稱す。されど是れ必ずしも通論にあらず。然も此の時期を以て、彼の衰憊期と做すに至りては、更らに謬見と云ふ可し。

黃山谷謂、少陵夔州以後詩、不煩繩削而自合、此蓋因集中有老去漸於詩律細一語、而妄以爲愈老愈工也。今觀夔州後詩、惟秋興八首、及詠懷古跡五首、細意熨貼、

意興衰頹の徴あるを認めず

一唱三嘆、意味悠長、其他則意興衰頹、筆亦枯率、無復舊時豪邁沈雄之概。是れ趙翼の説にして、畢竟曲れるを矯めて、直きに過ぎたる言のみ。假令他に一の見る可きなしとするも、前に挙げたる諸作の如き、殆んど百代に雄視するものあり。乃ち吾人は此の時期を以て、彼が作詩の最も豊富なる時期と稱するに於て、決して大なる異議なかる可きを、信せずんば、あらず。若夫れ彼が「八哀詩」の如きは、其の瑰辭麗句はあり。されど聊か詞の爲めに意を累はしたる嫌なしとせず。されど吾人は未だ之れが爲めに、彼が所謂る意興衰頹の徴あるを認めざる也。否却て其の詩腸の生氣横溢するの證たるを覺ゆる也。

意興酣暢老熟

若夫れ「夜」返照「吹笛」等の諸作を見よ。吾人は彼が詩思の愈々酣暢に、老熟しつゝあるを見る。乃ち「閣夜」の「五更鼓角聲悲壯、三峽星河影動搖」の如き、若くは「登高」の「無邊落木蕭蕭下、不盡長江滾滾來」の如く、是れ果して衰頹と云ふ可き乎。是れ果して枯率と云ふ可き乎。吾人は斷じて、其の然らざるを見る也。

一一三 夔州より湖南

夔州の萍
遊的生活

吾人は漸く杜市の生涯の終局に近けり。彼の夔州にありて、萍遊的生活を做すや、尙ほ幾多の經營を費せり。大歴二年西閣より赤甲に遷るや、曰く、「客居愧遷次。春色漸多添。」と。又た曰く、「只應與兒子。飄轉任浮生。」と。其の三月瀘西に於て、新たに艸居を賃するや、曰く、「養拙干戈際。全生麋鹿群。」と。而して其の酔うて馬より墜ち、諸人酒を携へて相看るや、曰く、「不虞一蹶終損傷。人生快意多所辱。」と。然も彼は河北諸道節度使等の入朝を聞き、歡喜に禁へず、十二首を口號せり。彼の心の帝家に眷々たる、以て知る可き也。彼は此の客居に際して、尙ほ田園生活の、樂事なきにあらざりしが如し。

田園生活
の樂事

仲夏流多水清晨向小園。碧溪搖艇澗。朱果爛枝繁。始爲江山靜。終防市井喧。畦蔬繞茅屋。自足媚盤餐。

尙此土に
安著せず

是れ彼は別に果園を購うて、其の偃息に資したる也。或は園官の菜を送るあり、

今我不樂
思岳陽

或は園人の瓜を送るあり。彼の厨下も、聊か寒酸を免かれたり。而して其の伐木を課するや、曰く、「長夏無所爲。客居課奴僕。清晨飯其腹。持斧入白谷。」と。然も彼は遂に此土に安著せざりし也。

其の韓諫議注に寄するの句に曰く、「今我不樂思岳陽。身欲奮飛病在牀。」と。知らず彼は何故に夔州を樂まざりし乎。蓋し特別の理由にあらず、所謂の詩人的漂泊性の然らしむる所ならむ。彼は乾元元年六月、長安を出で、以來、僅かに成都の浣花草堂に、安住せし時期を除けば、未だ曾て一日も寧居せざりし也。

商胡離別下揚州。憶上西陵故驛樓。爲問淮南米貴賤。老夫乘興欲東遊。

此の如く、彼の身は夔州にありて、心は既に遠く長江の下流に向ひし也。然も彼は「東屯復瀘西。一種住清溪。來往兼茅屋。淹留爲稻畦。」と歌ひ、其の收稻を檢校するや、曰く、「香稻三秋末。平疇百頃間。」又た曰く、「稻米炊能白。秋葵煮復新。」と。彼は此地に於て、若干の收穫を做したる也。然も彼は頻りに峽を出でんと欲するの情、已む能はざりし也。

心は遠く
長江の下
流に向ふ

聞説江陵府。雲沙靜渺然。白魚如切玉。朱橘不論錢。水有遶湖樹。人今何處船。青山各在眼。却望峽中天。

遂に夔州
江陵に去りて

彼は遂に大歴三年の正月を以て、夔州を去れり。而して其の去るに臨み、渡西果園四十畝を人に贈りて曰く、「託贈卿家有。因歌野興疎」と。而して三月江陵に至るや、未だ知らず、彼の理想通りの樂地たりしや、否や。果然彼は遂に其の満足を得ざりし也。「自古江湖客。冥心若死灰」と。又た曰く、

霜黃碧梧白鶴樓。城上擊柝復烏啼。客子入門月皎皎。誰家搗練風淒淒。南渡桂水關舟楫。北歸秦川多鼓鞀。年過半百不稱意。明日看雲還杖藜。

江陵より
公安に移居

と。彼が江陵を以て終焉の土とせざるの心情、以て見る可き也。此の如くして彼は、同年の秋を以て、公安に移居せり。

南國晝多霧。北風天正寒。路危行木杪。身遠宿雲端。山鬼吹燈滅。厨人語夜闌。鷄鳴問前館。世亂敢求安。

と。是れ移居せんとする途次の作也。然も公安も亦た彼の意に適せざりしが如

し。其の「久客」の作に曰く、

羈旅知交態。淹留見俗情。衰顏聊自哂。小吏最相輕。去國哀王粲。傷時哭賈生。狐狸何足道。豺狼正縱橫。

賈暭より
得來る不
遇の嘆聲

願ふに「淹留見俗情」と云ひ、「小吏最相輕」と云ふが如きは、正しく彼が自から實驗中より得來りたる句ならずんばあらず。彼が如き家族を引連れ、氣位のみ高くして疎放、我儘なる食客は、一日、兩日は兎も角も、半歳、一歳とならば、何人も敬遠するを禁ずる能はざる可し。況や絶えて詩趣なく、飽迄俗情ある小吏輩に於てをや。隨處の小吏共が、此の高等食客を、厄介物視したるは、固より偶然にあらざる可し。然も是れ豈に小吏の罪ならん哉。

一一四 最後の杜甫

五律中の
白眉岳陽
樓の詩

彼は、大歷三年の冬を、岳州に過せり。所謂る彼が五律中の、白眉と稱せらるゝ岳陽樓の詩、

昔聞洞庭水。今上岳陽樓。吳楚東南坼。乾坤日夜浮。親朋無一字。老病有孤舟。戎馬關山北。馮軒涕泗流。

右臂偏枯
半耳聾

の作は、此際に成りしもの也。其の雄渾、豪邁の氣魄は、四十字の中に横溢す。彼の詩腸や、未だ必ずしも枯渴したりと云ふ可らず。而して彼は、大歷四年正月、岳州より、潭州に赴けり。彼は、長沙に抵り、岳麓山に上り、道林寺を訪へり。而して彼の身體も、今や愈々老境の侵す所となれり。彼は自から嘆じて曰く、『此身飄泊苦西東。右臂偏枯半耳聾。』と。彼は未だ幾ならず、又た去りて、衡州に入れり。然も衡州の夏は、彼の堪へ難き所也。此を以て暑を避けて、再び潭州に回れり。而して彼は大歷五年の春を、長沙に過せり。其の清明の句に曰く、『著處繁華於是日。長沙

落花時節
又逢君

千人萬人出。渡頭翠柳艷。明眉爭道朱。歸騎響。』と。而して彼は、樂工李龜年に逢うて、歌うて曰く。

岐王宅裏尋常見。崔九堂前幾度聞。正是江南好風景。落花時節又逢君。と。願ふに彼等曾て與に、開元、天寶の盛時、長安に於て遭逢したるもの、今や白首江湖の間に相見る、豈に一片の感慨なからん哉。而して四月には、臧玠の亂を避けて、再び衡州に入り、方さに、郴州に向ひ、舅氏崔偉に依らんと欲し、未陽に至り、方田驛に泊せり。

彼の死時
と死處

杜甫の死時、及び死處に就ては、多少の疑問なしとせず。姑らく新唐書本傳によれば、

大歷中、出瞿唐、下江陵、泝沅湘、以登衡山、因客未陽、游嶽祠、大水遽至、涉旬不得食、縣令具舟迎之、乃得還、令嘗饋牛炙白酒、大醉一夕卒、年五十九。

舊唐書本傳に曰く、

扁舟下峽、未維舟而江陵亂、乃泝沿湘流、遊衡山、寓居未陽、甫遊岳廟、爲暴水所阻、

旬日不得食、未陽令知之、自權舟迎甫而還、永泰二年昭牛肉白酒、一夕而卒於未陽、時五十九。

更らに元稹の墓誌に曰く、

扁舟下荆楚間、竟以寓卒、旅殯岳陽、享年五十有九。

と而して彼の爲めに辯ずる者曰く、彼の詩集には、『聶未陽以僕阻水、書致酒肉、療飢荒江、詩得代懷、興盡本韵、至縣呈聶令、陸路去方田驛四十里、舟行一日、時屬江漲、泊於方田』の詩の題辭あれば、彼は此地に死せりと云ふ可らず、而して爾來洞庭湖を過ぎるの作あり、『風疾舟中伏枕』の作あるより見れば、彼は、大歴五年の秋、舟荆楚に下り、竟に寓所にて卒したるを以て、精確となす可き也と、されど杜甫の詩に就て、最も馮據者の權威を有する錢謙益の如き、

以詩考之、大歴四年、公終歲居潭、而諸譜皆云、是年春入潭、旋之衡、夏畏熱、復還潭、則又誤認回權詩、爲是年作也、作年譜者、臆見揣度、遂奮筆而書之、其不可爲典要如此、吾斷以史誌爲正、曰子美三年下峽、繇江陵公安之岳、四年之潭、五年之衡、卒

彼の爲めに辯ずる者

錢謙益の說

趙翼の說

於未陽殯於岳陽、其他支離傳會、盡削不載可也、當逆旅顛頓之日、涉旬不食、一飽無時、牛肉白酒、何足以爲詬病、而雜然起爲公諱。

と云ひ、趙翼は又た、

迨至湖南、則更流徙丐貨、朝不謀夕、遂以牛肉白酒、一醉飽而沒、天以千秋萬歲名、榮之於身後、而斗粟尺縑、偏斬之於生前、此理不可解也。

彼の窮死は事實

と云へり。要するに彼が未陽に於て、白酒牛肉に酔飽の後、直ちに卒したるにせよ、將た未陽を去り、再び荆楚に至り、寓所若くは舟中にて卒したるにせよ、彼が窮死したる事實に於ては、何等の相違なき也。斯る穿鑿は、吾人が今茲に深く立ち入るの、必要を認めざる所也。但だ彼が最後の十三年を、全く放浪生活にて送り、遂に再び長安に歸るを得ずして、逝きし事實を、是れ悲しむ可きのみ。「雲白山青萬餘里、愁看直北是長安」と、彼は最後迄、長安の天子を懷ふことを、忘れざりし也。

愁看直北是長安

支那歴代の詩と其の概念

支那上代の文化の絶頂たる周

第十章 支那詩概観

一一五 詩

經

吾人は今や杜甫の詩に就て、觀察す可き機會に到達せり。されど杜甫の詩は、天地間一個の詩人、杜甫其人の産物たると同時に、唐代文化の産物たり。唐代文化の産物たると同時に、歴代詩詞を集めて大成したる也。されば杜甫の詩を知らんと欲せば、先づ支那歴代の詩に就て、概念を有せざる可らざる必要あり。請ふ吾人をして、極めて簡明に、其の原委を語らしめよ。

周以前に就ては、寧ろ考古學者の穿鑿に一任せむ。蓋し周は、支那上代文化の絶頂にして、孔子の所謂「郁々乎」として文なる哉の語、吾を欺かざる也。而して周代の思想、及び生活の最も眞率に、最も露骨に現呈せられたるもの、蓋し詩經に若くはなし。孔子が詩三百篇をば、思無邪の三字にて蔽ふと云ひしは、畢竟有の

祖那詩經は支那詩賦の

周代の代表的詩歌

儘に、作り飾らざる實情、眞狀の吐露、暴露を意味したるならむ。之を外にしては、左傳と論語とあり。されど左傳には聊か芝居氣あり。論語には頗る説教氣あり。若し純粹に近きものを求めば、詩經に若くはなき也。それにしても、吾人は孔子が刪定せざりし原稿の詩經を見る能はざるを遺憾とするのみ。

詩經は實に支那に於ける、總ての詩賦の祖也。周禮によれば、太師六詩を掌りて以て國子を教ふ。曰く風、雅、頌、比、賦、興、毛詩の大序に、之を六義と謂ふ。風とは則ち閭巷、風土、男女情思の詞也。雅とは則ち朝會、燕享、公卿、太夫の作。頌は則ち鬼神、宗廟、祭祀、歌舞の樂也。賦は則ち直に其事を陳べ、比は則ち物を取りて比と爲す。興は則ち物に託して詞を興す。後來支那の詩賦を説く者、遂に此の六義の範疇を出づる能はざる也。

詩經の詩は、現在三百五篇にして、正風あり、變風あり、小雅あり、大雅あり、商頌あり、周頌あり、魯頌あり。下は周代採詩官によりて、採拾せられたる、閭巷小民の情歌あれば、上は朝廷郊廟の樂歌あり。其數必ずしも多しと云ふ可らざるも、殆ん

悠々蒼天此何人哉

父子恩愛の情

んど周代の代表的詩歌は、擧げて漏らす所なし。識者之を以て、我が萬葉集に比するもの、中らざるも遠からざる可し。吾人は之を誦する毎に、未だ曾て周代の活ける社會を、眼前に髣髴せずんばあらず。

靜女其嬈、貽我彤管。彤管有煒、説擇女美。

此の如き情歌めきたる、男女相愛の文句あるかと思へば、又た彼黍離離、彼稷之苗、行邁靡靡、中心搖搖、知我者、謂我心憂、不知我者、謂我何求、悠々蒼天、此何人哉。

の如き感慨無量の詞節あり。是れ蓋し王室式微、舊都荒涼、周の東遷を悲み詠じたる也。

出其東門、有女如雲。雖則如雲、匪我思存。綈衣綦巾、聊樂我員。

鄭國の耽溺社會にも、亦此の如き貞操を重んずる、男子ありし也。

陟彼砠兮、瞻望父兮。父曰嗟予、子行役、夙夜無已。上慎旃哉、猶來無止。

何れの時、何れの世なりとも、父子恩愛の情は、人類の存する限りは、存するもの

隱退靜修の君子

と知る可し。
衡門之下。可以棲遲。泌之洋洋。可以樂飢。
如何なる奔競の社會にも、亦た斯る隱退靜修の君子なきにあらざる也。若夫れ雅頌に至りては、

無念爾祖。聿修厥德。永言配命。自求多福。

とは、是れ周公が、文王の德を頌して、成王を戒訓したる金言也。

周初興國の氣運を道破す

牧野洋洋。檀車煌煌。駟騶彭彭。維師尙父。時維鷹揚。涼彼武王。肆伐大商。會朝清明。の如き、實に周初興國の氣運を道破して、剩ます所なし。之を彼黍離離に比して、其の盛衰興廢の如何に人心に影響を與へつゝあるかを見よ。

北山之什と賦的精神的稀薄

吾人は「北山之什」を読み、「大夫不均。我從事獨賢」に至り、又た「嘉我未老。鮮我方將。旅方剛。經營四方」に及び、王が其の勞働を一般に、公平に、分配せずして、己れ一人にのみ申し附くるを、怨むの情を察し、竊かに同情を表すると同時に、其の餘りに賦身的精神の稀薄なるを嘆惜せずんば、是れ豈に支那氣質

維仲山甫。柔亦不茹。剛亦不吐。

たるものにあらざるなき乎。若夫れ「崧高」「烝民」の章の如き、何れも大文字にして、特に

人亦有言。柔則茹之。剛則吐之。維仲山甫。柔亦不茹。剛亦不吐。不侮矜寡。不畏彊禦。の如き、實に仲山甫其人、政治家的資格を表彰して、餘蘊なし。此の如き人物にして、始めて衰職の闕けたるを補ふを得可きのみ。

一一六 周 秦 楚

春秋時代
と三個の
要素は周
秦楚

若し詩經を詩の太祖とせば、離騷は詩の太宗也。要するに離騷は楚國の詩經也。春秋時代に於て、吾人は少くとも三個の要素を看取せざる可らず。第一は周人也。周人の中には齊、魯、鄭、衛、晉、宋等の諸國をも包含する也。第二は秦人也。第三は楚人也。戰國時代に迫んで、周の勢力は消衰して、遂に秦楚兩國の決闘となれり。最初に秦の始皇、楚を亡ぼし、次ぎに楚の項羽、秦を滅ぼし、而して漢高亦た秦の餘勢を藉りて、楚を滅して、天下を統一せり。爾來其名は漢の天下なるも、其の法度は概ね秦ならざるはなし。則ち秦の天下と云ふも、亦た妨げなかる可し。漢に次ぎて來る者、何れか秦の法度に準據せざる可き。彼等は言に咎めて、實は之を學びし也。

周の文弱
と秦楚の
勇武

周の素質は文弱也。武王の鷹揚は、唯だ一時の事のみ。而して此の文弱なる周の版圖に籍して、勇武なるもの、北に秦あり、南に楚あり。前者は北方の強にして、後

秦の勇武

者は實に南方の強也。秦は從來牧馬の族たり、襄公に至り、周の平王を救うて功あり、封せられて諸侯と爲る。穆公に至りて、西戎に覇たり。如何に其の俗が、勇武なりしかは、詩經の秦風に、三百篇中、一種出色の文字あるを見て知る可し。

豈曰無衣。與子同袍。王于興師。修我矛戟。與子偕行。

豈曰無衣。與子同澤。王于興師。修我矛戟。與子偕作。

豈曰無衣。與子同裳。王于興師。修我甲兵。與子偕行。

秦人の『同仇』の精神を以て、周人の『大夫不均』に比較せよ。此の團體思想と、彼の個人思想と、何ぞ斯の如くそれ隔絶するや。

東洋に於
ける羅馬
人

秦人は、東洋に於ける羅馬人也。彼等は公戰に勇にして、私闘に怯也。而して最も法度を重んじ、遵法的精神に饒めり。彼等は自から法度を制する、獨造的才能を有せざりしに拘らず、能く他の人材を採用して、其の力を竭さしめたり。前に商鞅あり、後に李斯あり。周以後、支那の實際の政治は、周公、孔子に負ふよりも、寧ろ商鞅、李斯に負ふ所の、多大なるを見る也。而して若し韓非子——韓の公子なるも、

韓非子と
屈原の離